

小西芳之助導源

エペソ人への手紙

講解説教

小西芳之助導源

エペソ人への手紙

講解説教



高円寺東教会門前における小西先生（昭和51年6月27日）



高円寺東教会の責任役員達とともに（昭和49年12月22日）

主イ夫と

導源

よふをばけまん

けふもまゝい

手にくるわさも

みなをよひつゝ

一九七三年七月三日
山口周三先生元悦赴任に際し

まえがき

パウロ書簡のうちエペソ書は、ピリピ書、コロサイ書、テサロニケ前後書と共に、通常獄中書簡と呼ばれています。それは、使徒パウロがローマ人等によつて捕えられ、獄中で書かれた書簡であるからです。多数説では、パウロがローマ幽閉中紀元六一、二年頃書かれ、同労者テキコにより、エペソの教会に届けられ、その後他の教会にも回し読みされたと言われています。

それが、今、私たちの手元にも届けられ、これから使徒パウロによつて述べられた福音の真理を学ぼうとしているところです。小西芳之助先生が、しばしば言われましたように、福音に関する知識を得ようとするのではなく、地上の真理を越えた天上の真理を、聖霊によつてお受けしたいものです。

小西先生は、エペソ書講解第二四講で「エペソ書大観」として、次のような意味のことを強調しておられます。まず、ロマ書を読んでから、エペソ書を読むこと。キリスト教の基礎はロマ書であり、その基礎が不十分では、上に建つものも不十分になるからである。

エペソ書の前半一章から三章は、信仰すなわち贖いに関することが書かれており、後半四章から六章は信仰に裏付けられた行ない、即ち目の前に与えられたなすべきことについて述べられている。

そして、「聖書の真理は、聖書によつて分かる」と強調しておられます。私達はこのようにしてエペソ書における福音の真理を学びたいと思います。

小西先生の聖書講解が書籍としてまとめられたのは、一九七三年三月、「ローマ人への手紙略記」が初めてで

した。この書は、高円寺東教会の教会誌「よろこび」の二二五号から二四三号を主体に編集したものでした。その後、一九七五年五月に、「よろこび」二三五号～二八三号を主体に編集した『ローマ人への手紙略記（別冊）』が発行されました。先生は、その後三回目のロマ書講義を予定し、それを期待しておられましたが、肺炎のため、一九八〇年四月九日に天に召されました。

その後、集会は石館基兄のお宅で、小西先生の聖書講義の録音テープをお聞きする会として、継続されました。そして基兄の御尽力により、私達は『ローマ人への手紙』『コリント人への第一の手紙』、『同第二の手紙』『ガラテヤ人への手紙』の録音テープによる講解説教をお聞きすることが出来、それらの説教は編集製本されました。

その後基兄はご自宅を高円寺から調布市に引っ越されたこともあり、集会の場所は、目黒区今井館に変更され、今日に至っております。このことは、基兄のご示唆もありましたが、山口周三兄のご尽力によるものです。しながら、石館基兄は、二〇一四年二月天の国に旅立たれました。何時の日か私どもも彼の国において、基兄に心からのお礼を申し上げたいと思っております。

本書は、今井館の高円寺東集会で、テープ起しをしながら聞いたエペソ書講解説教を一冊の本にまとめたものであります。したがって、本書は、石館家庭集会で出版した『ロマ書』『コリント第一の手紙』『コリント第二の手紙』『ガラテヤ書』に続くものであります。小西先生の天国からの伝道は今も続いています。

本書をお読みくださるお一人お一人の上に聖霊豊かに降り、聖書の真理の一端を知ることが出来、神の御恵みが豊かにあらんことを祈ります。

二〇一五年六月

編集幹事 佐生健光

目次

講解説教

表題

聖書の箇所

頁

第一講	挨拶	第一章一節―二節	1
第二講	恵みの讃美(一)	第一章三節―八節	13
第三講	恵みの讃美(二)	第一章九節―一四節	22
第四講	感謝と祈祷(一)	第一章一五節―一九節	31
第五講	感謝と祈祷(二)	第一章二〇節―二三節	38
第六講	神による新生(一)	第二章一節―七節	44
第七講	神による新生(二)	第二章八節―一〇節	55
第八講	教会の単一性(一)	第二章一節―一三節	65
第九講	教会の単一性(二)	第二章一四節―一八節	74
第一〇講	教会の単一性(三)	第二章一九節―二二節	83
第一一講	神の奥義と伝道者(一)	第三章一節―七節	92
第一二講	神の奥義と伝道者(二)	第三章八節―一三節	98
第一三講	エペソ教会への祈りと神への讃美	第三章一四節―二一節	109
第一四講	信仰生活の基礎(一)	第四章一節―一一節	117

第一五講	信仰生活の基礎 (二)	第四章一節―一六節	126
第一六講	信仰生活の基礎 (三)	および この彼岸中の一大発見	
		第四章一七節―二四節	
		ロマ書三章二二節、一〇章一二節	135
第一七講	悪を避け、人を許せ	第四章二五節―三三節	146
第一八講	己を神にささげよ	第五章一節―六節	160
第一九講	光の子のごとく歩め	第五章七節―一四節	173
第二〇講	知者のごとく歩め	第五章一五節―二一節	181
第二一講	夫婦関係その一	第五章二二節―二七節	191
第二二講	夫婦関係およびその他の家族関係	第五章二八節―六章九節	201
第二三講	主にありて強かれ	第六章一〇節―二四節	212
第二四講	エペソ書大観	第五章一、二節	219

第一講 挨拶 第一章一節―二節

(昭和五一(一九七六)年六月二三日)

【祈り】 在天の父様、新緑麗しき初夏の聖日のあした、おちこちより熱心なる兄弟姉妹をお集めくださいまして、ともに讚美をなし、ともに祈り、ともに聖書の真理を学ぶ集会を頂きましたことを御恵みと感謝を致します。

しかるに語るころ、誠に貧しくございまして、パウロの遺しました聖霊の文字である真理の御言葉を語るに誠にふさわしくないものでございますけれども、司会者が祈られましたごとく、終始聖霊の御導きによりまして、われわれはこれを少しく理解することができるよう、聖霊の御導きを御名によって祈り奉る。アーメン。

このエペソ書の第一講の第一章一節、二節のこの挨拶を、一〇年前の一九六六年一〇月の第三日曜日に講義いたしました。昨日その講義を、テープになっておりますものから、聞きました。一〇年たっております、元気でこうしてまた同じところを復習させていただきますことを非常にうれしく、かつまた、自分も健康を許されて、この一〇年間守られてきました。

特にこの過去一〇年間におきましては、一九七一年、七二年とロマ書の第二回の講義をさせていただきます、そしてここにもまた、エペソ書を復習させていただくということを誠に幸せと思えます。

ご存じのとおり、素人の牧師でありまして、誠にふつつかな聖書講義を続けておりますが、皆様が辛抱してこれを聞いていただきまして、誠に感謝しているわけであります。

一〇年前には、一九七一年、七二年のロマ書講義がすめば、四福音書へ入ると申し上げ、パウロの書簡は勉強しないということを、ずっと前に申し上げておきましたのですが、考えが変わりまして、もう一度一九八一年、

八二年にロマ書の第三回の講義をさせていただきたいと考えが変わりましたから、またパウロ書簡を全部勉強しているわけであります。誠に私の勝手をお許しいただきまして、皆様に何遍もパウロ書簡を聞いていただきまして、ご迷惑でございますけれども、一緒にやりたいと思います。

今日のところは、一〇年前にはちょうど一〇月第三日曜日に当たっております。一〇月の第三聖日というのは、私が大正六年に初めて教会へ行った日曜であり、初めて牧師の説教をしたのも一〇月の第三聖日でありましたものですから、私のキリスト教信仰について、初めに根本的な問題について話します。その次に、タイトルが「エペソ書大観」となっていますが、エペソ書がどんなものであるかというお話をして、第三番目に今日の挨拶の第一章一節、二節と、この三つについてこの前話しておりますから、本日もそういうふうな三つのことについて申し上げようと思います。

○私のキリスト教信仰の根本問題

第一の私のキリスト教信仰の根本問題につきましては、今日は私が初めて教会へ行き始めてから、六〇年目になる。この前の時は五〇年前、今回は六〇年前になります。正確に言えば、六〇年目になります。大正六年のことですから、一九一七年でございます。

その時、教会へどういう目的で行ったかというと、英語を勉強したいからでした。外交官を希望しておりましたから、英語を勉強したいという目的と、聖書を勉強したいこと、二つの目的で教会へ行った。この六〇年たちまして、英語も捨てずに、キリスト教も捨てずに、両方とも少しずつ学ばせていただいた。私は英語と聖書の勉強というものは、キリスト教の勉強とよく似ていると思います。英語は英語で勉強しなければいけないし、キリ

スト教は聖書、聖書で勉強しなければいかん。自分の考えを混ぜるといかんということをこの頃痛切に学んできているわけがあります。

われわれが英語を勉強するのは、少し前に英会話を毎朝、一〇年間やりましたが、七年目頃になったら、娘が「お父さんの発音が先生にちょっと似てきたなあ」と言って笑ったんです。娘は幸いに女子学院で初めから英会話は西洋人について習いましたものですから、調子が本当の英語の調子になっているんです。私は田舎の中学で育ちましたものですから、もう毎朝やっておりましたが、七年目頃に先生の発音に似てきたと、娘が「お父さんの発音、先生に似てきた」と、言ってくれました。

そういうわけで、少なくとも私の発音は学ぶのに七年間かかった。そういうわけで、なかなか英語にならない。われわれのキリスト教も自分ではキリスト教を勉強しているように思っていますけれども、われわれのキリスト教の学び方というのは非常に人間的な、この世的なキリスト教になっている。

ですから、聖書に与えられているところの力とか、平安とかいうものは臨んでこない。御利益がない。そうです。ですから、お互いに何遍やってもやり過ぎるということはない。特にパウロの書簡は、これはもう何十遍、何百遍、何千回やっても、やり過ぎるということはありません。われわれの考えはこの世の考えになっている。

根本問題のついでに、この前の私のガラテヤ書大観について、少し申し上げたい。ガラテヤ書の最後の文句に、六章の最後のところに「わたしは十字架につけられて、十字架だけがわたしの信仰だ。十字架だけ、これだけを宣伝している」と、「十字架のあがないだけを宣伝しているので、生きているんだ」と、「世の中は私には十字架につけられているし、私は世の中に対して、十字架につけられている」と言っております。

これは少し分かりやすく言えば、この世は私に魅力はないし、私もまたこの世に魅力がないということです。

そうですから、信者というものは、この世に魅力がない、そういうクリスチャンにならないといけない。そういうクリスチャンが本当に世の中のためになる、そういう人が本当に世の中、人類に益する人になる。

そういうことも聖書の言葉によってクリスト教を理解する。クリスト教というのは聖書の理解です。そういつて聖書は聖書によって理解する。そうですから、聖書をいくら勉強しても、勉強しすぎるといことはない。それは英語は英語であって勉強するのとはよく似ている。

この点は、言葉はまずいですが、われわれは生まれつき、この世が中心になっている、この世というものに興味があるんです。聖書は天国、永遠の命を与える、ということを書いている。聖書は、永遠の命のことを書いている。

私たちはこの世のことで、この世で、安心を得たい。この世でいいことがしたい。この世で人に立派なことをして、この世で私たちのことを考えている。聖書とは全然違う。聖書は西を向いているし、われわれは東を向いている。だから、われわれが西を向くためには、何百遍であつても繰り返し返さなければ、西を向かない。

私がいつも言うとおり、英語の Good Morning ですが、これは十遍や百回言ったところでもものにならない。私は少なくとも一万遍言わなければ、Good Morning にならんだろうと思う。それほどわれわれは日本語にずつとかじりついている。しかし、聖書について学んでいるうちに、自然と英語になってくる、自然と天国になってくる。

そうですから、繰り返し、繰り返し、学ぶ。それほどわれわれの心は地に着いている。自分に着いている。「『わしは目が見える』』と言うから、おまえは罪が残っているんだ。おまえはめくらなんだ。めくらのくせに、『俺は見える』』と大きなことを言っているから、おまえの罪は残っている」ということをイエス様はお教えにな

りましたが、われわれはキリスト教を五年、一〇年やったら、ちよつとわかつたような気になる。わしはキリストチャンだ、というような気分になっている。

だから、どうしても中学一年生が英語を学ぶ態度、小学生がいろはを学ぶ態度で聖書を学ぶということが、これが根本的に死ぬまで必要です。なぜか。われわれは東を向いている。聖書は西を向いている。方角が違う。そうですね、われわれは学ぶ必要がある。謙遜になって、学ぶ必要がある。そういうことを第一、根本的に学びました。くだいようですけれども、もう一遍これが非常に大切です。

私の長男が中学で理科の教員をやっておりますが、音楽の先生も私の長男も関西育ち。言葉は関西弁。そうですから、その音楽の先生が「私の言葉はだいぶ標準語に近いけれども、小西先生の言葉ときたら、まるでもう関西弁丸出しですなあ」と言って話をしている。そしたら伝一、私の息子が「お父さん、その先生の言葉ときたら、まるで関西弁そのままなんです。関西弁そのままであつて、私のことを『小西先生のは関西弁だ』と言うからおかしくて」と私に言っていたのです。

これは人ごとではない。われわれのキリスト教しかり。人はよく見えるんですよ。「あいつはまだ信仰できたらんなあ」と、人はよく見えるけれど、自分にはちつとも見えておらない。自分はその人よりもう一つひどいんですよ。私の息子の中学校において、その音楽の先生の関西弁と伝一の関西弁とどっちが関西弁かということを、私は聞いておりませんから批判できませんが、だいたい猿の尻笑いとどっちも同じようなことだろうと思う。

ところが本人は「いや、俺は相当標準語を話してる」と思っている。ところが、人が聞けば、もう本当に関西弁の調子そのまま出ている。言葉というのは、本当にこれはわれわれ、クリスチャンは注意しなければいけない。われわれのキリスト教というのはキリスト教ではありません。「私チャン」です。私の信仰、私の道徳、私

の何かを振り回している。そうですから、そんなものは何十年やっても進歩しません。

その人の日々の行ないを見たら分かる。己に克つという精神が現れてこない。己に克つという精神が書いてある聖霊の結ぶ実がない。むちゃくちゃやっていますから。これは牧師がむちゃくちゃやっていますから、この教会のクリスチャンが皆、むちゃくちゃやつても責めませんけれど。それは私が間違っているんだから、今は責めませんが、あまり猿の尻笑いにならないように、お互いに注意しないとイケない。

○エペソ書大観

それから、第二番目のエペソ書大観。エペソ書といったら、どんな手紙であるかということ。エペソ書というのは、いろいろな学者の説がありますけれども、だいたいエペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ヘブル書とこの四つは、パウロが最後にローマにおいて、ローマの牢獄に繋がれていた時に書いた書ということになっている。

そして、エペソ教会というのは皆さんご存じのとおり、パウロが第二回伝道旅行のときにエペソで伝道をして、第三回伝道旅行のときには三年間もここにおった。そして、彼が最後にエルサレムに上るときに、近くの港からエペソの長老を呼んで、劇的な別れをやった記述を使徒行伝と一緒に学びましたが、そういうふうにはエペソ教会はパウロと非常に関係深い教会なのです。その教会に宛てて書いた。

「エペソにいる」というあの一節をきょうの挨拶で学びますが、信頼すべき原本に、エペソという字がない。そうですから、「エペソにある兄弟」という句を、ギリーク（ギリシヤ語）の原本では「エペソ」のスペルには括弧が付いておりますし、Revised Standard Version では「エペソ」は取ってある。エペソという字は抜いてあります。

日本語の聖書には「エペソにいる聖徒たちへ」と書いてあります。日本語の口語訳聖書にはエペソと付いてあります。要するにこれは、エペソにある教会に宛てたというよりは、このエペソという字がなかったら、その地方の教会に全部に、エペソとその辺の教会に宛てたというのが適当かも知れません。

これは特別に、ロマ書のように、あるいはガラテヤ書のように、あるいはコリント前後書のように、特別な目的があつて書いた書物ではないのです。これはパウロの信仰、聖書、彼の持つてゐる信仰を知らせるために書いた。パウロの晩年のものとも高い信仰が現れている書物と、学者は皆そう言つておられます。これはそういうパウロの信仰を書き表した書物と見ていいのであります。そういうパウロの最も高い標準の信仰が出ている。

初めの一節、二節はこの挨拶ですが、あと本論へ入りまして、一章、二章、三章はその信仰について書いています。そして四章、五章、六章と後の後半三章には、行ないの問題について書いています。そういうふうになつてゐるものであります、それについてこれからぼつぼつ勉強していきたいと思います。それがエペソ書についてであります。

それから、第三番目に、本日エペソ書第一講としまして、第一章一節と二節について、きょうは簡単に学びたいと思います。

全体についてもう一つ言わせてもらえば、このキリスト教信仰、聖書を学ぶのに、一番初めにやはりこのエペソ書の如きパウロの書簡を学んだらいいと思います。一番初めに、何遍も言うことですが、英語を学ぶつもりで勉強せよと私は言うのですが、そのつもりで英語の textbook、教科書の第一巻はパウロの手紙、ロマ書が私はいと思います。

ガラテヤ書でもいいし、エペソ書でもよろしい。要するにこのエペソ書がいいでしょう。これからキリスト教

を学ぶ。そうすると、キリスト教の西向きということがはつきりする。

福音書から入っておりましたら、東に向いたり、西を向いたり、文句が両方に解釈できますから、聖書を初めに学ぶのに福音書は不適當です。パウロの書簡から学んだらよろしい。first book, textbook はやっぱり一番始め、易しい根本的なものから学んだほうがいいですから、キリスト教の textbook として、このエペソ書は、第一巻として誠に適當な書物であると思います。

そういう意味におきまして、「われわれはもう自分の中ではわかつている」「俺は信仰を分かっている。何遍も同じものを聞くのはいかん」というのではなしに、「私は何も知らない。私はキリスト教は何も分かておらない」と、「これからキリスト教を学ぶんだ」というつもりで、これから一緒に学びましょう。

私もそのつもりでおります。私もこれから何も知らないから学ぶんだ、というつもりでこれから勉強する。そうですね、皆さんもこれから一つずつ、「私はキリスト教のいろはを学ぶんだ」というつもりで勉強したいと思います。これがエペソ書大觀。

○一章一節、二節について

第三番目が、今日の一章一節から二節。この一節、二節にエペソ書全体が収まる。あるいはパウロの書簡が全部収まる。あるいは聖書全部が収まるというわけになる。一節、二節はそういう重さを持っている挨拶です。

○一節「神の御旨によるキリスト・イエスの使徒パウロから、エペソにいる、キリスト・イエスにあつて忠実なる聖徒たちへ」。

発信者、それから手紙を受ける人、これが一節であります。

○二節「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように」

これが挨拶の内容であります。

一節の「神の御旨による」というのは、神の御旨によっているので、私が勝手に手紙を書いて、私が勝手にやったのではない、これは神の御旨によって、手紙を書いている。

この「神の御旨による」というのは、これが自分勝手な教え、私勝手なパウロ自身の考えを振り回しているんじゃない、私は啓示を受けて、神から示された神の意志によっているんだから、私のこの福音は神の福音として信じてくれて間違いないんだ、という意味であります。

イエス・キリストの使徒パウロ。「イエス・キリストの」と言ったら、この所有格は、これはイエス・キリストに属する、イエス・キリストに属している所有物であるところの使徒パウロ。ですから、使徒はキリストの遣わされたもの、これはキリストの所有物みたいに見えますけれども、使徒と言っているのは、「わたしはイエス・キリストの代表者である」という確信があるわけです。代表者である。私のことを信じて、イエス・キリストを信ずることになるんだ、ということでもあります。

「エペソにいる」というのは、これは Revised Standard Version には「エペソ」という字が抜いてあります。「忠実なる」と訳してあります。語句の訳はもうやめますが、エペソという字が「忠実なる」となっております。イエス・キリストにあつて、忠実な聖徒。ルターは、エペソの記事を残しております。ですから、エペソにいる、主イエスにあつて、忠実な聖徒たち。「聖徒」というのはいつも言うとおりの、「聖い」という意味でなく、「神に属する」という意味であります。神に選ばれたという意味であります。

内村先生が「聖器」と言われた。土で作った粗まつな、神に供える、神を祭る道具の焼き物なんかをやっぱり聖なる器と申しますから、汚い粗末なものでありましても、神のために用いる選ばれたものはそれは聖。われわ

れは聖徒であります。忠実な聖徒たち。

第二節、「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから」。この「主イエス・キリストから」と、神とキリストと二つからとなつていますが、「主イエス・キリストの父なる神から」というふうには原語では「主イエス・キリスト」という字を神にかけて、「主イエス・キリストの父なる神」と、神一人にも読めるわけですが、やっぱりこれはパウロの全体から行くと、神とキリストと二つに分けたほうがパウロの思想には合うわけでありますから、これは、神とキリストから恵みと平安とがあなたにがあるように。

「恵みと平安とがあなたにがあるように」。イエス・キリストの恵みというのは、これはイエス・キリストの贖いの恵みであります。平安というのは、イエスからその贖いの恵みをいただく、われわれは神と子とせられた信仰、復活の望みというのが出てきますから、それが平安です。そうですから、この恵みと平安とがあなたにがあるように。

要するに、キリスト教を勉強するというのは、このキリストの恵み、この贖いということを勉強する。その恵みというものが分かってきたら、神の子とされた信仰、復活の望みがいよいよ分かってきたら、われわれに平安が臨む。

イエス・キリストは「我、平安を汝らに残す。この平安は、この世が与うることはできない平安である」と言われた。そうですから、この恵みと平安というのが、これがキリスト教の全体です。

われわれは神の恵みをいただいで、そして、われわれに言うべからざる平安、神の子とされた信仰、復活の望みと、そういうものがわれわれに満ち満ちてきたときに、われわれに平安が与えられる。これがキリスト教の御利益です。

われわれは、心を検討してみたらよろしい。われわれに神の恵みが分かっているか、平安があるか。両方ともなかったら、ゼロ。それはクリスチャンではありません、求道者です。

われわれは恵みということを学ぶ。神の贖いを学ぶ。パウロの書簡というのは、恵みの展開するものです。神の恵み、贖い、これがキリスト教の全部です。これをどの程度われわれは分かっているか、ということがその人のキリスト教理解です、信仰です。それが分かるにつれて、平安が臨む。

私は古来日本で読まれている『観音経』というお経が一冊うちにあったものですから、それを折々見ていたのですが、「生老病死の苦、漸をもつて滅せしめ給う」と書いてある。生老病死、世の中の人間の、生きる、老いる、病氣、死ぬと、この四つの大きな苦しみがありますが、その苦しみは「漸を以て滅せしめ給う」。

私は内村先生が「聖霊は徐々に降る」とおっしゃったが、私はどうも『観音経』の「生老病死の苦、漸を以て滅せしめ給う」と似ていると思う。漸次に、だんだん、なくなると書いてある、『観音経』には。そうですから、われわれのこの生老病死の苦、人生の苦しみというものは、なくなる。なくなる道がある。

私はキリスト教は仏教に負けないと思う。観世音菩薩がわれわれに与うることができるその恵みを、イエス・キリストが与えることができないというはずはないと私は信じます。日本仏教はキリスト教の旧約と見てよろしい。私はそう思う。

われわれの人生の苦しみ、「漸を以て滅せしめ給う。」漸次になくなる。一度には治らんですよ、われわれの心が東を向いているのですから。われわれが西向くに従って、治ってくる。われわれが苦しい、悲しいと言ってバタバタやっているのは、東を向いているからです。東を向いてたら、この世にかじりついているから、悲しみ、苦しみがある。

キリスト教は、宗教というものは、実益がありますよ。御利益のないようなものは、やめたらよろしい。われわれは東を向いている。聖霊の助けによって、西を向かせてもらう。

【祈り】 誠に貧しきキリスト教理解を申し上げましたが、聖霊なる神よ、われわれに真理を教え給え。御名によって感謝し、お願いいたします。

第二講 恵みの讚美(一) 第一章三節-八節

(昭和五一(一九七六)年九月二六日)

本日は司会者に読んでいただきました第三節から八節までを、各節について簡単な注解を加えます。

ここは一〇年前の昭和四十一年の二月二日に私が講義しましたところであり、念のために昨日、そのテープを聞きましたが、一〇年前でございましたこの講義が誠に感銘深く、最後の祈りを市川兄弟がしてくれておりました。市川君の声もちっとも変わっていない。誠に健康を与えられて、われわれがこういう集会を持たせてもらうということがいかに幸福なことであるか、ということをして昨日、そのテープを聞いて感じたわけであります。

○三節、「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神はキリストにあつて、天上で靈のもろもろの祝福をもつて、わたしたちを祝福し」

四節から一二節まではこの三節の説明でありまして、この三節が中心的な言葉であります。

「ほむべきかな、私たちの主イエス・キリストの父なる神」の神様の恵みがパウロに本当によく分かつておりましたから、本当に神様はありがたい。「ほむべきかな」というその神を讚美する心がパウロには満ち満ちております。そうですから、パウロは手紙を書く初めにこの神の恵みを讚美したわけでありまして。

神の恵みの讚美がこの手紙の初めにありまして、これが第一章三節から一四節まで。今回と次回にもう一回学びますが、すなわち三節から一四節までが神の恵みの讚美です。

われわれの信仰というものは、だんだん神の恵みが分かるにつれて、神を讚美するようになる。神を讚美しない、

神を讚美するという心がないというのは、信仰が分かかっていないということです。それで、この初めに讚美が出てくる。

その讚美の理由は、「神はキリストにあつて、天上で靈のもろもろの祝福をもって、わたしたちを祝福した」という。パウロが神を讚美した理由は、われわれ信者を神はキリストにあつて、天上で靈のもろもろの祝福をもって、私たちを祝福した。

そうですから、これが有名な予定説の説明でありまして、すなわち神がクリスチャンを天上で靈のもろもろの祝福をもって、もろもろの祝福といつても、一つに収まります。永遠の命。その永遠の命という祝福をもって、私たちを祝福した。

なぜ永遠の命ということが分かるかというところ、「靈のもろもろの祝福」と書いてある。「靈の祝福」です。キリスト教は靈の祝福を説く。よろしいか。これが新興宗教と根本的に違うところです。

新興宗教では、家内安全、商売繁盛というこの世の幸福を主としてお説きになるようでありますが、もしそうであるとするならば、これが新興宗教とキリスト教との根本的違いです。キリスト教は、靈のもろもろの祝福をもって、われわれを祝福する。すなわち永遠の命をもって、われわれを祝福してくださった。この三節を、四節から一二節までかかって、パウロは詳細に説明する。

○四節「みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあつてわたしたちを選び
び」

この四節から六節までは有名なる予定説の説明です。

「みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあつてわたしたちを選び」

と、いつも「キリストにあつて」という字が付いてきている。キリストというものを通して、キリストにあつていつもわれわれはそういうことになる。

「きよく傷のない」。「きよい」というのは積極的に言う言葉でありまして、「傷のない」というのは消極的に言う言葉です。

「天地の造られる前から、キリストにあつてわたしたちを選び」。すなわち選ぶというものは、多くの人々のうちから選ぶ、そして、神のために選ぶ。この選ぶという字は、そういう二つの意味を持っている。

「みまえにきよく傷のない者になるよう」、これが選びの目的です。「きよく傷のない者」というのは、これは復活。イエスが復活し給うた、われわれも復活する者、復活した者、そういう者が神の前においてきよく傷のない者です。そういう者になるために選んだ。

この「きよく傷のない者」というのは、これは実際において、現実において、「きよく傷のない者」です。イエスの復活体というものは、現実においてきよく傷のない、神の前できよく傷のない、無限の力と、無限の栄光と、無限の愛とを持った者です。「きよく傷のない、神の前においてきよく傷のない者。」そういう者になることがわれわれの目的です。選びの目的です。

われわれは今でこそ罪人であつて、誠に浅ましい現状でございませけれども、われらが死して天国に生まれ、そしてキリストが来給うときに、復活したときには、キリストが復活したと同じ復活体をいただきまして、きよく傷がなく、力無限、知恵無限という本当にわれわれの理想を達成した者にしていただくのであります。これをキリスト教で救いと言うことは、いつも申し上げていることであります。

○五節「わたしたちに、イエス・キリストによつて神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするとこ

ろに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さった」。

すなわち、その傷のない者とはどういう者かというところ、神の子です。そういう傷のない神の子です。神の前に傷なく、きよい者。すなわち復活体、それが神の子です。その神の子たる身分を授ける。「神の子」、その「身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さった」。すなわち愛のうちに、あらかじめ、われわれをそういうふうな神の子、復活体をいただく者、そういう者に定めてくださったということです。

そして、この五節の「愛のうちに」という字は、原語では三つにかかり得る。「愛のうちに」というのは、「あらかじめ定めて下さった」と、ここに書いてあるように、「あらかじめ定める」という字にかかるし、また前節の四節の「わたしたちを選び」という「選ぶ」というところにもかけてもいい。もう一つは四節の初めの「みまえにきよく傷のない者になるように」と、そこへかけてもいい。三つどれでもかかる。

ルターは四節の初めの「みまえにきよく傷のない者となるように」と、その「きよく傷のない者になる」と、ルターはそこへかけて訳しました。しかし、通説は、この日本文のとおり、「愛のうちにあらかじめ定めて下さった」、そこにかかるのが普通であります。これが予定説であります。

○六節「これは、その愛する御子によって賜わった栄光ある恵みを、わたしたちがほめたたえるためである」

あらかじめ定めて下さったことは、この愛する御子によって賜わったところのこの栄光ある恵み、この恵みをわたしたちがほめたたえるためだと言うのです。

栄光ある恵み、キリストがわれわれをその永遠に傷のないきよい者、復活する者、神の子に定めて下さったの

は、この神の恵みを私たちがほめたたえるためという。

この予定説は人々の間で非常に議論されますけれども、これは神の恵みをほめたたえるためだと言うのです。これはいよいよ深く神の恵みが分かるためだと言う。神の恵みがいよいよ分かるため。よろしいか。

「ほめたたえる」という、この「たたえる」という字は、了承するとも認めるとも原語は訳せる。そうすると、「ほめたたえる」というのは、神の恵みがだんだん分かるということです。

われわれは神の恵みが分からない。何十年生きておっても、教会へ何十年来ておっても、神の恵みが分からない。神の恵みが分からないから、ほめたたえることができない。そうですから、この予定説と予定、無限の賜物をわれわれに神様が予定してまで賜ったということは、われわれが神の恵みが分かるためだということ。

私はこれを読んで、今初めて分かった。予定説というのはえらく難しい。難しい説だなあ、と今まで思っていたが、この言葉が今朝分かった。

○七節「わたしたちは、御子にあつて、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すなわち罪過のゆるしを受けたのである。」

「私たちはキリストにあつて、御子にあつて、神の豊かな恵みのゆえに」「神の豊かな恵み」というのは、パウロが非常に好きな言葉です。プルーツス、豊かな恵みという意味。私、原語が少し読めるようになったということは、これが一〇年の間の少しの進歩です。この「豊か」という字は、パウロが非常に好きな言葉です。よく出てきます。

「豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すなわち罪過のゆるしを受けたのである」。私たちはキリスト

にあつて、神の豊かな恵み、恵みのゆえにその血による「あがない」、すなわち罪過のゆるしを受けたのである。「あがない」を受けたのである。これは神の豊かな恵みのゆえにという。

この「あがない」ということが、これが福音の内容です。イエス・キリストの福音というのは、「あがない」です。「あがない」というのは、神の恵みです。この神の恵みは英語で言う Free Gift です。贈り物、プレゼントです。

プレゼントというのは、もらうほうの心の状態、行ないの状態を問題としない。もらうほうでどういうふうな心持ちになれとか、こういうふうな行ないをせよとか、そんなものをゴタゴタ条件が付いておいたら、そんなものはプレゼントと言わないですよ。

Free Gift、ただでくださる。こちらの心の状態いかに関わらず、こちらの行ないの状態のいかに関わらず、神のほうから提供してくれる。このあがない、これが福音の内容です。

○八節「神はその恵みをさらに増し加えて、あらゆる知恵と悟りとをわたしたちに賜わり」

日本語では九節に続いておりますが、原語はここで切れている。少し切れております。切れているというか、一四節まではこれはえらい長い文章。三節から一四節までは、日本語では随分長いですが、原語では one sentence、これは一文です。そうですから、所々切れている。

この「あらゆる知恵と悟りとをわたしたちに賜わり」で、ここで少し切れている。それできょうは、司会者にここで切ってもらいました。

「神はその恵みをさらに増し加えて、あらゆる知恵と悟りとをわたしたちに賜わり」。「あらゆる知恵と悟りと

をわたしたちに賜わり」というのは、あらゆる知恵と悟りとを私たちに賜って、「神はその恵みをさらに増し加えて」というのは、さらに恵みを増し加えるというよりも、だんだん、恵みがよく分かってくるということです、恵みがだんだん分かってくるという。

神が私たちに知恵と悟りとを与えて、だんだん、だんだん、神の恵みを分からせて下さる。あがないの恵みが分かるということです。

知恵、悟りです。だんだん、だんだん、神の恵みを分からせて下さるという。われわれに知恵と悟りを与えて、だんだん、だんだん、その神のあがないの恵みを知らせてくださるということです。

これがいいたい本日の三節から八節までの大意であります。

要するに、「ほめたたえる」という字。きよの讚美歌を歌いましたが、神をほめたたえる。第一にこのほめたたえるというのは、神の恵みが分かるからほめたたえる。そうですから、われわれもだんだん神をほめたたえるように、自分がありがたいと神をほめたたえるようにしていただくようにしてもらいたいと思います。

それは、われわれはいくら聞いても、ここではほめたたえておりましたが、またうち帰りましたら、もう日々の仕事に追われまして、われわれの毎日は心は乱れまして、ここにいるようにいかない。そうですから、ほめたたえる方法として神の名を呼ぶ。「わが主・イエスよ」と主の名を呼ぶということを励みたい。称名はほめたたえることにもなる。これが第一。

われわれはここでは天国の前味を味わい、ここで讚美し、聖書の真理を学んで、われわれはいかにも恵まれた状態におりますけれども、うちへ帰ればもう日々の仕事、自分の考えがまた元へ戻ります。

パウロは死ぬ前に、「われは罪人の頭」と言った。日本の源信僧都は「妄念はもとより凡夫の地体」だと言っ

た。ことほど左様に、われわれは教会ではきれいな心になっておりますけれど、うちに帰ればもう哀れな状態です。

そうですから、われわれはいよいよほめたたえる方法として、称名、主の名を呼ぶことを励みたい。これが第一の感想であります。

第二の感想は、この福音というものは賜物。さつきここで強調いたしました、すなわちわれわれの心の状態、われわれの行ないの状態と無関係に、神のほうから下さる賜物です。すなわち普通の場合は皆、これをするからこれをもらうということになる。しかし、福音はただで来る賜物です、プレゼントです。福音は、永遠の命はただで来る賜物です。そのことを私は特に感じます。

第三に感ずることは同じことでありますが、司会者、ヨハネ伝を読んでくれたまえ。ヨハネ伝六章五三節から五六節。

○司会者…ヨハネ伝六章五三節から五六節「イエスは彼らに言われた、『よくよく言うておく。人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、わたしはその人を終わりの日によりみがえらせるであろう。わたしの肉はまことの食物、私の血はまことの飲み物である。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる』」

あがないといったら、これです。イエスがご自分でこのあがないのことを説明なさっている。これはイエスの肉を食らい、血を飲むことです。もらう。イエスの肉をもらい、イエスの血をもらい、イエスの命をもらう。す

なわちあがないを信ずるということは、それは称名となって、われわれは捉えたらいい。

ここで話を聞けば、「なるほど、あがないだ。ありがたい」と言つて、このあがないのことは信じているけれど、うちへ帰れば、もう心は妄念で、もう自分の心は自分のことばかり思っている。そうですから、あがないの信仰を続けるためにも、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と主の名を称える必要がある。

このヨハネ伝六章五三節-五六節、このイエス・キリストの血を飲み、肉を食らうということは、これはあがないを信ずるということでありますが、それはどうしたらいいかというと、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と称えたらよろしい。

第三講 恵みの讃美(二) 第一章九節―一四節

(昭和五二(一九七六)年一〇月一〇日)

本日は一〇月の第二聖日に当たっておりますけれども、一〇月の第三聖日というものは、私にとっては非常に意味の深い日曜日でございます。大正六年、一九一七年の一〇月の第三聖日に、旧制の高等学校の一年生の初めでございましたが、白山教会へ初めてまいりました。これが、私が教会へ参つた始めであります。

それから三〇年たちまして、昭和二年の一〇月の第三聖日、一九四七年に当たっておりますが、この第三聖日に初めて本所緑星教会において牧師としての初めの講義をいたしました。そのときにはたぶん、今日はみえておりませんが金子長老、それに今日ご出席になつてゐる北川姉妹、きょうは八木姉妹がおみえになつていないが八木姉妹、あるいは美恵ちゃんも出席していたかもしれない。信者のお宅で話しましたのですが、それがちょうど三〇年前の第三聖日であります。

本日は第二聖日でございますので、教会へ通い始めましてから五九年、牧師をいたしました二九年のこれが最終の聖日であります。人間も三〇にして立つと申しますが、牧師生活もいよいよ次の聖日から三〇年目に入らせていただきますので、神の恵みによりまして、少しく一人前になつた伝道師にしていきたいと念願しているわけであります。

本日は、今、司会者に読んでいただきましたエペソ書の一章の三節から一四節まで、この箇所の後半を申し上げたいと思います。

すなわち一章の三節から一四節まで、これはエペソ書の初めの神の讃美、恵みを讃美したパウロの言葉であり

まして、この言葉は日本語では一〇の文章からなっており、原文では一つの sentence、一 sentence でありまして、この一つの長い文章の中にパウロは自分の信仰を全て言い表しまして、神を讚美した驚くべき文章であります。

これはエペソ書の要約であるのみならず、パウロ全書簡の要約とみてよろしい。またこれは、新旧約聖書全体の要約とみて差し支えない文章であります。

前半の三節から八節までは、前回講義いたしました。本日は九節から一四節までの大意を、皆さんと一緒に学びたいと思います。

各節につきまして、簡単な注解を加えます。

○九節「御旨の奥義を、自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示してくださいだったのである」

これは八節と関係がありまして、八節には神の恵み、神の恵みといえ、これは、終局的にイエス・キリストの贖いです。神の恵みと言え、イエス・キリストの贖いです。

八節には「神はその贖いの恵みをさらに増し加えて、あらゆる知恵と悟りとを私たちに賜り」これは前回講義いたしましたとおり、われわれに知恵と悟りとを与えて、そして贖いの恵みを増し加えるという。この言葉も注目すべき言葉でありまして、贖いの理解というのは、これは知恵です。神がわれわれに知恵と悟りとを増し加えて、贖いの深き知恵をわれわれに知らしめるという。

九節「御旨の奥義を」、奥義と言え、これは、今まで隠れていたが、今明らかにされたものを言う。それを奥義と言う。これは御旨の奥義を、その今まで隠されておった御旨を、「自らあらかじめ定められた計画に従って」、

お定めになった計画に従って、私たちに示してくださいだったのである。これはキリストによって神がその計画をお進めになる。キリストによってその計画をお進めになる、その計画に従って私たちに示してくださいだったのである。

○一〇節「それは時の満ちるに及んで実現される計画にほかならない」。

これは、イエスの再臨です。時の満ちるに従って実現されるイエス・キリストの再臨のご計画である。「それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとくキリストにあつて一つに帰せしめようとされたのである」。すなわち再臨において、天にあるもの、地にあるものを、ことごとくキリストにあつて一つに帰せしめたもうとされたのである。われわれはその再臨のその素晴らしき光景を現在見ることはできませんけれども、そのときにおいては、神は天と地にあるものをことごとくキリストにおいて一つにしたもう、驚くべき神の新しい創造であります。

○一一節「私たちは御旨の欲するままに全てのことをなさるかたの目的の下に、キリストにあつてあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである」

私たち信者は、御旨の欲するままに全てのことをなさるかた、すなわち神様、の目的の下に、キリストにあつてあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである。これが有名なカルヴェインの予定説であります。

○一二節「それは、早くからキリストに望みをおいている私たちが、神の栄光をほめたたえる者となるためである」。

これは、原語を日本文にうつすのは難しいですから、こういうふうになっておりますが、日本語では分かりま

せんけれども、詳しく言えば、「早くからキリストに望みをおく」というのは、「キリスト来給う前から、再臨以前から、キリストの再臨を望む」、次の行の「者となるためである」と、そこへ入れたらよろしい。一二節、それはキリストの再臨以前から、キリストの再臨を望む者となるためである。そのキリストの再臨を望む者となるためというのはどういうためであるかという、神の栄光をほめたたえるためであると、こう掛かります。

もう一度言いますと、一二節、それは早くから、キリスト来給う前から、キリストの再臨を望む者とわれわれがなるためである。それは、神の栄光をほめたたえるためである。この神の栄光をほめたたえるというのは、これは最後の目的です。

○ 一三節「あなたがたもまた、キリストにあつて、真理の言葉、すなわち、あなたがたの救いの福音を聞き、また彼を信じた結果、約束された聖霊の証印を押されたのである」

今度は「あなたがた」という字に変わっていますが、今まで「私たち信者が」であつたが、今度はあなたがた、手紙を受け取る信者がた、受け取る「あなたがたもまた、キリストにあつて、真理の言葉、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、」あなたがたの救いの福音」というものは、これは真理の言葉です。真理の言葉である、あなたがたの救いの福音を聞き、そしてその福音を信じた結果。福音というのはイエス・キリストの贖いです。イエス・キリストの贖いを聞き、その贖いを信じた結果、約束された聖霊の証印を押されたのである。その贖いを信じた結果、約束された聖霊の証印、聖霊を与えられた。その聖霊を与えられた、証印を押された。押されたその証印は、「わが主イエスよ」とわれは主の名を称えるようになった。すなわち、君たちは、約束された聖霊を受けて、「わが主イエスよ」と称えるようにされた。

○一四節「この聖霊は、私たちが神の国をつぐことの保証であって、やがて神につける者が全く贖われ、神の栄光をほめたたえるに至るためである。」

これも贖われるためである。これを先に言つたらよしい。「この聖霊は、私たちが神の国を継ぐ保証であつて、やがて神につける者が全く贖われ」というのは、復活せしめられるためである。その復活せしめられるというためには、「神の栄光をほめたたえるためである」、とこう掛かります。前と同じことです。前の一二節の再臨を待ち望む者となるためである。

もう一回。この聖霊は、私たちが神の国をつぐことの保証であつて、やがて神につけるあなたがたが全く贖われ、復活せしめられるために、復活に至るためである。これは神の栄光を君たちがほめたたえるためである。

以上、これが文章の大意であります。

この三節から一四節まで、これはまことに重い言葉でありまして、キリスト教の救いがこんなに明瞭に書き表されている場所は、私は新旧約聖書に無いと思います。一つの文章に、これだけ救いの内容を明確に書き表される。キリスト教の救いを、本当に神様から聖霊を頂いてもらっているパウロが、一文に救いを書き表した場所です。

キリスト者としてこの文章が分からないというようなことでは、これはまだクリスチャンとは言えない。この文章が、キリスト信者と未信者とを分ける、これが私は鍵になると思います。どうぞ、これは日本人のみならず、外国語もお読みになれますから、ひとつ外国語の聖書の文と一緒に合わせて、繰り返しこれを読んでいただきたい。ここにキリスト教の全てが言い表されている。

ちよつと注意いたしますと、ここに「贖い」という字が二回出てきている。そして、これは七節と一四節とに

「贖い」という字になって出ております。六節には「栄光ある恵み」と言って、贖いという字は出ておりますが、要するにここに「贖い」という字で二回、「栄光ある恵み」で一回、三回この文章の中に贖いという字が出てきている。

そうですからキリスト教の言う「福音」というのは、贖いのことです。キリスト教の福音というものは、内容は贖いのことです。ある信者が「小西牧師は贖いという喜んでる」と言われましたが、そうです。私はもう、他のことはおっしゃらんでもよろしい。イエス・キリストの贖いと言って受け取ったら、私は嬉しい。私の伝道の目的は達せられた！

六節のところ、贖いというのはこれは「愛する御子によって賜った栄光ある恵みを、私たちがほめたたえるためである」。すなわちこの贖いの恵みです。恵みというのは、これは天において既に計画され、そしてイエス・キリストにおいて実行された、すなわち神の計画の実現です。

そして、それがよいイエス・キリストによって実現いたしましたして今度は、贖いを受けるといえるのは、七節「わたしたちは御子にあつて、神の豊かな恵みのゆえに、その血による贖い、すなわち罪過のゆるしを受けたのである」。これが信仰です。これが、すなわち救われたことです。私たちは御子にあつて、神の豊かな恵みのゆえに、その血による贖い、すなわち罪過のゆるしを受けたのである。私たちは贖いを受けた。ここ（七節）に「贖い」という字が出てきております。

この七節の受けた贖いが、この世において信じて受けた贖いが、今度は一四節で完成した。キリスト来給うときに、神につける者、すなわち贖いを受けとるものが全く贖われ、復活せしめられるためである。

そうですから、われわれが信者になるということは復活するためです。キリスト来給うときに復活して、キリ

ストが復活し給うた同じ復活体をいただくこと、これをキリスト教では「救い」と言う。それ以外を救いと言わない。われわれは「救われた」と言ったら、このことを言う。ここに、「贖い」という字が三回出てきておりません。

それから第二に、「ほめたたえる」という字がまた三回出てきている。ほめたたえるというのが三回。

第一回には六節、これは、「その愛する御子によって賜った栄光ある恵み、贖いを、私たちがほめたたえるためである。」贖いをほめたたえる、この「ほめたたえる」という字は、認める、それをそうだと本当だと認めるという意味がある。この言語は Recognition、Recognize という意味があるのです。そうですから、贖いをほめたたえると言ったら、贖いを認める、本当だと認めるためであるという。これが第一回目の「ほめたたえる」。

第二回目は、一二節「それはキリスト来たもう以前からキリストを待ち望んで、再臨を待ち望む者となるためである」。すなわち再臨、キリスト来給うことを待ち望む者となるためである。そして、それは神の栄光、神の栄光と言ったら贖いの栄光です。贖いと言ったら、その神の素晴らしい栄光をほめたたえるためである。この第二回目のほめたたえるというのも、キリスト再臨を待ち望む者となる、贖いを完成することを待ち望む者となるということなのです。この二回目のほめたたえるも、贖いに関係している。

第三回目の「ほめたたえる」、一四節は、贖いが完成して、神につける者が全く贖われて、復活させていただいて、無限の栄光体をいただく、そして神の恵みをほめたたえる。そのときに神の恵みが本当に分かる。信仰で分かるのではない。このときが本当に、復活したときに、こんな無限の富を神様からいただいたときに本当に分かる。これが一四節、このときが本当に分かる。われわれ肉体を持っている間は、まだ信仰です。しかし、このときには神の恵みをほめたたえる。このときは本当に、自分が自分の栄光の体を見てほめたたえる。

Recognize、神の恵みを認める。

そうですから、この三節から一四節までの大意は、「贖いをほめたたえる」ということに尽きる。贖いをほめたたえて、贖いを認めて、本当だと認めて、そしてほめたたえる。これはこの世においては信仰で、頭の心であるけれども、いよいよキリスト来たもうときには、目にもその時を見るときです。実現するときです。

これが、本日この九節から一四節までの大意であります。

このほめたたえるのに、われわれは聖霊を受けて、この世においては「わが主イエスよ」と主の名を呼んで、これをほめたたえる。キリストの贖いを認める。そして、われわれはほめたたえるのに、無限の栄光をいただいた、その救いをいただいた。恵みをいただいたために、われわれは「わが主イエスよ」と主の名を呼んで、主をほめたたえると共に、われわれ目のおかれた義務をなして神をほめたたえる。

この世においての方法は「主の名を呼ぶ」ということ。それから「目の前の務めをなしてほめたたえる」。目の前の務めをなすということは、これはまたロマ書の一二章から一四章までの講義のときに、第三回の講義のときに詳しく申し上げますけれども、すなわち神をほめたたえることになる。

キリスト教というものは、神の贖いを認めてほめたたえるということに尽きる。ほめたたえる方法は、現世においては主の名を呼んで、目の前におかれた義務、すなわち神の意志をなすことだけです。われわれは来世において、キリスト来たもうときに、復活体をいただいて、ほめたたえるときには今度は無限の体をもって、無限の善行をもって神をほめたたえるときが来るだろうと思う。

以上、これが大意であります。

今日のところでは贖いの保証として、救いの保証として、すなわちわれわれに保証として聖霊を給うている、

聖霊の印を押されている。聖霊の型という字が出ておりますが、内村先生が聖霊の型ということについて簡単な感想を書いていらっしやいます。これは一〇年前にも読みました。

一〇年前の一九六六年、昭和四十一年の十一月六日、この場所を講義したのですが、金子長老が司会してくれておりました。最後の祈りは、どうも第一日曜でありましたが、女の方の声で、どうも百合子ちゃんらしい。高野百合子さんがどこかに勤めておって帰ってこられて、第一日曜に出られて、そして高野百合子さんの最後の祈りのように聞きました。誠に感銘深い場所でありまして、これが私の伝道第二九年を終わる日曜としては、誠にふさわしい場所です。

これは、その一〇年前に数えてありますが、三節から一四節のこの一 sentence、一〇の文章の中に、神、キリストという字が三四回出てきている。これは私一〇年前に数えたので、「神」という字が名詞で二回、隠れた主語として四回、代名詞として一二回、計一八回出てきている。「キリスト」という字が名詞で六回、代名詞で七回、計一三回。「聖霊」という字が名詞で二回、代名詞で一回、計三回。合計三四回。これが、この一つの文章の中に「神」「キリスト」「聖霊」という字が三四回出てきている。

ことほどさようにキリスト教というものは、神、キリスト、聖霊です。われわれという字は、ほめたたえるというだけです。ほめたたえるというのは難しくない。認める、認めて、神の恵みを Recognize するだけです、われわれクリスチャンのキリスト教の信仰というものは、キリストの贖いの深さ、尊さ、その恵みの深さを知らせていただくことだけであり、これをクリスチャン・ライフという。

第四講 感謝と祈禱 (一) 第一章一五節―一九節

(昭和五一(一九七六)年二月一四日)

今日は、本日司会者に読んでいただきました、エペソ書の第一章一五節から一九節までの大意を学びたいのであります。

本日は三節から読んでいただきましたが、この三節から一四節までは、神の恵み、すなわち、キリストによる救いというものをパウロが讚美した場所であります。この三節から一四節までは、人間の筆になりましたキリスト教の救いというものを言い表して讚美した、私は最も驚くべき人間の言葉であると思います。

この場所をわれわれはただ読むだけでなくして、この場所を少しでも本当に理解する者になりたい。どうぞ、繰り返し読んでお読みいただくことをお願いいたします。これほど明確に、これほど深く、キリスト教の救いというものを説明してある場所を知りません。われわれはキリスト信徒であると口で公言しておりますけれども、ここに書かれた、三節から一四節まで書かれた意義を知らずしてキリスト信徒であると言うことは、われわれは慎みたいと思います。

続いて第一五節から第一章の終わり二三節まで、これは原語では一つの文章、一 sentenceであります。この場所、エペソ信者に対する感謝と祈願を述べている場所でありまして、これはパウロ先生がエペソにあてた感謝と祈願たるのみならず、小さきこの高円寺東教会に対してパウロ先生がお書きいただいた感謝と祈願とみてよろしい。

本日はこの一五節から二三節までの、このパウロ先生の高円寺東教会に対する感謝と祈願との前半、一五節か

ら一九節まで数節について、簡単なる注解を加えます。

○一五、一六節 「こういうわけで、わたしも、主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを耳にし、わたしの祈りのたびごとにあなたがたを覚えて、絶えずあなたがたのために感謝している」

この二節について簡単な注解を加えます。

「こういうわけで」というのは、これまでに、三節から一四節までに、神の恵みをほめたたえた、そういうふうなキリスト教の救いであるから、こういうわけで、これは三節から一四節までを受けた言葉であります。

「私も」、「私は」であります。「私は、主イエスキリストに対するあなたがたの信仰と」というのは、この三節から一四節までに述べた内容をもちます。イエス・キリストに対する信仰、そして全ての聖徒に対する愛、この信仰のゆえに全ての聖徒に対する愛と、この信仰と愛とをあなたがたが持っていることを耳にし、それを聞いて、私は祈りのたびごとにあなたがたを覚えて、絶えずあなたがたのために感謝していると。

この一五節、一六節とはすなわち、エペソの信者たち、われわれ高円寺東教会の信者たちの信仰と、そして聖徒たちに対する愛、信仰と愛とを聞いて、天から見ておつて、そして神に感謝すると。そして感謝するのみならず、祈っているということを書いている。感謝と祈りです。

その祈りの内容はこういうことを祈っているかというのと、

○一七、一八節「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵と啓示との霊をあなたがたに賜って神を認めさせ、あなたがたの心の目を明らかにして下さるように、そして、あなたがたが神に召

「されていただいている望みがどんなものであるか、聖徒たちがつくべき神の国がいかに栄光に富んだものであるか」。

この一七節、一八節のところでは、一七節、「祈っている」。どういうことを祈っているかというところ、「主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵と啓示との霊」、聖霊であります。「聖霊をあなたがたに賜って、神を認め、神を信ずるようになり、「そしてあなたがたの目を明らかにしてください」と。そうですからこのパウロの祈りは、あなたたちに聖霊を神様が与えてくださって、そしてあなたがたの目を明らかにしてくださいと祈るに。

私たちは信仰が分かっているように、誤解しておりますけれども、実際のわれわれの姿は、本当の信仰のこと、あるいは望みのこと、愛のことについては、非常に赤子みたいなものです。ちょっと世の中のことに出会い、ちょっとした世の中のいざないに会うとふらふらしている。そうですから、人の目にあるちはわれわれは気にしますけれども、われわれは自分の目にある梁うづほりを知らない。

そうですからパウロが祈っているのは、聖霊がわれわれに下って、われわれの目が、心の目が明らかになるようにと、そういうことをパウロは祈ってくれているわけであります。

そして、パウロが祈っており、われわれに明らかなる目を与えてくださるようにと祈っているその目的は、三つある。

その第一の目的は、

○一八節 「また、あなたがたが神に召されていた望みがどんなものであるか」。

われわれが神に召されて、そしていただいているところの望み、それはどういうふうな偉大なものであるかと

いうことを第一に知らせたい。これが第一であります。

それから第二、「聖徒たちがつぐべきところの神の国がいかに栄光に富んだものであるか」。

第二も、第一と同じく望みであります。第二のほうは、望みの内容です。われわれがつぐべき神の国が、イエス・キリストが再臨し給うて成就する神の国が、いかに栄光に富んだものであるか。望みの内容であります。われわれはイエスの再臨、われわれの復活というようなことを何遍も聞いて馬耳東風のごとく、あるいは人の葬式のときにちよつと天国のことを聞きますけれども、この神の国のいかに栄光に富んだものであるかを知らせてもらうと、これがパウロの祈りです。

第三は、一九節「神の力強い活動によって働く力が、私たち信じる者にとっていかに絶大なものであるかを、あなたがたが知るように至るように、と祈ってる。」

祈りの第三の目的は、その神の偉大なる力が働いて、われわれに信仰を与えて、そしてその復活の、イエスが再臨を実現するところの力がいかに偉大なるものであるかを、あなたがたが知るようにと祈っている。

これが、パウロのわれわれに対する祈りの三つの目的であります。

繰り返して言えば、パウロは、君たちの信仰と、キリストに対する信仰、三節から一四節まで述べたこの神の恵みのキリストの贖いをあなたたちが信じて、そして聖徒たちに対して愛を持って、信仰と愛とを聞いて、私は喜んで、神に感謝している。そして祈っていることは、あなたたちが聖霊を神様からいただいで、いよいよ明らかな目を持つに至ること。そして、私が祈っている三つのことを達成するように。

第一は、神があなたたちに与えている望みというものがいかに偉大なるものであるか。

第二、その望みの内容、すなわちイエスが再臨し給うてわれわれが復活するときに、われわれはその栄光、そ

の光栄というものはいかに絶大なものであるか。

第三、その信仰、望みを、神の偉大なる力によってお前たちに神様が与えてくださったって、そして神はその信仰、望みを実現してくださる、その神の力がいかに偉大なるものであるかということをお前たちが知るように。

これが三つの目的であります。

以上、これが五節、本日の箇所の説明の大意であります。

これは要するに、パウロはこの信仰と愛と、信者が持っているところの信仰と愛とを感謝して、感謝するが感謝しているその上に、その信仰と愛との上に、信仰の一部とみていいでしょうが、望みというものを神があなたたちに与えてくださるように。今日述べているところの中心は、望みであります。望みがいかに偉大なるものであるか、その内容はいかに光栄に満ちたものであるか、そしてその望みをわれわれに与え、それを実現する神の力というものが、いかに偉大なるものであるかを知れ。

望み、キリスト再臨し給うて、われわれが復活する。この望み、これが今日のエペソ書の劈頭^{へきとう}、第一に信者に出でくる言葉です。来世のことです。この世で実現することではない、来世に実現することでありますけれども、この望みということがキリスト教の中心、キリスト教の全部とみてよろしい。これによってパウロは、あの偉大なる伝道ができた。

ロマ書も、第一五章一三節に、「望みの神が、聖霊によって、君たちの信仰と愛とをいただいている、この望みに満ち溢れんことを」と、ロマ書は「望みに満ち溢れよ」という言葉をもって終わっている。コリント第一の手紙にも、カルピンに言わせれば、第一章、復活を述べるためにコリント書は書かれたと言っている。

ことほどさように、「望み」「復活」ということが、これがキリスト信徒の全てである。

これは一〇年前、一九六六年一月の二〇日に、私が話したのと大体内容は同じであります。第三日曜でありましたから、その集会の最後の祈りを北川姉妹がしていただいて、昨日そのテープを聞かせていただきました。一〇年の間健康を与えられて、再びまたこの深き福音の真理を、また本日ここで語らせていただきます光栄を感謝したいと思います。

本日は一言、私はこの望み、復活の望みということ、われわれはいつも中心である、命の中心である復活の望みを、われわれはいつも忘れがちです。この世のことに紛れて、偉大なる力の源であるこの望みを忘れがちでありますから、私は望みのために称名を勧めたい。称名をしたい。「わが主イエスよ」と主の名を呼んで、神様から聖霊をいただいで、この復活の望みを、神様にわれわれの心に燃やしていただきたい。これが第一。

第二は、この望みの効用、現世、現代にこの望みの効用の力、望みの力を味わいたい。これが私の最近の希望であります。

それから、その一〇年前に読みました内村先生の『一日一生』、一月一日。エペソ書、本日の説明として、レッスンとして大変適当でありますから、もう一度読ませていただきます。

「人は生まれながらにして現世的である。彼は、来世のことはこれを思わざらんことをつとむ。彼に現世的なるをすすむ必要は少しもない。水の低きにつくがごとくに、人は地につくものである。しかして宗教は、人を地より天に向かつて引きあぐるために必要である。宗教にして、明白に来世的ならざらんか、世に来世を示すものは他に何ものもないのである。言うまでもなく宗教の本領は来世である。政治、経済の本領が現世であるがごとくに、宗教の本領は来世である。来世を明白に示さず、これに入るの道を明白に教えない宗教は、宗教と称するに足らざるものである。宗教は人を現世の外に導き、彼の来世獲得の道を供して、間接

「にしかも確実に現世を救うのである。」

第五講 感謝と祈祷 (二) 第一章二〇節―二三節

(昭和五二(一九七六)年二月二八日)

本日は司会者に、エペソ書の第一章一五節から最後の、二三節まで読んでいただきましたが、これはパウロがエペソ教会の信者に対して感謝をし、そしてお祈りをした場所であります。前半一五節から一九節までは、この前にお話いたしました。本日は、後半の二〇節から二四節までの大意を学びたいと思います。

この場所は、一五節から二三節まで、原文では一つの文章でありまして、大変長い文章でございます。一つの文章、一 sentence であります。

前半は、あなたたちが信仰を持っており、またお互いに愛を持っているが、それだけでは不十分である。いよいよ神様から望み、われわれの永遠の栄え、この天国の望みを神様からいただくように、祈った場所であります。信仰といい、愛といい、望みというのは、これはひとえに神様からの賜物でありまして、霊の賜物です。そうありますので、生まれつきのわれわれは、これを理解することができない。ここにキリスト教の難しい点がある。難しい点と共に、またこれは易しい点です。神様からもらうのですから。自分の努力、自分側の努力によって獲得するのではないのですから、万人がいける。そうですから、難しいと共に易しい。これは神様からもらうんだから。そういう意味におきましてパウロは、前回一五節から一九節まで、そういうことを述べた。

キリスト教というものは、生まれつきのままをもってしては理解することはできない。ひとえに聖霊の神の知恵の働きによって、それを頂戴して分かるものです。そして、それがいかにも世間離れしておって、何もこの世に役に立たないようにわれわれは思いますけれども、それがいかに人生において、本当に恵まれた、それがいか

に人生に慰めと力を与えるものであるかということ、パウロはよく知っている。そうですから、パウロは繰り返し繰り返しそのことを言っている。

前回は感謝と祈りで終わりましたが、その続きが本日のレッスンであります。二〇節から二三節まで、大意を申し上げます。

○二〇節、二二節「神はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ、彼を、全ての支配、権威、権力、権勢の上におき、また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名の上におかれたのである。」

これが神の偉大なる働きについて、パウロが述べた場所であります。

神はその偉大なる力を働かせて、キリストのうちに働かせて、彼を死人のうちからよみがえらせた。天上においてご自分の右に座せしめた。これは、神がキリストを通じてわれわれの贖いを成就して、われわれの救いを成就した神の偉大なる働きを述べた。神がキリストを十字架につけて、人類のわれわれのすべての罪を贖って、彼を復活せしめて、そして自分の右に座せしめた。この神の偉大なる力、働きによって贖いが成就して、われわれが救われて、神の子とされた。これを福音という。

そして天上において、ご自分の右にすわらせて、そしてその上に神は、キリストを全ての支配、権威、権力、権勢の上におき、またこの世ばかりでなく来たるべき世においても称えられる、あらゆる名の上におかれた。キリストを全ての上に、全ての権力におかれたという。そうですから、キリストというものはいかに偉大であり、いかに力強いものであるか。そのイエス・キリストがわれわれ信者のために、いつも取りなしていただく。

われわれいかに光榮であるか、いかに力強いものであるかというのは、これによって分かる。

こういうことは皆、靈の賜物です。人間の努力、研究によって分かるものではない。靈の賜物ですから、これを信ずる。それが本当だとそう信ずる。キリスト信者と言うが、キリスト行者とは言わない。キリスト信者という。どういうふうにキリストを信ずるかというところが、すなわちポイントです。キリスト行者とは言わない。キリスト信者という。われわれが靈の賜物を受けて、だんだん靈の賜物を受けることによって、キリストをどう理解するか、キリストをどうみるかということが、われわれの生活を決定する。

○二三節「そして、万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。」

そうですから、教会のかしらとしてわれわれにキリストを与えてくださいましたが、万物をキリストの足の下に置いてあるという。万物を支配する力をキリストは持っている。そうですから、われわれはキリストを信ずるということになると、そのキリストの持ち給う無限の力を、われわれにもらう可能性を持っている。

そうですから、キリストは、万物の上にある力を持っていらっしゃる。イエス・キリストが山に向かって「山よ、山から海の中へはいれ」と言っても、本当にからし種の信仰を持っておれば、それが成ると言われた。そういうふうに、われわれは信仰はありませんけれども、われわれが本当に神の力を信ずることできれば、われわれ人類には無限の力の可能性があるわけです。

○二三節「この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのものの内に満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない。」

教会はキリストの体であると。教会というのはキリストの体でありますから、教会というのは、信者の団体、世界中の人類の信者の団体、これが教会です。また高円寺東教会というこの小さな信者の団体、これも教会です。そしてもう一つ、私個人、信者もこれは教会を組織している一人ですから、これも教会と言ってもいい。人間の体は聖霊の宮だと言われますから。ただ教会というものは、これは信者の団体、すなわち世界中の信者の団体、またこの小さな高円寺東教会、またその教会を組織しているわれわれ一人一人が、教会とみていい。そうですから、この教会はキリストの体だという。本当にわれらは信ずるときに、われらはキリストの体なのです。

そして「すべてのもののうちに満たしているかた」、これはキリストです。「すべてのもののうちに満たしているかた」、キリストが、すなわち「満ちみちているもの」、教会というものはキリストが満ちみちているものなのです。満ちみちているべきものなのです。そうですから、いかに教会というものが、キリストが入ってくるものであり、満つるものか。

そうですから、教会の中でごたごたやっているというのは、そんなものは教会ではない。キリストが満ちみちていないでしょう。本当の教会というものは、教会の中にキリストが満ちみちていなければならぬ。だからわれわれ高円寺東教会と言っても、キリストが満ちみちてこなかったら、これは名だけの高円寺東教会です。そんなものは教会ではありません。人間の団体です。キリストの霊が、われわれに入ってこなければいけない。

この「満ちみちる」という解釈、これは普通の解釈でありますけれど、クリソストムという聖書学者は、「満ちみちる」という字は「満たす」というふうにも解釈できますから、教会というものはキリストを満たすものである、キリストを完成するものが教会だ、こういうふうにはクリソストムが解釈した。これは、教会というものが聖霊を受けてキリストを完成するものであると、文字がそういうふうにも読める。クリソストムはそう読んだ。

それは通説ではありませんけれども、有力なる説として解釈されている。パウロは「われはキリストの欠けたるを補う」と言いましたが、それがこのクリソストムの思想であります。

これは要するに、信者とはキリストを信ずる者です。どういうふうに信ずるか、これが問題です。キリストというのはどういふ人であるか。キリスト教というものは、キリストをいかに信ずるかということにかかっているのだから。キリストが過去においていかなることをなしたか、現在何をなしつつあるか、将来何をなすかということ、真理の御霊の示すところによつてそれを信ずると、これをキリスト信者という。自分の行ないではない。キリストが過去において何をなしたか、現在何をなしつつあるか、将来何をなすかというそのキリストの力、それを信ずる者を、それをクリスチャンと言う。

しかしその信仰というものは、よろしいか、その信仰というものは、われわれが聖霊の真理によつて示されましても、われわれは示されましても、われわれ自身というものは罪人でありまして、誠にそのキリストの真理を持つのにふさわしくない者です。その真理によつて、聖霊によつて示されたことも、平生は隠れている。自分の思いばかりが表へ出てしまつて、真理が隠れている。

われわれは示された信仰というものを継続し、それを完成するためには、どうしてもここに、神様から示されたところの行まよというものが、行ないというものが必要になつてくる。それを私は「妙行」と言っているのですが、内村先生は「主を仰ぎ見る」という行をお取りになりました。ロマ書には「主の名を呼ぶ」、「主の名を呼ぶ者は救われる」と、「主の名を呼ぶ」という行が書かれています。そうですから、われわれ罪人である人間は、この神から示された妙行、主の名を呼ぶという行を努めて、そして神から示された深い真理、信仰の真理を継続しこれを完成することができます。これが、パウロがロマ書第一〇章九節一〇節において、称名、主の名を呼ぶというこ

とを救いの条件とした理由です。

(注) クリソストム (John Chrysostom) (三四七年頃-四〇七年)

聖書学者、聖人。著作として、パウロの手紙の関する講解説教が二五〇以上あり、特にロマ書の注解が傑作として知られる。小西芳之助『ローマ人への手紙講解説教』六四頁

第六講 神による新生（一） 第二章一節―七節

（昭和五二（一九七六）年一月二三日）

皆さんご健康で、私も健康を与えられて、こうして聖書の集會を持たせていただきますことを誠に幸せなことだと思えます。

特にこの寒き聖日、皆さんゆつくりと家でお休みになりたいであろうにこうしておいでいただきまして、共にこの礼拝をできますことを誠に不可思議なる御恵みと存じます。私にとりましては数え年八〇の正月でありまして、特に去年は私の一生のうちで最も恵まれた、この七九年の生涯において昨年是最も恵まれた年でありました。

一 昨年あがなの病氣を癒されまして、去年は皆さんのご協力を得た『ローマ人への手紙略記別冊』ができて、そして去年の復活節の四月、それから六月に「贖いの無限の深さ」ということについて説教をさせていただきました、一〇月の最後の聖日には「教会生活六〇年、伝道生活三〇年所感」と題しまして、私の信仰のことを話しさせていただきました、また一二月にはクリスマス・メッセージで私の信仰の話をさせていただきました。

その四回の四月、六月、一〇月、一二月の説教において、私の七九年間に与えられました信仰を全部話しまして、それが全部『よろこび』の資料にプリントになって出ます。この一月、二月にも出ますから、私は誠に恵まれた一生を送らせていただいたと感謝しております。

内村鑑三先生が大正一〇年五月一五日のロマ書三章二一節の講義のときに「私は本日、福音の意義を語ることでできて、私の人生は本当に恵まれて感謝に堪えない、これで自分の人生は終わったとしても、誠に感謝に堪えない」ということをおっしゃった。私は当日、大正一〇年五月一五日の説教においてロマ書三章二一節講義にお

いて福音の意義を教えていただきましたから、特に先生のそのお言葉が頭に残っております。

私ももう既に去年の四回の講義におきまして全てを語っておりますので、それを読み返していただきましたら私の全貌が出ておりますので、私は本当にわが人生満たされたり、という感じを持つています。感謝の一年でございました。

内村鑑三先生は数え年七〇歳をもつて永眠されましたが、私は本年八〇歳、先生よりも一〇年間既に長く生きてきていただいておりますので、あとはこれからひとつ、聖書を勉強させていただきまして、そしてクリスマスに述べましたごとく、自分一人に、これからはいよいよ自分に伝道をしたい。もう人に説教するのはやめて自分に伝道をしたいとこの前のクリスマスに私の希望を述べておりましたが、いよいよその実行の第一年を始めたい。己に伝道するという第一年をこれから始めたいと思います。

従ってきょうの聖書講義も、これはあなたたちにするのでなくして、自分自身に聖書講義をする覚悟、心構えでこれからお話をいたします。

例によりまして、このエペソ書の第二章を、今日は一節から一〇節までを兄弟に読んでいただきました。ここも非常に大事な場所で、「新生」、新たに生まれるという、いよいよこれから二章から四章まで、聖書の救いの信仰のことについて話し、それから後半四章から六章、終わりまでには行ないについてパウロは話します。

パウロの手紙はいつも前半は教義、すなわち信仰の話。それから後半が行ないの問題。いつでもパウロの手紙はそうなっております。

そうですから、いつでもキリスト教というものは信仰が初めです。信仰が分からずしてキリスト教の行ないは出てこない。

いつも申しますとおり、ロマ書一二章の始めに「この故に我、汝等に勧む」とパウロは言っておりますから、信仰が分かつてから行ないの問題を述べている。すなわち信仰が分かるということは、自分を神の子とせられて永遠の命を頂くということです。永遠の命を頂いて、いつもそれからの問題です。

いつも言うとおり、キリスト教で「救い」といいますが、キリスト教で「救われる」といったらどうすることかということははっきりしておかなければいけない。「救い」という言葉はいろいろな意味で使われていますから。

私はやはりヨハネ伝に示されているごとく「永遠の命を持つ」、「永遠の命をもらう」と、こういうことを言つたらよろしい。はっきりする。

パウロは「救い」という言葉をロマ書で使いますが、「救い」と言われても「救い」とはどうすることかはっきり分からない。そうでしょう。「救い」と言ったら、何が「救い」か。「悲しみから救い」でも「救い」だし、「苦しみから救い」でも「救い」と言うでしょう。だから「救われる」と言つてもはっきりしなすよ。

キリスト教で「救い」といったら永遠の命をもらうことです。こういう根本的なことがはっきりしてこなければ、何十年やっけていても駄目ですよ。永遠の命を持っているか、持っていないか、ということが自分が信者であるか未信者であるかということの決め手です。各自胸に手を当てて考える必要がある。

そして我々はこの永遠の命を欲しくない。ここにキリスト教の困難さがある。我々はこの世のものが欲しい。この世で善行をしてこの世で人にほめられたい、大きな事業をしたい。キリスト教の最も大切なことは永遠の命を持つということです。永遠の命をもらうということです。よろしいか。

そういうわけでこのパウロの勧めというのは、いつも初めに教えが来て、そして教えによって永遠の命をもら

って、それから行ないに入る。

永遠の命を持たずしての善行は道德です。私はここでは善行をすることを勧めません。私はここでは永遠の命をもらえということをお勧めしている。この高円寺東教会では福音とは、永遠の命をもらう。何でもらうかといったら福音でもらう。

福音といったら、はつきりしておかなければいけない。具体的に決まっている。福音、良き知らせといったら、神がキリストを降して十字架に付けて、我々の罪とがを滅ぼして、我々に永遠の命を与えてくださったということ、それを福音という。

はつきりしているんですよ。キリスト教の信仰というものは数学的正確さを持っている。ぼやぼやしていない。一プラス二が三になるような、そういうのはつきりさを持っている。よろしいか。

そういうわけで、今日のところはいよいよ初めの教えに入ります。

エペソ書第一章におきましては、神の救いをパウロが賛美して、そしてその信者の立派なことに感謝していた。この第一章もこれは非常に深い、誠に金玉の文字であります。そうでありますので、五回にわたって講義をいたしました。

それで第一章を終わりました、いわゆるパウロ先生の救いの神の讚美、それに信者に対する感謝を終えて、いよいよこれからまたその教えを説くわけであります。

○第二章一節、二節「さて、あなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であって、かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権を持つ君、すなわち、不従順での子らの中に今も働い

ている霊に従って、歩いていたのである。」

この一節、二節は異邦人、我々に対して語っている言葉であります。

君たちはかつては自分の冒した罪過、罪によって死んでいたものであって、君たちは自分の、君たちの罪、罪過の中でこの世のならわしに従い、この世の皆さんがやっている普通のならわしに従って歩いていた。

「空中の権を持つ君、すなわち不従順の子らの中に今も働いている霊」——「空中の中に権を持つ君」というのは、これは「すなわち不従順の子らの中に今も働いている霊」。「空中の中に権をもつ君」、これはサタンとみていいでしょう。そういう力を持つ者がいるというふうはこの聖書ではみているのであります。「不従順の子らの中に今も働いている霊」、これは霊の力として働いている。そういう力を持っている。

不従順の異邦人である我々の中に、この世のならわしによって歩いている生まれつきの我々には、すなわちこの霊の力、いわゆるサタンが支配している。

「不従順の子らの中に今も働いている霊」、すなわち未信者の我々の中に働いている霊の力によって、すなわち我々は歩いていた。我々はそういうふうなサタンの霊の力、悪霊といいますが悪い霊の力に従って歩いていたのである。

一節、二節、これは生まれつきの我々は、サタンの霊の力によって引き回されて歩いている。

そういうことは思いません。思いませんが、これは聖書の説明によりますと、アダムの犯した罪の結果として、我々が生まれつき罪人であって、そして悪霊、サタンの霊の力に支配されてその力の下にいます、そういうふうには聖書は説いているのであります。我々はこの世にいる間、やはりこの霊の下に肉を持っている間は、その霊の力の下に縛られているわけであり、我々は人の悪いことばかり責めておりますけれども、我々各自が、

自分自身がこの悪霊に引き回されているということを、死ぬまでこのことを考える必要がある。

「歩いていたのである」。これが異邦人の信者。異邦人の信者は、昔は信仰以前は、引き回されておった。信仰の後も引き回されている。信仰に入ったら全て引き回されずに安全であるかと思ったら、それはないと私は思う。私の経験では信仰に入っても同じく引き回されている。だから、常にやはり我々は、それを安全であると思っただらいかん。死ぬまで引き回されている。引き回される可能性がある。皆、引き回されている。これは異邦人。

○三節「また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲に従って日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行ない、ほかの人々と同じく、生まれながらの怒りの子であった。」

三節は、これはユダヤ人です。パウロが、すなわち君たちもそうであったが、私もそうであった。それはすなわち引き回されていると、そういうふうな三節まで、これは引き回されているという信仰以前のことを書いてあるわけでありませう。

異邦人もユダヤ人も未信者のときには全部、いわゆるサタンの下で、そのサタンの霊の力に引き回されておった。これが三節まで。

○四節、五節「しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、罪過によつて死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かし、——あなた方の救われたのは、恵みによるものである——」

○六節「キリスト・イエスにあつて、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。」

この四節で、「あわれみに富む神は、すなわちわたしたちを愛して下さった」「愛して下さった」というのはキリストを通して愛して下さった。

「愛して下さった」というのは、具体的に言えば、キリストを下して十字架に付けて、そして我々の罪とが処分して下さいました。「愛して下さった」と言ったら、死んでいる我々の罪とが処分して下さい、我々を罪なきものとして下されたということです。

この「神の愛」というのはぼやっとしていない。内容がはっきりしている。キリスト教で「神は愛なり」といったらぼやっとしていないですよ。「愛」といったら、ぼやっとして人に親切にというものではない。

「神は愛なり」といったら、神はキリストを下して十字架に付けて、罪で滅ぶべき我々を、我々の現在ならびに未来の罪とがを全部滅ぼして、イエスを十字架に付けて、神は我々を罪なきものとして、我々に永遠の命を与えて下されたということ。これを「神は愛なり」と言う。これを「愛」と言う。「神は愛なり」と言ったらこのことを言う。

そうですから、現在、我々信者はサタンに引き回されているという状態と、それからサタンに引き回された我々が犯す罪を神は全て許して、それを処分して、我々に永遠の命を与えて下された、という二つの現実が我々の現実の姿です。我々はそういう二つの姿を持っている。これは死ぬまでそうですよ。

だから我々は引き回されているという。そういう汚い状態にいる人間に、神は引き回されて過ちを犯した罪、また現在犯しつつある罪、また未来に犯す罪を全てキリストを通して十字架に付けて、我々の罪科を全て処分して、許して、我々に永遠の命を与えて下されたという。

これが「神の愛」の内容でありまして、これをイエス・キリストの福音という。キリストの福音というのはそれをいう。

これはそうということが書いてある。罪過に死んでいた私たちをキリストと共に生かすと、我々に永遠の命を与えてくださった。それで我々は永遠の命を持っている。我々は永遠の命を持っている。

「あなた方の救われたのは、恵みによるのである。」これは、君たちが永遠の命を持っているのは、「救われる」といったら永遠の命を持っているということですよ。あなたが永遠の命を持っているのは恵みによるのである。これはあなたたちの信仰にもよらないし、すなわち行ないにもよらない。イエス・キリストの贖いによる。

○六節「キリスト・イエスにあつて、共によみがえらせ、共に天上で座に着かせて下さったのである。」

これは過去のかたちです。キリスト・イエスにあつて共によみがえらせ、共に天上で座に着かされた。この過去のかたちは復活したときのことを言っている。つまり、これは将来、キリストが再臨してきて、そして我々が復活させてもらった、そのことを言っている。共によみがえらせ、共に天上に座に着かされたのである。過去のかたち。

これは何遍も言うとおおり、救いというものは、永遠の命をもらったといったら、現在形でも言われますし、過去の形で言っても、現在完了で言っても、未来でも言える。どの形で言ってもいい。

何遍も言うとおおり、私らは大正六年、旧制の高等学校の入学試験を受けて、試験は七月で、通つたら「君はこの高等学校に九月一五日に入学を許す」と官報で発表がある。官報で「おまえはこの高等学校に入学を許す」ということが大正六年八月の下旬に発表があったそのとき、学校は九月一五日から始まるんですから、八月下旬

のときにはまだ高等学校の学生ではないですよ。まだ中学校の帽子をかぶっている。しかしながら官報で発表があれば、そのときからもう「高等学校の学生である」と現在形で言ってもいいし、それから現在完了で「私は今、高等学校の学生になった」と言ってもよし、それからまた「もう私は高等学校の学生になったんだ」という過去の形で言ってもよし、あるいは未来形で「私は九月一五日からいよいよ高等学校の学生になるのである」と言ってもいい。現在形でも言うし、過去形でも言うし、現在完了形で言ってもよし、未来形で、言ってもいい。

そうですから、「よみがえらせた」といったら、キリスト来給うときによみがえらされる者となったのだ、今君は永遠の命をもらったんだ。

そうですから、十字架の贖いによって我々はもうその身分を獲得している。賜物です。我々それを本当だと信じて受けるときに、我々はその位を獲得する。これを「信仰だけで救われる」という。ルッターの「信仰だけで救われた」とは、このことを言った。すべては十字架において神がもう完成した。我々に残っているのは、我々がそれを受けるか受けないかということが残っている。これを福音という。

キリスト・イエスにあつて共によみがえらせ、共に天上に、永遠の命を頂いたのである。

○七節「それは、キリスト・イエスにあつて私たちに賜った慈愛、贖罪の愛です。この神の恵みの絶大なこと、この贖罪の絶大な恵み、これを世々に示すためである。」

「世々に」と複数になっておりますけれど、「世に示すため」と言ってもいい。現在ならびに来たるべき世において示すためだという。

以上、七節まで。八節以下はまた次回にいたします。七節まで本日といたします。

すなわち、我々に福音を賜ったのは、この福音の、イエス・キリストの絶大なる富、慈愛による神の恵みの絶大な富、それを福音つまり贖いの力の広さ、深さ、深いことを世々に、これから世に示すためであるという。その贖いの無限の富を世に示すためであるという。

我々は本当に不完全な、本当に肉の欲の中に、サタンの霊の下にある、みな誠に自己中心的な自分の姿を知りませずして、人の悪いことばかり我々は目に見えますけれども、我々罪人というのは自分の至らないことは見えない。これが罪人の本性です。死ぬまで罪人ですよ。

我々は本当に顔は見えない。自分の顔は見えないですよ。皆、自分は普通の顔をしていると思っている。他人が分かる。他人から見たらはずきり分かる。どんな偉い人でも自分の顔は見えない。これは聖霊が我々に下って、我々に自分の姿を見せてもらうのです。

信仰が深い人と思ったら、信仰が分かった人というのは自分の罪人たることが分かっている人です。信仰の深さによって自分の罪が見えてくる。自分の罪が全然見えないと言うのは信仰がないと言うことです。そういう意味におきまして、我々にこの聖霊が下るときに自分の姿が見え、贖いの深さが見えてくる。

以上が大体、この文字の意味であります。

○感想 エペソ書はパウロの書いた手紙か

私は素人でキリスト教の学問は知りませんから、このエペソ書というものは獄中書簡としてパウロの書いたもの、パウロがロマにおける獄中から書いたものということになっておりますが、学者はこれはパウロの書簡でない、これはパウロ以外の人の書であるという説が有力で、半々でありまして、まだどちらとも確定的に決まってい

いない。パウロが書いたかパウロの弟子が書いたかはつきりしない。

パウロが書いたということになって聖書に載っておりますが、ロマ書やガラテヤ書のごとく、はつきりと学者がみんな「これはパウロが書いた」というふうには、エペソ書はなっております。

私は素人でありまして、私の直感は、これはパウロが書いたのではないとみる。これをパウロが書いたとしたら、ロマ書以前に書いた本。私はそうみる。

なぜかといったら、ここには称名が出てこない。ロマ書にはちゃんと「主の名を呼ぶ」ということは出てきておりますけれど、エペソ書には「主の名を呼ぶ」ということは、出てきていない。そうですから、これはやっぱり私はパウロはロマ書を書いた以前に書いた。パウロが書いたとしたらロマ書以前に書いた手紙。

もしロマ書から以後に出てきたものであれば、これは弟子が書いた。一流弟子が書いた、あるいはオーガスチン、ルッター級の、パウロの信仰をよく分かった第一の弟子が書いたものと私はみます。

エペソ書には、パウロの信仰は全部出ているけれども、最後の称名は出てきていない。それで私は、これはパウロの書簡でない、あるいは書簡とすればロマ書以前に書いたものと私は判断いたします。これはごく素人の考えであります。そういうふうによりまして、我々ロマ書を学んだ者は幸いに「主の名を呼ぶ」という武器を持っている。

そうですから、我々はいよいよこの深き我々の身分、永遠不滅の命を教えられた我々は、いよいよこの称名に励みたいと思っております。

第七講 神による新生(二) 第二章八節―一〇節

(昭和五二(一九七七)年二月六日)

去年のクリスマスから、説教はもう皆さまにするのでなく、自分自身に説教させていただくのである、教えは人に説くのでなくして自分に説くのであるという、そういうふうな心境になりました、非常に自分の心境が変わっております。

説教の心境が変わっておりますが、また本日は特に心境が変わっております、今までは第二、第四の日曜だけ説教する、それから、他の日曜日の集会には教会の方にさせていただく。第二と第四は自分が説教するのであると、動詞でいう *active*、能動態の動詞を使って説教させてもらっておりますが、今月からは、私も第二、第四の日曜は、私が説教するのではなくして、させていただく。他の聖日は、教会にさせていただく。していただくと同じ受動態の受身のかたちで申すように、そういう心境であります。

というわけは、私は今日のこの説教を復習、勉強させていただきましていたら、ここに書いてあること、聖書の文句、私の今日これから話しをさせていただくこと全部、私のものというものはない。これは内村鑑三先生から教わった、内村鑑三から聞いたことです。また、内村鑑三先生以外の二、三の注解書の大先生、世界の大先生の方々の教えで文字になっていることを私が読んだ、*receive* した、受けたことだけです。私のものというのではない。

そうですから、私はこの話をしておりますけれども、まったく小西芳之助のものというのではない。全部内村鑑三から聞いたこと、その他の大先生から聞いたことを繰り返しているだけです。

そうですから、これは全く説教してはいるのでなくして、諸先生、友人、その人たちのおかげ、賜物です。今日
は賜物という言葉が出てきますが、今日の八節のところに、「あなた方が救われたのは、実に恵みにより、信仰
によるのである。それは、あなた方自身から出たものではなく、神の賜物である。」

あなた方自身から出たものではなく、神の賜物である。これが、ちょうど私の説教に当てはまる。私の説教、
私の聖書講義は、私自身から出たものではなく神の賜物である。神から人を通じてですから、内村鑑三その他の
大先生、また友人、その他から、その賜物である。

そうですから、今日からの説教は、そういうふうな賜物を皆さんにお分かちする、賜物を繰り返して話してい
る、そういうふう聞いていただきたい。私は、私自身の考えを話してはいるのではない。私は先生から聞いたそ
の話を話している。どうぞ、そういうふうにご理解願いたいと思うのであります。

小西は、いつも同じことを話しているなということになります。それはそうでしょう。人から聞いたことを
話しているんですから、同じことになります。自分で考え出して言ったことではないんだから、人から聞いたこ
とを、それを繰り返して言っているのですから、全く同じことになるわけありますが、どうぞそれを一つ味わっ
ていただきたい。

私も、これを味わわせてもらっているのですから、ただ頭で知識として知っているだけなんです。それを、毎
日の生活に当てはめてみたい。生活に当てはめてみたら、「称名しましょう」と私が言ったら、「わが主イエ
スよ」と主の名を呼ばれたらいい。

昨日は、ピリピ書を読んでおりましたら、ピリピ書の終わりのところに、パウロ先生が、「最後に言うが、君
たちが私から受けたこと、私から学んだこと、私から見たこと、私から聞いたことがあるならば、それをなせ」

と。「top」という字が書いてある。パウロ先生が、ピリピ書の最後に、君たちが私から受けたこと、私から学んだこと、私に見たこと、私に聞いたことがあるならば、それをなしなさい、topという字が書いてある。

われわれがtopしなかつたら、もう意味がない。聞いておつても、聞かざるがごとしです。ロマ書一〇章一三節に「主の御名を呼び求めれば救われる」とある。そうですから、主の名を呼べと、パウロ先生は私に教えてくれた。これは、パウロ先生が教えてくれたロマ書の言葉とともに、それを分かせてもらったのは恵心僧都のお言葉が大いにありますけれども、そういうことを私はパウロ先生から学んだ、「主の名を呼べ」ということを。

そうですから、私は「わが主イエス」と主の名を呼ぶ。そういうわけでありまして、私の教えの「主の名を呼べ」というのは、私が言っているのではない。パウロが言った。パウロが勧めた。

それぐらいにしまして、今日は司会者に読んでいただきましたエペソ書二章の一節から一〇節までのうち、前回に七節まで前半は話してありますから、八節から一〇節までの三節について簡単な注解を加えます。

二章から六章の最後まで、これから二、三、四、五、六章と学びますが、これはパウロの教え、すなわち二、三、四章は、信仰のことを教え、四章の後半から四、五、六章と三章にわたって行ないのことについてパウロは教えた。いつもパウロは初めに信仰のことを教えて、それから行ないのことを教える。

エペソ書もそのとおりになっておりまして、すなわち二章から四章までの信仰、それから四章の後半から六章までの行ないの教え、この信仰と行ないとの教えを、この二章の一節から一〇節までに要約した。信仰と行ないとの二つを併せて簡単に説明した。実に、パウロ先生以外には、こんなに簡単に明瞭に万人に分かるように書けない。これは、パウロのマスターピースの一つでしょう。

よく読んでみてください。信仰と行ないとの問題、これがキリスト教の信仰に最も重大なる問題になる。この

信と行とを、この一節から一〇節までに明快に説明した。パウロ先生の信仰と行ないとをもってして、初めてこういう文字が出てくる。この文句は、何千年、人類に残っても恥ずかしくない文句です、

それでは、簡単に説明いたしましょう。

○八節「あなた方が救われたのは実に恵みにより信仰によるのである。それは、あなた方自身から出たものではなく神の賜物である。」

「あなた方が救われたのは」というのは、かたちは現在完了のかたちです。救いということは、現在完了のかたちで表わしてもよし、過去のかたちで表わしてもよし、現在で表わしてもよし、未来で表わしてもよし、どのかたちでも救いというのは表わせるといことはたびたび申し上げております。前回においても詳しく申し上げましたから、ここではもう説明いたしません。現在完了、あなた方が救われたのは実に恵みにより、信仰によるのである。あなた方自身から出たものではなく、神の賜物である。

恵みというのは、これは神、キリストの恵み、これは贖いのことであります。あなた方が救われたのはイエス・キリストの贖いによるのだ、信仰によるのである。これは、たびたび申し上げているとおり、前の五節ではあなた方が救われたのは恵みによるのである、信仰という字がない。八節には「恵みにより信仰による」というふうには、「信仰による」という字が付いている。

だから、われわれは恵み一本によるのか、恵みと信仰と二本立てかと、こういうふうな難しい問題が起こってくる。いつも、信仰という字が邪魔になつてくる。そうですから、これはたびたび言うとおり、これは恵み一本です。恵みで救われる。この「信仰」というのは、「信仰」というより、「あなた方の救われるのは実に恵みによ

り、「恵みによる」としたほうがいい。そして、これを「受ける」、「恵みにより、これを受ける」のである。「信仰」というより、「受ける」というふうにしたほうが簡単でいいと思います。

信仰という字は悪いことではないんですよ。信仰というのはいいのですが、五節には、すなわちあなた方が救われるのは恵みによるのであると、恵みという字一つだけになっている。八節では恵みと信仰、信仰という字が出てきている。

そうですから、これははっきりとして下さい。申し上げるとおり、これは主観的に言えば、自分に考え、自分に当てはめて言えば、これはもう五節になる。私が救われるのは恵みによるのであるとこう思う、信仰はいらない。主観的に、自分に当てはめてみたら、私の救われたのは恵みによるので、イエス・キリストの贖いだ。贖いによって救われるんだと、こういうふうには理解する。これは五節の表し方です。

それから、八節の表し方は、これは文字で表わして、客観的に言い表したら信仰という字が出てくる。例えば、司会者が「小西牧師は贖いを信じて救われている」と、こう言う。司会者が、小西牧師は贖いを信じて救われているんだと、そういうふうには客観的にこれを文章に直したらそういうふうを書く。私自身が主観的に言えば、小西牧師、私は贖いによって救われている。信じるという字は不必要、この五節と八節は、そういう書き方なんです。

いつも言うことですが、はっきりとしてください。私は贖いだけで救われる、救われている。自分の信仰というものは考えていない。

「それは、あなた方自身から出たものではなく神の賜物である。」「それは」というのは、あなた方が救われたそのことです。「それは、あなた方自身から出たものでなく神の賜物である」と、賜物であるということ。

この「それは」というのはクリソストムが、これは信仰を受けると言った。この字は信仰を受けている。しかし、それは違う、原語は、中性代名詞ですから信仰を受けられない。信仰という男性名詞を受けられない。そうですから、「それは」というのはどうしても文章は、「あなた方の救われたのは」「救われた」という上の全体を受けて、そしてそれは普通の学説のようにしなければならぬという。

これを、クリソストム大先生は、「それは」というのは信仰であると。信仰は、あなた方から出たものではなく神の賜物であると言われる。あなたが、その信仰というのは受けることでしょ。クリソストムは、恵みを受けるということは、これはあなた方から出たものではないんだ、神の賜物であると言った。私は、この先生のクリソストムの学説、説明も、非常に私はこれは尊い説明と思います。

○九節「決して行ないによるのではない。それは、誰にも誇ることはないためである。」

この九節も、非常に明確な言葉であります。決して行ないによらないと。行ないによつたら、自分の行ないとか自分の信仰というものによつているとしたら、「俺が信じているんだ」と「俺が」が出てくる。われわれ、たいていクリスチャンと称している者は、大きなミステイクをしていますよ。まだ「俺が」が残っている。

「誇ることがないためである。」それは、前の八節に賜物という字が出ている。賜物、神からもらったもの、もらい物なんだ。もらい物は誇れない。「俺がなした」「俺が信じた」ということになつてくると、どうしても信仰というか行ないということに「俺が」が出てきますから、誇るということが出てくる。誇りがあるのは、それは信者とは言わない。誇りがなくなつたら信者です。

○一〇節「わたしたちは神の作品であって、良い行ないをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである。」

私たちは神の作品、すなわち神が贖いを、キリストを通じて十字架を、贖いを通じてわれわれに永遠の命を与えて、そして永遠に生きる存在とてくださった。われわれは、神の作品なのです。すなわち、イエス・キリストにあって造られたというのは、キリストの贖罪によって造られた。

一〇節b「神は、神は私たちが良い行ないをして目を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。」すなわち、かくして神は贖って、われわれを新しい永遠の生くる存在として、永遠の命を与えて、聖霊を与えて、われわれは日々生くるものとしてくださる。そうして下さっている。

われわれは、分相応に贖いを受けさせてもらう。その受けさせてもらったことによって、われわれは永遠に生きるものとしていただいて、この世に存在させていただいて、そして生きさせてもらっている。われわれはこの生きている間、世にある人生において、神から与えられる毎日目の前に置かれる仕事を、われわれは神から与えられている力相応になしたらい。

それは、人から見てどんな平凡な、どんな取るに足らない仕事に見えてもいい。それは良い仕事です。自分で良い、悪いを判断したらいいかん。神が、ちゃんとそういうふうにしてください。だから、神がしてください。そのことを毎日したらいい。

道は近きにある。ですから、これはそういうふう自分でえらく考えて、いいことしなければならぬ、悪いことはしない、このようにしたら、いいことになるのだと、そんなごちゃごちゃごちゃ考える必要はない。われわれは、日々起きて与えられることを、自分のなしたいことをなすにあらざして、目の前の自分のなすべき

ことをなしたらしい。簡単ですよ、神がそうしてくれているんだから。

以上、大意であります。

一節から一〇節までに「するように」という字が三つある。七節から一〇節までに「ため、ため、ように」と三つある。

第一は七節の終わり、「わたしたちに賜った慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すため」、これは何々するように、何々するためと、これが第一。

そうですから、われわれが救われたのは、この私たちに賜った慈愛による神の恵みとは、これは贖いの恵みです。すから、贖いの恵みの絶大な豊かさを、贖いの恵みの絶大な測るべからざる豊かさを、来るべき世に示すためと
いう。

私たちが救われたのは神の恵みの絶大な豊かさ、無限の贖いの豊かさの富を、人に、次の世に伝えるためだという。神の贖いの無限の救いの富を次の世に伝えるためだという、私たちが救われたのは。

九節は、「それは、誰も誇ることはないためである」と、誇ることがないためだという。本当に誇ることがなくなったら、本当にこれはもう謙遜な人だ。誇ることがない。自分に誇ることがないんですから、皆賜物ですから、頂き物を振り回してえらい自慢する人はいない。誇ることはない。

もう一つの「ため」は、この一〇節の終わり。「良い行ないをして日々を過ごすように」。良い行ないをして日々を過ごすためである。そうですから、われわれが良い行ないをして、良い行ないとは良い行ないと見えなくてもよろしい。良い行ないと見えるものは大したものではない。

シユバイツァーがアフリカへ行って、土人を助けているというのは、われわれから言ったらえらい善行に思っ

ているけれども、むしろ運転手がけがをしないように運転していることと、どっちがいいか悪いか分かんですよ。人間の考えでは、シユバイツァーはえらい善をやっている、運転手なんか当たり前ではないか、正確に運転するのは当たり前ではないかと。

家で、主婦が主人のために健康になる食事をつくっているというのと、私はシユバイツァー大先生がアフリカでやっておられるのとどっちがいいか、どっちがいいとは言えないと思う。

各自、目の前に置かれたることをやったらよろしい。その意味は天国で分かる。この世では分からない。天国に行ってみたら分かる、天国に行ったら、これ逆さまになっているですよ。

この世で「あんなやつは」と言っていることが、俺より上に座ってる。小西先生、上にいないではないか。ずっと一番下に小西先生が座っていた。どこかと思ったら一番前に座っていた。そういうことがあるんですよ。

人間から言ったら、なにか勉強でもしていたら分かるように思っているが、こういうふうな学校でもやめて聖書を講義していたら、「えらい先生、よく知っているな」。そんなことは、知っているのか知らんのか分からない。

いい悪いは、人間の考えはやめたまえ。自分の目の前に置かれた、なすべきことをなしましょう。「信望愛のうち、最も大いなるものは愛なり」とパウロは言った。そうですから、本当にわれわれの人生は、この世における人生というものは真剣なものだ。われわれは、金儲けとか偉い人になるためにやっているのではない。

天国に行ったら分かる。この世の人間の尺度をもって、えらい、いかん、賢い、こうだ、そういう尺度はやめましょう。どっちが賢いか分からない。

誠に貧しい説教をさせていただきました。今日話したこと全部、この大意は私から出ているのではない。これ

は先生から、友人から学んだことなんです。今日皆さんの聞いていることは、小西が俺の説教だと言って、俺が言うところは、少しもない。一点もない。みんなこれは大先生から教えてもらった、習ったことなんです。

特に「わが主イエスよ」と、主の名を呼べということは、何か小西が勝手に称名し、「わが主イエスよ」と言っているけれど、これは小西から出ている言葉ではないんですよ。スワ子は、お父さんが電車の中で「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言って、恥ずかしいと、言っていたそうですが、私は言うけれど、私が言っているのではない。パウロ先生が、ロマ書第一〇章一三節において、「主の名を呼び求める者は、すべて救われる」とおっしゃった。

第八講 教会の単一性(一) 第二章一節―一三節

(昭和五二(一九七七)年二月二七日)

本日は、司会者に読んでいただきましたエペソ書の第二章一節から二二節までのうち、その一として、初めの三節、一一節、一二節、一三節について簡単な注解を加えたいと思います。

このエペソ書は、この前、第二章に入つて一節から一〇節までにおいて、いよいよ教義の部に入ったわけです。第二章、三章、四章前半と、この三章にわたりまして、パウロはいつものとおり教義の部分、すなわち信仰の客体、教義の部分につきまして述べて、それから四章の後半から五、六章と三章にわたりまして、いつものとおり、行ない、道徳、われわれの生活の問題について述べているわけです。

いつもパウロは、初めに教え、教義、すなわち何を信じるか、信仰の客体を述べまして、それから後半において行ない、すなわちわれわれの生活を述べているのでありまして、これはいつも、どの手紙もそうなっておりますが、われわれはこの点について深く学ぶ必要がある。

どうしても初めに教義、何を信ずべきかと、信仰の客体、それを学ぶ必要がある。それが教義の部でありまして、第二章、三章、四章において、これから学ぶのであります。教義の部は、何だか理論、理屈のようでありまして、興味もなく實際生活に関係がないように思ひまして、われわれはこれをおろそかに致しますけれども、本当のキリスト教の信者の生活、道徳は、行ないというものは、この教義の部を離れて出てこない。そうですから、いかにこの教義の部というものが大切であるかということを知る必要がある。それで、われわれはこれを毎日、毎日ここで学ぶわけです。

たとえば、教義の部は数学で言いましたら、定理みたいなものなんです。定理を知らずして数学の問題は解けない。そうですから、どうしてもこの教えというものはつきりと、がっちり、学ぶ必要がある。興味はなくても、これはしっかり学ぶ必要があるのです。

第二章に入りまして一節から一〇節までに新生、新たに生まれるということをやりました。繰り返しになりますから一節から一〇節までの理解について詳しく学びましたから、それはもう触れませんが、いよいよ今日はこの新生、この一一節から二二節までについて学びます。

これは教会の単一性、教会の単一性の創造、教会の単一性を神が創造した、そういう教会は一つである、ただ一つであると、そういうことについて、一一節から二二節までにパウロが述べた場所でありまして、これがエペソ書の教えの中心をなしている。

このキリスト教の教えを学びますのに、われわれ日本人は非常に恵まれていると思います。われわれの祖先が、数百年にわたりまして、仏教において学びましたところが非常に参考になるのであります。私はこの日本に生まれ、特に自分の家が浄土宗の關係の家に生まれたということ、私はこの年になりました、非常にいよいよ深く感謝しているわけであります。

聖書を読みましても、われわれの祖先の信仰、仏教において学びました、そういう信仰なくして読むのと、そういう信仰を少しく学んでそういう精神で読むのと、ずいぶんこのキリスト教の深さが違ってくる。私は、いつもこれは申していることでもありますけれども、私は将来、聖書の最も深い注解書は東洋人から出るような気がするのです。

私はロマ書を五五年学んでおりますけれども、もちろん外国語を読む力はありませんから、外国の立派な著書

を十分に読みこなすことはできませんけれども、例えば世界で有名なロマ書の注解書を数冊読ませていただきますけれども、内村鑑三先生のロマ書の注解と比べたら、特にこの内村先生のロマ書の注解の深さ、特にパウロが非常に強調しているところの望み、復活する望みということに対する注解の仕方は、世界の大先生と比べまして、内村鑑三先生の注解というものは、私は際立って優れているように思う。

そうですから天国のこと、復活のことについては、むしろ世界の大先生よりも内村鑑三先生の理解のほうが、高い低いは言えませんが、日本人の過去千年の研究というものが、内村鑑三をしてその深い理解をなしたものであろうと、私はそう思うのであります。私の考えは間違っているかもしれませんが、これは歴史が証明する。これから二一世紀、二二世紀と、世界の歴史が私のこの意見を証明すると思うのであります。

前置きはそのくらいにいたしまして、今日は第二章一節、一二節、一三節、これはエペソ書の教えの中心的部分でありますので詳しく申し上げたい。それで、今日の司会者が読みました一一節から二二節まで、これを三回にわたってこれから講義したいと思います。

○二章一節、一二節「だから、記憶しておきなさい。あなたがたは以前には、肉によれば異邦人であつて、手で行つた肉の割礼あるものと称せられる人々からは無割礼の者と呼ばれており、またその当時は、キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で希望もなく神もないものであつた。」

「あなたがた」というのは、異邦人の信者に対して言っている言葉であります。あなたがたは異邦人、あなたがたは信者は以前は、キリストを信する以前は、肉によれば異邦人であつて、すなわちユダヤ人以外の人であつて、

そして手で行なった肉の割礼ある者、これはユダヤ人です。ユダヤ人は手で行なった肉の割礼ある者。これは、ユダヤ人は割礼がある、そういう肉の割礼があるということをもって、自分は神に特別に恵まれた者として、非常に自慢しておりましたから、パウロは、ユダヤ人は割礼あることをもって非常に自慢して、神に特別に恵まれた民族と言っているけれども、それは人間の手で行った肉の問題であつて、それは必ずしも彼らが自慢しているように自慢にならない。必ず神に近いとは限らないと、そういうふうに分族の自慢をしているのは、単にそれは神の前に尊いものではない。人間側の肉に付けるものであると、そういうことを言っているわけです。そういうユダヤ人からは無割礼、割礼がないと言つてさげすまれて、侮辱されておつた者であると言つていられるのであります。

一二節、「またその当時はキリストを知らず、」キリストがなく、キリストを知らないから、イスラエル、本当の神のイスラエル、神の民の国籍がなく、約束されていたいろいろの契約、神の契約、イエスが約束しましたが、そういう神のいろいろの契約に縁がなく、そして従つてこの世の中で希望もなく神もないものであつた。

要するに、君たち異邦人は、ユダヤ人からは無割礼の者と言つてさげすまれ侮辱されているが、この侮辱というものは必ずしも当たつていないわけではなく、ユダヤ人が間違ひであるということに暗に言っているわけであります。そういうユダヤ人からは侮辱され、そして当時はキリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されていたいろいろの契約も縁がなく、この世の中で希望もなく神もない者である。

「希望もなく」、この「希望」という字には定冠詞が付いておりませんから、これは必ずしも復活の希望、キリスト再臨の希望を指しているわけではありません。これは、もちろんそれを中心に含んでおりますけれども、その他の希望全て希望というものはない、神もない。この神もなく希望もないというのは、これが未信者、また神

を信じない者のこれが特徴でありまして、神なく希望がないというのはこれが未信者の姿であります。

そうですから、信者というものの最も大きな特徴は希望。これは、冠詞が付いておりませんから復活の希望、必ずしも復活の希望だけを指しておりませんけれども、この希望のうちのもろもろの希望のうちの中心的希望は復活の希望なのです。復活の希望、すなわちキリスト来給う、再臨し給うときに、今日賛美歌で歌いましたごとく、キリスト来給うときにわれらは復活させてもらう。キリストが復活したごとく、われらも復活させてもらって永遠にキリストとともに生きる。これが希望、この希望と書いてあるうちの中心的希望です。これがあるかないかということが、信者・無信者の最も中心的特性なのです。

そうですから、救いというのはこれを言う。救いというのはわれらが救われた。この前に学びました新生、一節から一〇節までに学びました、新たに生まれると言ったら、この永遠の命、復活するものにしてもらうということ、これを救いと言う。

いつも同じことばかりになりますけれども、これがはっきりしていない。教会に行っていると言っても、最も大切な問題、教会において最も大切な問題はこの問題です。永遠の命を持っているか持っていないか、復活する者か、復活しない者か。これが信者・未信者の、これが分かれる点になる。この点を、はっきりと学ぶ必要がある。

われわれが小さな悲しみ、苦しみに勝つことはできない、己に勝つことができないうのは、これがはっきりしていない。これがはっきりしてくると、われわれに分相応の力が与えられる。

これが「希望」。聖書全体は、天国へ行って永遠に生きる、希望を与えるために聖書がある、この世で人に親切をちよつとするとか、この世で平安であるとか、この世のわれわれの行ないのこういうものは、それは付いて

くるものなんです。二次的に付いてくるものです。根本が必要なのです。

くどくなりますけれども、この「希望」という字はロマ書では一五章一三節、ロマ書の結論という場所において、ロマ書の結論、ロマ書全体は、「希望の神が聖霊によって、この希望をあなた方に満たすために、満たされたことを」ということでロマ書は終わっている。そのときの「希望」という字は「希望の神」、それにこの「希望」という字には、皆定冠詞が付いている。そうですから、これはもう天国の希望、復活の希望のことなのです。この天国の希望、復活の希望を、神様が、この天国復活の希望を、聖霊によって汝らに満たされたことを、ということでロマ書は終わっている。

そうですから、ロマ書全体というものは、一言で言えば、永遠の命の希望が、聖霊によって、おまえたちがその希望に満ちあふれるようになることを、と言うためにロマ書は書かれている。それはロマ書には定冠詞が付いている。

しかし、ここには定冠詞が付いていないから、これは復活の希望というだけではありません。ここはそのほかのいろいろな希望も含んでいる。しかし、そのいろいろな希望の中心的希望は、復活の天国へ行くという希望です。高円寺東教会へ来ていただいたら、ほかのことは何もできなくてもよろしい。私は天国へ行くのである、天国で復活させてもらうのである。なぜか、イエス・キリストの贖いがあるからです。自分の信仰、自分の行ない、そんなものによらない。ひとえに、イエス・キリストの十字架の贖いによって。

○一三節「ところが、あなた方はこのように以前は遠く離れていたが、今ではイエス・キリストにあつてキリストの血によって近いものとなったのである。」

「イエス・キリストにあつて」と言うのは、イエス・キリストの贖いを信じていることを、「イエス・キリストにあつて」と言う。パウロのこれは一枚看板、「エン・クリストウ」、「キリストにあつて」というのはパウロがいつも言う言葉である。「イエス・キリストにあつて」というのはどういふことかというところ、イエス・キリストの贖いを信じるということなんです。

それで次。「イエス・キリストの贖いを信じて、イエス・キリストの血によつて」、またこれパウロは贖いを説明している。イエス・キリストの血、十字架の贖いを出しているのです。「イエス・キリストの血によつて近いものとなつた」というのは、神に近いものとなつた。神に近いものになる。すなわち、永遠の命をいただくというの、ひとえにイエス・キリストの贖いによる。これを福音という。キリスト教の福音というのは、イエス・キリストの贖いです。自分の信仰、自分の行ない、自分のその心の状態とか行ないの状態とか人格とかそういうものによらない。ひとえに、イエス・キリストの十字架の贖いによつて、われわれは神の言葉に従い、永遠の生命を頂く、これを福音と言う。

そして、その福音の信じ方、その贖いを信じて信仰を継続する方法は、ロマ書一〇章においてパウロが述べたごとく、「わが主イエスよ」と、主の名を呼ぶということにある。この単純なる方法、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と主の名を呼ぶという方法が、この贖いを信ずる信仰に入り、この信仰を継続する、この方法として主の名を呼ぶという方法を考えた。これが、ヨエルは予言した。「主の名を呼び求めれば救われる」ということをヨエルが予言した。そうですから、それをロマ書一〇章によつてパウロが言つた。そうですから、この贖いの信仰に入り、この信仰を継続する方法は「わが主イエス」と称えることです。

こういう理解は、日本人の祖先が千年間勉強してきた、救い主の名を呼ぶ、あの彼らの経験を通してわれらは

はつきりとそれを言うことができる。これは、パウロのロマ書一〇章の「主の名を呼び求める者は救われる」という言葉は、まだ決してキリスト教の新教の西洋の学者は注目していない。これは、東洋人がこのロマ書一〇章一三節の深い意義を闡明する義務と特権を持っている。

これが、一三節の贖いの意義であります。要するに、贖いということ、これがキリスト教の全部です。イエス・キリストの贖いというのは、これを福音と言う。これは、あなたたちが信じずにいてもよろしいですよ。私は無理に信じてほしくない。信じないでもいいけれど、キリスト教の全部は贖いである。

コリント前書一章三〇節に、イエス・キリストは神に立てられて、われわれの智と義と聖と贖いになったと。われわれの智恵、義、聖、贖いとなり給えりと。イエス・キリストがわれわれの全てとなったということです。

ヨハネ、ペテロというふうな方々は、あまり教義のことをごたごたごた説明しなかった。しかしながら、彼らはこの教義の根本である贖い、イエスの復活ということについては驚くべき正確に深く理解していた。ゆえに、ヨハネやペテロは、人類の教師としてわれわれを導く力を持っているのです、あまりごたごた理屈を言わなかつたけれど。

私は、この希望、復活の希望、これはキリスト再臨のときに復活するのですけれども、これはわれわれ生きてある間に再臨に会う人は非常に幸福な人です。われわれ大部分は再臨前に召される、死ぬ。そのときにはヨハネ伝一四章三節、すなわちキリストが来て、おまえが死ぬときに迎えに来て、おまえを迎えて、私の国に連れていくと、ヨハネ伝一四章三節にイエスは約束した。われわれ大部分は、復活の前に天国へ連れて行ってもらう。

このヨハネ伝の一四章三節、すなわちキリストが来て、迎えに来て、そして天国へ連れて行ってくれるということ、これは本当にわれわれの生活の頼りになる。これが、われわれキリスト者を支えている。文句ですよ。こ

ういうことが本当にはつきりして来たら、われわれに人生に対して生きる力が出てくる。悲しみ、苦しみに打ち勝つ力が出てくる。

何遍も同じことになりましますけれども、石館夫人のご母堂は、すなわちこの人生の悲しみ、苦しみに会われたときに、「わが主イエスよ、わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言つて、この人生の苦しみを勝ち抜いてこられた。

われわれもまた、分相応に復活の望みと来世へのキリストが来てくださることを、分相応にこれを信じ望んで、そしてわれわれはわれわれの人生の悲しみ、苦しみに会ったときに「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と称えて、われわれの人生における義務を尽くす者になりたい。

蓮如上人が、「たとい一文不知の尼入道なりというとも、後世^{ごせ}を知るを智者とする」と言つた。何も知らない尼入道であるとも、後世を知る、天国を知っている、これを「智者とする」と言つた。智者であるか、愚者であるか、本当にわれわれはその希望を持ったときに、われわれの人生がそれを証明する。

第九講 教会の単一性(二) 第二章一四節―一八節

(昭和五二(一九七七)年三月二三日)

今日は三月一三日、月という字を取りますと三・一三となります。ちょうど三月一三日のその日、二八年前に今の牧師館で本日教会が始まったわけであります。今日は誠に記念すべき日でございます。

三月一三日、三三というのは、ことし初めて、ああ、これは三三になるなということに気が付いたのですが、三三といえますと、イエスが三三歳で十字架におつきになりました、そして贖いを成就してくださいました。そうですすから三三という数字は贖いの成就、贖いの数字と言ってもいいのであります。イエスは三三歳で贖いを成就した、完成された。

そういう意味におきまして、三月一三日に始めました教会が、この贖いだけを説いている。誠に外観はみすばらしい教会でございますけれども、贖いだけを説いているということは、誠にイエスの贖いにふさわしい創立の日であります。

もう一つ、日本民族が読んでまいりました仏教の法華経の第二章、これが観世音菩薩普門品でありまして、法華経の第二章は観音経と申しております。観音経というのは一語にして言えば「わたしの名を呼ぶ者を救う」ということが書いてあるお経でありまして、観世音菩薩は三三の姿を現して人類を救うということが言われております。この三三という数字は、観世音菩薩と非常に関係が深い数字であります。

そういう意味におきまして、今日はちょっと仏教のことを思い出しているのですが、日本仏教史において最大・最高の地位にいらつしやる源空上人・法然上人は、旧一月二五日お亡くなりになりました、今日は旧の一月二

四日に当たっている。法然上人の今日はお逮夜たいや(忌日の前夜)にあたります。そうでありまして、誠に今日は、私にとりましては非常に感銘深い日であります。

説教の場所は「教会の単一性」、教会は単一である、教会は一つであると、そういうことがエペソ書の中心問題でありまして、それが、今日読んでいただきました二章の一一節から二三節までに書かれている場所です。これが、よく牧師の試験にいつも出る場所なんです。ですからこれは非常に大事な場所のようでございます。二章一一節から二三節まで、これを三回にわたって講義をいたしますので、前回は一一節から一三節まで、本日は一四節から一八節までの大意を学びたいと思います。

○一四節「キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除いてくださった」

「ご自分の肉によって」は一五節にかけたほうがいいですから、一五節に譲ります。

一〇年前にここを講義しましたテープを昨日聞きましたのですが、誠に一〇年一日のごとく、一〇年前としてはなかなか、私の説教が自分にとりましては出来過ぎていた説教に思いました。それで感じましたことは、神様は導いてくださる、聖霊によって導かれているんだ。分相応の、自分の信仰以上の話をしている。きのうは私、自分のテープを聞いていて、一〇年前に理解していない、頭にはっきり分かっていないことを説明しています。

そうですから福音の真理というものは、徐々に分からされる。いつも言いますとおり「徐々に」ということは私が好きな言葉でありまして、先ほどの観音経の中に「生老病死の苦、漸をもって滅せしめ給う」と書いてある。

生きる苦しみ、老いる苦しみ、病気の苦しみ、死の苦しみは漸次なくなると、観世音菩薩の力によって漸次なくなると書いてある。

そうですから、本当のものは漸次にくる。真理は漸次にくる。ぱっと分かるようではありませんけれども、それは非常に浅薄な分かり方です。アウトラインだけ分かっている。漸をもって自然に自分のものになる。真理というものはそういうものなのです。福音の真理もそれに洩れない。

一〇年前の説教を聞きまして、これは一〇年前の実力以上のことを言っている。これは私は不思議だと思っています。今日は一〇年前のそれを読みましても、一〇年前の説教にいかないかしらん。ちよつと落ちるかも知らない。きのう説教を聞いていてそういう感じがしたくらいでした。

真理というものは「これを古今に通じてあやまらず、これを中外に施してもとらず」と教育勅語にありましたけれども、本当に時の長さというものは、古いから真理ではない、新しいから良いというわけにいかない。純金は純金です。古くても真理、純金は、われわれの人生に力があるわけです。本物かうそのものかということ、われわれの人生の経験をもって知ることができる。

そういうわけでありまして、一四節の初めに「イエス・キリストは、わたしたちの平和である」と、「平和であつて」とありますが、これはやっぱり「平和である」と切ったほうがよい。原語もはつきりと一文をなして、キリストはわたしたちの平和である。これが、今日の二四節から一八節までの五節の中心問題。要約した「イエス・キリストはわれわれの平和である」、これが今日の問題です。「平和であつて」と続けると意味が弱くなりますから、「平和である」と切ったほうがよろしい。

イエス・キリストがわれらの平和である。これはイエス・キリストがわれらの贖いであるということから出

てくる問題です。コリント前書一章三〇節に「イエス・キリストはわれらの智慧となり、われらの義、聖、贖いとなりたまえり」と、イエス・キリストがわれらの義であり、聖、贖いとなったと、あれと同じ言い方でありまして、ここにわれらのよりどころがある。

自分というものの内に平和があるならば、自分というものが平和の一部分であるということになってきたら、自分というものは動く。自分というものは当てにならない。自分の努力とか、自分の心の状態とか、自分の信仰の状態とか、何遍も言うことでありますが、自分というものは動く。

われらの平和というものが本当に動かない平和であったならば、イエス・キリストがわれらの平和です。平和というものは賜物です。イエス・キリストはわれわれの賜物です。そうですから、われわれ側が自分のほうでもプラスして、われわれのほうから信仰をもつていくとか、自分の行ないをもつていくとか、そういうものを助けにすることはない。

源空上人が「助^{すけ}をささぬ念仏」ということを言った。われわれのほうから学問をもつていたり、信心をもつていたり、行ないをもつていたり、何遍も唱えるということをもつていたり、そういうものをプラスした称名はななんだと、助^{すけ}ささぬ、「助^{すけ}をささぬ念仏」ということを源空上人はおっしゃった。

われわれの平和も、われわれ側から何かもつていくような平和だったら、それは動く。イエス・キリストがわれらの平和、イエス・キリストがわれらの救い、賜物です。だから、われらの救いとか、われらの永遠の命というの、これは賜物です。そうですから信じ、それを信じ受け入れるほか手が無い。

受け方、どう受け入れるかといったら、主の名を呼ぶ。「わが主、イエスよ」と主の名を呼ぶ。「わが主イエスよ、主はわが救いのイエスなり」と言ったらいい。イエス・キリストはわれわれの平和であると、ここに今日の

真理が全て出ている。

「二つのものを一つにした」、二つのものというのは異邦人とユダヤ人、これを一つにした。二つのものを一つにしたといったら、イエス・キリストが平和であるから、ユダヤ人もイエス・キリストが平和です、異邦人もイエス・キリストが平和です、そうですから異邦人もユダヤ人も同じものにした、一つにしたという。そのことをまたこれから以下数節にわたって詳しく説明しますが、要するに、イエス・キリストがわれわれの平和であるから、ユダヤ人の平和であり異邦人の平和です、イエス・キリストが。そうですから平和という点において一致する。

異邦人とユダヤ人というのは、ユダヤ人は異邦人を人間と思っていない。虫けらみたいに思っていた。ユダヤ人は、われわれだけが神から恵まれた人間であって、異邦人というのは人間の仲間に入らんといくらいさげずんでいた。そういう違いのある人種を一つにした。これを実現する力があるものがあつたら、人間と人間との平和というものは必ず実現する。どんな憎み合っている間でも、異邦人とユダヤ人とが一つになるような力のあるようなものであつたならば、こういうものは必ず一つになれる。

そうですから、人間と人間との平和、人と人との平和というものは、異邦人とユダヤ人とを一つにしたという神の力、この原理によって必ず平和が来るとというのがパウロの主張です。一つにして、ユダヤ人と異邦人との間の敵意をないようにしてしまつたのです。キリストが異邦人の平和であり、キリストがユダヤ人の平和であると、その原理からそうなるのです。

○一五節「ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである」

一四節の最後の文、「ご自分の肉によって」というのは、二三歳のときにご自分の肉を十字架につけて、「数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである」。一五節は、すなわちイエスの十字架の贖いによって贖いは完成した。贖いの完成は律法の廃棄。贖いの完成というのは、律法を完全に行なったということです。律法を完全に行なったがために贖いが完成する。贖い贖いと言いますが、贖いというのはわれわれの律法の完成です。道徳を完全に行なったということです。

ですから、われわれが贖いを信じるということは、われわれがあらゆる善行を成したということになる。律法は要らない。あれせよ、これせよ、こういう善行せよ、ああいう善行せよという律法は必要ない。それをパウロはロマ書一〇章において「イエスは律法の終わりとなりたもうた」と言った。そのことです。イエスが律法の終わりとなられたということは、律法を完全にわたしに代わって行なってくだされたということです。すなわち、戒めの律法を廃棄した。

その律法を廃棄した、贖いを完成した、それは二つの目的がある。二つの結果が出てきた。

○一五節B「彼にあって、すなわちイエス・キリストにあって、二つのもの、異邦人とユダヤ人とが共に新しきクリスチャン、霊の人にして、二つの間に平和をきたした。」

これが、贖いからくる第一の結果です。すなわち、異邦人もユダヤ人も共にそれを一人の新しき人、クリスチャンというものに、霊の人に神がつくり替えて、そして二つの間、異邦人とユダヤ人との間に平和をきたらした、一つにした。これが贖いの一つの結果であります。

すなわち贖いというものは、われわれをどんな人間でも、クリスチャン、新しき人、永遠の命の所有者にする。

いつも言っている贖いというものは、いかなる人でも贖いを信ずる人にはこれを、「新しき人」にする。「新しき人」というのは永遠の命の所有者です。救われた人です。永遠の命の所有者にする。贖いというものは、永遠の命の所有者にする。

そうですから、われわれはイエスの贖いを聞いたときに永遠の命を所有していると、われわれは永遠の命の所有者だと認めて、信じて間違いいではない。これは異邦人でも、あるいはユダヤ人でもこの二つとも、一人の新しき信者、霊の人、永遠の命の所有者につくり替える。そうですから、異邦人とユダヤ人との間に平和ができてくる。

われわれは永遠の命の所有者に本当になったら、けんかは起こらない。けんかはやむ。この無限の尊い永遠の命の所有者、新しき創造者、救われた者にわれわれがなったならば、本当にこれがかつたならば、平和がくるですよ。

○一六節、贖いのもう一つの結果は、「十字架によって、この贖いによって、二つのもの、異邦人もユダヤ人も、永遠の命を頂いた一つの新しき信者として、新しき霊の、永遠の命の所有者として神と和解させた。」

贖いは、神と和解させたという。

すなわち第二の贖いの結果は、異邦人もユダヤ人も、神と贖いによって一つのからだとなって信者となって、神と和解したという。異邦人もユダヤ人も神と和解したという。神と異邦人を、すなわちこれを和解させたというのは第二の結果です。神と異邦人もユダヤ人も和解して、神と和解したがゆえに異邦人とユダヤ人との双方においてまた和解がくるという。その二つの間の、異邦人とユダヤ人との間の敵意を和解によって滅ぼしてしまっ

たという。

第二のほうは、異邦人もユダヤ人も神と和解したということによって、神を通じて双方の敵意、ユダヤ人と異邦人との間の敵意をないようにしてしまった、滅ぼしたということでありませぬ。

○一七節「それから彼は、こられた上で、イエス・キリストは聖霊として今度はこられると、そして天から聖霊として下ってこられまして、遠く離れている異邦人、また近くにいるユダヤ人に対して、すなわち平和を述べ伝え、伝道者を通して贖いの平和を述べ伝えられたのである。」

「彼は」というのは、イエス・キリストです。あなた方に平和を伝えられる。

○一八節「というのは彼によって、イエス・キリストによって、わたしたちの両方の者が一つの御霊の中にあつて、聖霊の働きによって贖いを受け、そして神との間の和解ができて、そして神に近づくことができる」
こういう意味であります。

すなわち、今日のところは平和、異邦人とユダヤ人との間に平和をきたらす、すなわち平和にならしめると、異邦人とユダヤ人とが仲良くなるというこの点から見た福音の理解です。贖いの理解です。

今日のところは、贖いをよっぽどはつきり知っていませんと分らない。ここは、いつも牧師試験に出るところだから、これは贖いの教理をはつきり分かっていないと、ここは何遍聴いても分かったような分らないようなところですよ。

要するに、イエス・キリストがわれらの平和である。イエス・キリストがわれらの贖いであるということがは

つきりするときに、これがつきりします。

そしてこれは、神学上の聖書解釈上の問題で牧師の試験によく出る場所であるのみならず、本当に異邦人とユダヤ人が一つになる力をもっている、そういう福音が分かるということは、人生の平和の問題、人と人との間の平和の問題に、この原理によって、これが一番人と人との平和をもちきたらす、これは人類の歴史に表れたる最も力ある方法です。これが夫と妻の間の平和、親と子との平和、あるいはまた友達との平和においても、すなわちイエス・キリストの贖いを通じて一つになるといふ、これが根本的な解決です。

われわれも信仰の年月につれまして、いよいよ贖いを通じて、永遠の命を通じて新しい人となって、人と人が平和になるといふ、人生においてこういう工夫が必要です。もし相手が分からなかつたら、自分一人がこの福音の原理を分かつただけでも、私は随分、人と人との平和というものは非常に増進する、本当に平和になると思っています。

われわれ信者が神様から聖霊を頂いて本当の信者になるときに、人類の生活に平和というものをもちきたらす、われわれはその原動力になり得るのであります。

第一〇講 教会の単一性(三) 第二章一九節―二二節

(昭和五二(一九七七)年三月二七日)

今日はエペソ書二章の一一節から二二節まで読んでいただきましたが、すでに一一節から一八節まで二回にわたって講義をしておりますので、本日はその最後の部分、一九節から二二節までの大意を述べたいと思います。

一九節から二二節までの四節は、一〇年前、昭和四二年三月五日にここを講義いたしました。そのときには柴田(徳衛)君が司会をしていただきました。そして最後の献金のお祈りを加藤武樹君がしてくれました。それを昨日もう一度聞かせていただきました。私感しましたことは、一〇年前の講義は誠に貧しい講義でございますが、自分がそれを聞きまして、私は神様の御導きを感じた。これは自分がやっているのになしに、これは神の御導きによって、神の御恵みによってこれをもたしているということを感じました。

聖書の講義というものは誠に見栄えのない、ちょっと見ますと面白くない、あまりわれわれの日々の人生に係のないごとき感をいたしますけれども、私はそういう聖書の知識に支えられて本当の信仰が与えられるということをつくづく感じまして、聖書の講義というものがいかに必要であるかということも昨日も感じました。これは人がどういふ風に感じようが、どういう風な批評があろうとも、私はここで説教させていただく限りは、聖書の講義を続けさせていただきたいと思えます。ご了承願います。

二章の一一節から二二節までのこの場所は、エペソ書の教義の部分の中心問題でありまして、学者の言っている教会論がここに展開されている場所であります。非常に重大な場所でございますので、三回にわたって講義をいたすことにいたしました。すでに二回にわたって一一節から一八節まで講義いたしました。本日は第三回目、

一九節から二二節までの部分であります。

前二回にわたりまして申し上げました大意は、君たちは信ずる前は、未信者として神もなく来世の希望もなく暮らしておったが、今やイエス・キリストの贖いによって神の子とせられ、お互いに異邦人もユダヤ人も、その贖いによって新しき創造物となった神の子とされたから、異邦人もユダヤ人も共に近づくことができ親しくなることができ、また異邦人もユダヤ人も和解ができて神に近づく者となった。そして一つの新しき民、一つの教会をつくることになったのである。大体そういうことを二回に分けて申し上げたわけであります。

すなわちイエス・キリストの贖いによって新しきものとなる、神の子とせられた。そういう贖いからくるユダヤ人と異邦人との関係、贖いという点からみた異邦人とユダヤ人との関係を述べたわけであります。これは人と人との関係の問題になるのであります、実に根本的に人と人が平和になるというのは、人と人が共に神の子となると、ここに根本的な方法があるということパウロが述べたわけであります。これが、われわれ人類二〇〇〇年において経験している、人類の平和の根本的な解決方法であります。

一九節から二二節までの四節は、原文では一文をなしております。日本語では四つごたごたとなっております。これはどうしてもヨーロッパ系の外国語で読む必要がある。皆さんも外国語を勉強なさいましたから、どうぞご婦人の方も学校で習った英語をお捨てにならずに、学校で習った外国語はひとつ残しておいて、これをお読みになれば、はつきりいたします。

日本語にしますと、日本語やら外国文やら分からないような日本語になっておりますから、意味がはつきりしない。特に本日のような場所になりますと原文は一文でありますので、その一文で読みますと、原語のギリシャ語で読みませんが、英語とかドイツ語とか、自分でお習いになった外国語でこれをお読みになりますと意味が

はつきりします。私も中学時代に習った英語が一番読みやすうございますから、英語でこれを繰り返し読んで読みますと本当にはつきりする。日本語で読んでみると、ごたごた書いていて何を書いてあるか分からない。しかし英語で読みますとはつきりする。

今日うちに帰って日本語でお読みになったのと、それから自分で英語でこれをお読みになった感想を一遍聞かせてもらいたいと思います。どんなに英語を深く御勉強ならなくても、中学時代に習った英語でも読める。ですから昔の旧制の中学時代にお習いになった英語はぜひお捨てにならずに、キリスト教の勉強のためにひとつ英語を残しておいていただきたい。

そして今日の場所を、Revised Standard Version で読んでみます。私の発音はまずいですから、昔の六〇年前の英語ですからどうもお分かりにならないでしょうが、今日の文章は英語で読むとはつきりする。ひとつ読んでみます。英語でも一つの文章。

○一九節「So then, you are no longer strangers and sojourners, but you are fellow citizens with the saints and members of the household of God」これが主文章です。それに分詞動詞ですか、(二〇節)「built upon the foundation of the apostles and prophets, with Christ Jesus himself being the chief cornerstone, in whom the whole structure is joined together and grows into a holy temple in the Lord ; in whom you are all built into it for a dwelling place of a God in the Spirit.」

これを英語で読みますと、すなわちあなたたちは今や旅人でもない、今やあなたたちはすなわち神の家族の一員である。英文は見ていらっしやらないから分かりにくいかもしれませんが。かえって分かりにくいかもしれん。

そういうわけで、これはぜひうちで英文でお読みいただくことをお願いしておいて、それから今日の説教に入りましょう。

聖書をもつていただいておりますから、ご覧になって聴くほうが便利でしょう。ここへ私、英語で書いてきたらよかったですと思いますが、時間がなくてできませんでした。お許し願いたい。

それではこの日本語によりまして、この節を追ってまいります。

聖書の文句というのが、われわれの命の綱ですから、われわれの信仰といたら、この聖書の言葉を信ずる。そうですから頼りになるものは聖書の言葉です。牧師の説教でもない。牧師の立派な人格でもない。信者の立派な行ない、そんな感心するようなこともない。結局、われわれが感心しているもの、われわれが立派なものと思っているものは、そんなものは消えていくものです。そんなものに頼っていたら当てにならない。そんなものは、本当の力にならない。

いよいよの場合に、自分がじたばたして本当に腹立ったり、本当に悲しくなったり、本当に人生が嫌になつたりするときになるものは、聖書の文句です。それで聖書の文句をこうして講義しているのです。

なにも私は、自分の小さな外国語の知識を振り回すために聖書の講義しているのではないですよ。私の知っているギリシャ語やドイツ語、英語というのは、そんなものは幼稚園みたいな知識です。私のこの小さな外国語の知識を振り回すために、ここで聖書の講義をしているのではないですよ。

しっかり聖書を聴かなければいけない。君らに力がないということは、聖書の文句が分かっていないということです。われわれに人生を渡る力がないということとは、聖書の文句のつかみ方が少ないということです。ですから何十年たつても同じことです、昔と。駄目ですよ、そんなものは。そんなキリスト教はやめたほうがよ

ろしい。

我々は、聖書の文句に対する尊敬の心が足りないですよ。このごろのクリスチャンは聖書の文句を尊敬していません。そうですから何十年たつても同じことです。ちつとも人格なり、その人の値打ちというものは向上してらんですよ。われわれのうちには、その人の前へ出たら頭が下がるという信者はおらん。もちろん、私もその一人ですよ。

○二章一九節「そこで、あなたがたはもはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである」

現在形、強調されています。われわれは神の家族であつて、本当にキリスト来給うときに永遠不滅の復活体をいただく者であるという、この自覚がわれわれにありますか。非常に強調されています。これが主文章。「なんじらは、もはや昔のごとく異国人でもなく宿り人でなく、今や聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族である」。われわれは聖徒たちと同等です。これは非常に強調されている。

○二〇節「またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであつて、キリスト・イエスご自身が隅のおや石である」

「また」と訳してありますが、これは原文にありません。神の家族であるということの説明です。「使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものである」と。すなわち「使徒たちや預言者」、これは伝道者です。使徒たちや伝道者という土台の上に建てられたものである。ですから、神の家族の土台は使徒たちや伝道者。こ

れは使徒たちや伝道者というものがいかに大切というか、伝道者の責任が分かります。伝道者です。

われわれ信者というのは、伝道者の言葉を聴いて信者になる。伝道者というものが土台なのです。伝道者の言葉を聴いて、それを神の言葉と信じて、そして信者になる。そうですから伝道者というのは、信仰の先生です。先生というものの言葉を通じて、われわれはその言葉を聴いて信者になる。

そしてキリスト・イエスご自身が伝道者、そして伝道者を聴いて信者になった信者の隅のおや石という、その支えているものという。

イエス・キリスト、伝道者が大切ということは、私が信者にならしてもらったのは、伝道者である内村鑑三から福音を聴いた。神の言葉を聴いた。

福音と言ったら贖いのことです。伝道者から贖いを聴く。イエス・キリストの贖いによってわれらは神の子とせられ、神の家族になって永遠の命をもらった。そうですから永遠の命の仲介者は伝道者です。いかに伝道者が大切分かる。真の伝道者が少ない。

これはよその話になりますが、よその宗旨の話を参考に申しあげますと、親鸞が法然に会ったとき、『高僧和讃』の中に自分の先生のことを、「真の知識に会うことは難さが中になお難し」と言った。本当の先生に会うということは難しい中にも難しいと。親鸞は、最も難しいことだと言った。

私は幸いに内村鑑三に会った。もしも私が内村鑑三に会わなかったら、贖いは分からなかったでしょう。贖いがキリスト教の中心であるということとは、内村鑑三に教えてもらった。もしも内村鑑三に会わなかったら、きつと私は、良い行ないをすることぐらいがキリスト教と思っていたでしょう。しかしキリスト教というものは、贖い、永遠の命をもらうということである、天国へ行って復活することであるということの内村鑑三から学んだ。

聖書の文句によって、ロマ書の文句によって。よろしいか。意外なことを内村鑑三は言っているんじゃないですよ。

○二二節「このキリストにあつて、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、」

そしてこの重大なる予言者、伝道者というものの隅のおや石には、また信者の隅のおや石にはイエス・キリストというものがある。「そのキリストにあつて、建物全体」、教会全体です。この教会というのは、建物というのは世界中の教会全体を一つの建物とみてよし、また一つの教会、この高円寺東教会、これを一つの建物とみてよろしい。また個人自身、一人が教会とみて、建物とみてよろしい。三つ、見方があります。「建物全体が組み合わされ、そしてそれが主にある聖なる宮」、すなわち復活体、「主にある聖なる宮にだんだん成長している」。

○二二節「そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである」

また建物全体のみならず、あなたたち自身、今度はあなたがたも。建物の方から言ったら建物がキリストにあつて成長するといえるし、またあなたたちから言えば、あなたたちが、主にあつてだんだん建てられて霊なる神の住まいとなるのである。みな現在形です。この文章のかたちは、現在のかたちです。

ですから、現在われわれは毎日毎日だんだん建てられて、ついには復活して、今も宮ですが、本当にだんだん成長していくのであると。今日の文章はみな現在形、現在 *participle* です。だから現在こうなっているということとをパウロは言った。

今日の文章一九節から二二節まで、すなわち、現在、あなたたちは神の家族である。これが主です。そこへも

ってきて、あなたたちは神の家族であるということを説明して、家族であるあなたたちは、使徒、伝道者の土台の上に立っているし、あなたも伝道者もイエス・キリストの土台の上に立っているんだ。イエス・キリストというものが、すなわち、立っていて、だんだんだんだん成長しつつあるんだと、そういうことです。

われわれは神の家族であると。それは伝道者によつての基礎の上に立っていて、イエス・キリストに支えられていて、そして毎日、神の完全なる住まいに成長しつつあるのであるということです。そういうことが書いてある。

ここは現在形であります。皆さんにお勧めします。どうぞ中学時代に学びました外国語は捨てずに、英語は捨てないように。英語の勉強のために、ひとつこれは残しておく。そして今日のところを、一九節から二二節までをどうぞひとつ英語で読んでください。

英語でも、古い英語 Authorized Version より Revised Standard Version のほうが読みやすい。現代の英語になっておりますから、Revised Standard Version のほうがいいと思います。新しい訳のほうがよく分かると思います。

今日のところ、一〇年前にも読みましたが、内村先生の感想文がありますからちょっとそれを読みます。今日のところに適切でありますから。要するに、これは聖霊によつて、イエス・キリストの霊が働いてわれわれを毎日支えているわけです。私は一〇年前にここを講義して、本日またこの講義をする、こういうことを思いまして、本当に神に導かれつつあるということを実感しました。

これは、いつもお薦めしている内村先生の『一日一生』、九月一七日。

「パウロのいわゆる『かた霊の質』とは、信者の復活体の始めであつて、その核心とも称すべきものである。

信者はこれを受けてすでに復活体の元質を受けたのである。『霊の質』の成長発達したるもの、それが復活体である。復活体は死後において奇跡的に上より着せられるものではない。その元質は信者が信仰状態に入りしその時にすでに与えられしものであつて、贖いを信じたときに、この元質は信者が信仰状態に入る、神の子とせられたという信仰、すなわち贖いを信じたときにすでに与えられしものであつて、死後にその完成に達するものである。かくして信者の復活は半ば未来の希望に属し、半ば既成の事実である」。(今日のところは、現在形で書いてある。既成の事実です、現在がそうです)。「信者はすでに復活の元質をにぎる者にして、同時にまた主と共にその栄光をもつて顕われんことを待つ者である。信者はその肉体において、すでに復活体の種子たねとその核心とを持つ者である。彼はいますでに復活されつつある者である」。

Present Indicatif、現在形です。今日の文章は命令形でもなければ未来でもない。

第一一講 神の奥義と伝道者（一） 第三章一節―七節

（昭和五二（一九七七）年四月二四日）

本日の場所は、一〇年前、昭和四二年三月一九日、これは棕櫚しゅろの聖日でございました、復活節前の聖日でございましたが、講義させていただきました。以来一〇年、大きな病気を一、二回いたしました、健康を与えられて、本日まで再びここを皆さんと一緒に勉強できますことを、誠に嬉しき光栄と存じます。

一〇年前にいたしました講義を昨日テープで聴かせていただきましたのですが、皆様と一緒にこの聖書の話をし、話を聴くということがいかに幸せであるかということをお昨日感じまして、誠に感銘深く、今日もその感銘がまだ残っております。ただ今、君たち数名の方々と一緒にこうして聖書の真理を学ぶことは、誠に光栄に思います。

一〇年たちましたが何も進歩しておりませんが、少しくこの一〇年の間に原語を読むことが、幼稚でございませけれども、少しく進歩したようであります。今日の場所は、日本語の口語訳聖書で非常に感銘深い場所でありませけれども、これを原語で今朝も繰り返し返して読ませていただきました。九時半から一〇時半まで、ここを繰り返し返して原語で読ませていただきました。

山口良二兄弟の祈りにありましたが、いかにパウロ先生が謙遜であられるか。この数節、日本語ではたくさん文章に分かれておりますけれども、原語では一 sentence、一つの文章。パウロといえは、キリスト教の歴史における最大の伝道者です。そのパウロ先生の手紙がいかに謙遜であるか。パウロ先生のこの文章はいかに謙遜であるかということをお、非常に感銘深く読ませていただきました。

異邦人の果てであるわれわれ、パウロが書きましてから二〇〇〇年たっておりますけれども、異邦人のわれわれによって、東京の果てにおいてこのエペソ書が読まれているということは、またパウロ先生がいかにご満足であるかと思えます。パウロ先生が晩年死ぬ前、「自分はイスパニアまで行って、この福音を述べ伝えたい」と言われたこの熱望が、時きたって一九七七年の四月二四日において、日本国の東京の一角において、この福音がまた述べられているということは、パウロ先生もいかにご満足であるかということをおぼろげに思わざるを得ない。われわれもまた、これを少しく理解する者になりたいのであります。

以下、簡単に文字の説明をしたいと思えます。

○三章一節「こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロ」

今まで一章、二章において述べてきた「こういうわけで」。第一章、二章にそれが出てきました。「あなたがた異邦人のためにイエス・キリストの囚人」、牢屋の中に入れられた、イエス・キリストの福音のために牢屋の中に入れられております。これは異邦人、あなたがたのためであると。なぜかという、異邦人のためにパウロは伝道しているのですから。異邦人のために、伝道のために、このパウロが、ユダヤ人から迫害を受けて、そして囚人となっている。

○二節「わたしがあなたがたのために神から賜った恵みの務めについて、あなたがたは聞いたであろう」

「わたしが神から賜った恵みの務め」、この「神から賜った」というのは、恵みにも務めにも掛けたらよろしいでしょう。神から賜った、神からいただいた恵みの務め、福音の務めについて、あなたがたは聞いたであろう。

○三節「すなわち、すでに簡単に書きおくれたように、わたしは啓示によって奥義を知らされたのである」

「簡単に書きおくれた」というのは、第一章、第二章とみてよろしい。エペソ書第一章、第二章において手紙にすでに簡単に書きおくれたように、わたしは啓示によって奥義を知らされたのである。奥義の内容は、また六節に出てきます。この奥義を啓示によって知らされた。

これは注目すべきでありまして、啓示によって知らされたというのは、直接に神から聖霊によって示された、そういう意味であります。自分はペテロ、ヨハネから、そういう人から聞いたのではない。わたしは直接に神から、聖霊をもって知らされたのである。

奥義というのは福音であります、この福音というものは、パウロは啓示によって神から、聖霊によって神から示された。パウロが研究して達したのではない。神から示された。

○四節「あなたがたはそれを読めば、キリストの奥義をわたしがどう理解しているかが分かる」

すなわち、あなたがたは、今まで述べたエペソ書一章、二章、これをよく読めば、わたしがどう理解しているかが分かる。一章、二章において、分かるように書いた。

○五節「この奥義は、今は御霊によって、聖霊によって、彼の聖なる使徒たち、十二使徒と、そして伝道者たちに啓示されているが」

現在は聖霊によってわたし以外の人たち、またわたし以外の伝道者たちに啓示されているが、

「前の時代には、人の子らに対しては、このように知らされていなかったのである」

前の時代には、紀元第一世紀以前には知らされていなかった。福音というものは、紀元第一世紀に始まった。ですから、そのように啓示されていなかったのである。

福音の内容、その奥義の内容が六節。これが奥義の内容であります。

○六節「異邦人が、福音によりキリスト・イエスにあつて、わたしたちと共に神の国を継ぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである」

これが奥義の内容です。これが福音の内容です。異邦人といえば、これは未信者。未信者が、福音によってイエス・キリストにあつて、わたしたち信者と一緒に「神の国を継ぐ者」、「共に一つのからだ」、同じ意味です。「神の国を継ぐ者」、「共に約束にあずかる者」、同じ意味。「神の国を継ぐ者」と「共に一つのからだ」と「共に約束にあずかる」、これは三つとも同じことを繰り返して言っている。そういう者になるということです。これが奥義です。これがキリスト教の奥義です。これを知るものを信者という。これを知らざる者は未信者です。

神の国を継ぐという者は、永遠の命を頂いて、この世の務めが済んだら神の国へ帰って、そしてキリスト来給うときに、キリストと同じく復活させていただきまして永遠に神と共に生きる、これを神の国を継ぐ者という。

神の国を継ぐ者となる、それはどうやってなるかというところ「福音によりキリスト・イエスにあつて」です。福音というのは、イエス・キリストの十字架の贖いによって、自分の罪とが、自分の信仰、自分の行ないというものによらずに、イエスの贖いによって永遠の命を頂く、それが福音の内容です。「福音によってイエス・キリストにあつて」というのは、すなわち贖いのうちにあつてということ。イエス・キリストにあつて」と言ったら、「イエス・キリストの贖いのうちにあつて」ということです。

ですからイエス・キリストの贖いのうちにあつて、その贖いの福音を聞くことによりわたしたちは永遠の命を頂く、神の国を継ぐ者となる、永遠の命の所有者となる、ということなのです。これが奥義です。これが福音の内容です。

よろしいか。何年も私は生きておりませんよ。

キリスト教の福音の内容は、奥義というものは、簡単明瞭です。数学的正確さをもっている。自分の信仰、自分の行ないによらない。イエス・キリストの贖いによつて、われわれは永遠の命を頂く、神の国を継ぐ者となるということ、これが奥義。

この奥義は、紀元第一世紀以前には知らされておらなかつた。しかしパウロは、これを神から聖霊によつて知らされた。そしてこれは他の使徒たちならびに伝道者に、聖霊によつて示された。その奥義の内容は、今、言つたとおりである。

○七節「わたしは、神の力がわたしに働いて、自分に与えられた神の恵みの賜物により、福音の僕とされたのである」

神の力がわたしに働いて、聖霊の力によつて、自分に与えられた神の恵み、イエス・キリストの贖いの賜物によつて、わたしは福音のしもべ、伝道のこの職になつたのである、僕となつたのである。

ここでは奥義ということの内容をはつきり知つておいていただきたい。奥義というものは信者と未信者の区別なく、異邦人とユダヤ人との区別がないということは、このごろの言葉で言つたら「信者と未信者の区別がない」ということです。誰でも、イエス・キリストの贖いによつて永遠の命を得るということです。これが奥義の内容

です。これがキリスト教の専売特許です。

深い信仰をもつとか、良い行ないをするとか、人に親切をするとかいうことは、全ての道徳、全ての宗教に共通している。キリスト教独特の教えというものは、イエス・キリストの贖いによってわれわれは永遠の命を頂戴する、ということなのです。

われわれは不幸にして、永遠の命は欲しくない。山海の珍味も、食欲のないものにはナンセンスです。われわれはこの世のものが欲しい。イエス・キリストの奥義、キリスト教の専売特許は「永遠の命を与える」ということです。キリスト教が難しいという理由はここにある。われわれには永遠の命を欲しいという食欲はない。人に褒められたい、偉いことをしたい、善行をしたい、われわれにはそういうことばかりしかない。そうですから何十年教会に来ていても、キリスト教は分かりません。食欲がないんだから。

これは聖霊によりて、われわれに頂ける。ただ一つの道は聖霊による。人間の努力、人間の善行、人間の信仰、「人間の」と付くものにはよらない。神からの賜物、ギフト、プレゼントです。

第一二講 神の奥義と伝道者(二) 第三章八節―一二節

(昭和五二(一九七七)年五月八日)

お祈りのうちに出てきました言葉でありますが、われわれはキリスト教のことを地上のことにはかり当てはめまして、自分がどうであるとか、自分の信仰がどうであるとか、自分の行ないがどうであるとか、自分がどうもなっていないと言つて自分のことばかり言っていますけれども、聖書を読んでもみますと、聖書は天のことを書いてある。そして福音というのは、われわれに、この肉体が死んでも死なない永遠の命を与えるということが書いてある。それが聖書の中心でありまして、それを福音という。

そのことを学ばなければ、所詮キリスト教を勉強しても意味がない。人に親切にするとか、良い行ないをするとか、あるいは安心した心持ちを持つとか、そういうことは何もキリスト教で言っているだけではない。他の宗教でも言っている、道徳もみんなそうです。

ですから、ここへいらして聖書の講義を聴いていただいて、福音のこと、永遠の命のことはお信じにならなくてもよろしい。信仰は難しい。なかなか信じられない。信じられなくてもいいですから、キリスト教というものはこういうことを教える宗教である、一言で言えば「永遠の命を神様がただで与えてくださった」ということをキリスト教は教える宗教であるということだけは知っておいてもらいたい。信じなくてもよろしい。そういうことを知っておいていただきたい。キリスト教というものはこういうものであるということを。これは感情の問題ではない。知恵の問題です、意思の問題です。

それがまた、われわれの人生にいかに必要なことであるか、それがわれわれに生きる力を与えることになる

いうことは後から分かってくる。初めから自分の日々の人生に応用する必要はない。そういうことを、私はだんだん年取ってきて分かってきた。

それを前置きといたしまして、司会者によってエペソ書三章の一節から一三節まで読んでいただきましたが、この場所はすでに、一節から七節までは前回講義をいたしました。本日は八節から一三節までの大意を学びたいと思います。

一節から七節まで前回学びましたが、中心は第六節。この六節が前回の中心であるのみならず、これが本日も必ずレッスンの中心であります。

○三章六節「異邦人が、福音によりキリストにあつて、わたしたちと共に神の国を継ぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである」

これが前回学んだ中心です。

これをもっと簡単に言えば、「異邦人―未信者のわれわれ―が、キリストにあつて福音により」というのは「イエス・キリストの贖いによつて」ということです。「イエス・キリストの十字架の贖いによつて、わたしたちは永遠の命を受けるものとなった」ということであります。これが、前回学んだ中心であります。これが福音であり、これがキリスト教の全部と言つてもよい。われわれはイエス・キリストの十字架の贖いによつて永遠の命をいただいたのである。

ここには「信ずる」という字がない。六節には「信ずる」という字がないでしょう。「異邦人が、福音によりキリストにあつて、わたしたちと共に神の国を継ぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである」。すなわちキリスト教の中心というものは、われわれがキリストにあつて、キリストの贖い

によつて永遠の命を得る者となるということです。キリスト教は、「贖いで救われる」ということです。

それを客観的に言い表したならば「贖いで救われると信ずる」と、こうなる。小西は贖いを信じて救われていると、「信ずる」という字が客観的にいう場合は出てくる。しかし何を信ずるかという信仰の客体だけをいう場合には、「信ずる」という字は必要ない。「贖いで救われる」です。

はつきりしておいてください。ここで引つ掛かる。「信ずる」と言う字がありますから。わたしは信仰がありません。信仰で救われるのではない。贖いで救われる。この六節には「信仰」という字が無い。これが中心です。今日は八節から簡単に説明いたします。

○ 八節「すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それはキリストの無尽蔵の富を異邦人に述べ伝え」

九節もつながっておりますから、

○ 九節「さらにまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務めがどんなものであるかを、明らかに示すためである」

この八節、九節は、読んで字のごとく、すなわち「聖徒たちのうちで最も小さいものであるわたしにこの恵みが与えられた」。「最も小さいもの」という字の原語は、比較級と最上級と二つの字です。ですから「最も小さい者よりも、より小さい者」という意味です。いかにパウロが自分を低く見積もっているかということが分かる。そのいと小さい者よりも、まだ小さいわたしにこの恵みが与えられた、という。

その与えられた二つの目的があるという。一つの目的は「キリストの無尽蔵の富を異邦人に述べ伝えるため」、これが一つ。第二の目的は「さらにまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる」、その福音にあずかる「務めがどんなものであるかを、明らかに示すためである」と、そういうわけであります。

すなわち一つは「キリストの無尽蔵の富を異邦人に述べ伝える」ということ。そして「奥義にあずかる務めがどんなものであるかということを示すためである」と。両方とも大体同じような意味であります。すなわち「キリストの無尽蔵の富を異邦人に述べ伝え、かつ全ての人に明らかにするため」と言って大体意味は誤りません。

「キリストの無尽蔵の富を異邦人に述べ伝える」と、これがすなわちパウロの恵みを受けた目的です。「キリストの無尽蔵の富」と言ったら、「贖いの広さ、深さ」を異邦人に述べ伝えるということです。「キリストの無尽蔵の富」というのは「贖い」です。われわれの罪科を全て贖って、そしてわれわれに永遠の命を与えてくださったということですから。これがキリストの無尽蔵の富です。これが福音です。これがパウロが述べ伝えようとしたところですから。これをパウロは詳しく、ロマ書一六章を通じてもって説明した。一言で言えば、キリストの無尽蔵の富です。キリストの持ち給う無尽蔵の贖いの救いの富です。

この字が、ロマ書一〇章一二節に出てくる。「主の名を呼び求める者に豊かに恵みたまう」、「豊かに恵む」という字がこの字です。「富」という字です。そうですからこの富を受けるのは、キリストの贖いをただ信ずるだけでありますけれども、信ずるということが非常に難しく、またこれを続けることが非常に難しいので、ロマ書において詳しくパウロが説明しまして、「主の名を呼び求める者に無尽蔵の富が向かっている」と書いた。ですから無尽蔵の富を味わう、自分のものにするためには「主の名を呼ぶ」ということを、ロマ書においてパウ

口は詳説した。

ですから「この無尽蔵の富を異邦人に述べ伝え」、これが一つの目的。それから「万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義」、贖いです、「その奥義にあずかる務めがどんなものであるかを、明らかに示すためである」。パウロが人々に知らすために、すなわちこの恵みを受けた。

○一〇節「それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであつて」

これは「天上にある諸々の支配や権威」というものが主格になっておりますけれども、原語では「神の多種多様な知恵」というのが主格になっております。神の多種多様な知恵、これはすなわち贖いの知恵です、救いの知恵です。この知恵が「天上にあるもろもろの支配や権威たちに対して明らかに知らせるため」ですから、すなわち教会を通して、救われた人々を通して、神の多種多様な知恵が、天上にあるもろもろの支配や権威たちに対して明らかにする、そういうために私は恵みを受けたとパウロは言った。

ですからこれは、教会というものが、救いというものが、これは神の知恵である。神の多種多様な深い知恵であるということが、天上の支配やもろもろの権威にまで現在は明らかでない。事ほどさように、この救いの知恵というものがある深いものであるということをして言っている。これが教会を通して信者の集まり、すなわち教会を通して救いの知恵、神の知恵というものが人間を、人類を救うという神の深い知恵が、天上のもろもろの知恵に明らかになる、という。

パウロの教会を通じてという考え方が、ここに初めて出てきている。教会というもののいかに深い意味がある

かということをおパウロがここで述べていますから、これがキリスト教の学問としては非常に難しい問題になっておりまして、これが何遍も言うとおりに、よく牧師試験に出るところです。パウロの教会観と言って、これが牧師試験によく出ます。私、試験受けるときは意味は分からなかった。このごろちよつと分かるようになりました。注解者は *sublime thought* (荘嚴な思想) と言っている。すなわち教会を通して、救いの知恵が、天上の高い力にまで分かるようになるというこの思想が、実にこれは荘嚴なる思想であると注解者は申しております。

○ 一二節「わたしたちの主イエス・キリストにあつて実現された神の永遠の目的にそのものである」

これは「実現された」とも訳せますし、「なされつつある」と、「主イエス・キリストによってなされつつ、かたちづくられつつある」というふうには、「実現する」という字は両方に解される言葉であります。どちらに解しても、大した意味の違いはありません。

○ 一二節「この主キリストにあつて、わたしたちは、彼に対する信仰によって、確信をもって大胆に神に近づくことができるのである」

「この主イエス・キリストにあつて、わたしたちは、彼に対する信仰によって」というのは、これは二つ、「この主キリストにあつて」ということ。これを言い直したら「わたしたちは彼に対する信仰によって」です。ですから、これは二つとも「贖いによって」ということです。「キリストにあつて」といったら「贖い」ですから、「贖いによって、確信をもって大胆に神に近づくことができる」。

「大胆」という字は「神に近づく」というのに副詞に訳してありますが、原語は「大胆」という名詞と「神に近

づく」という二つの名詞です。そうですから「確信をもって大胆と神に近づくことができる」ということであります。

この「大胆」という名詞は、ロマ書八章三七節、三八節に大胆さが書いてある。ちよつと読んでみましょうか。ロマ書八章三七節、三八節と言ったら、皆さん、お馴染みの場所でしょう。パウロの大胆。

○ロマ書八章三七、三八節「わたしたちを愛してくださいましたことによって、わたしたちは、これらすべてのことにおいて勝ち得て余りがある。わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主イエス・キリストにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである」

○三五節「だが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か」

○三七節「しかし、わたしたちを愛してくださいましたことによって、わたしたちは、これらすべてのことにおいて勝ち得て余りがある」と言つて、大胆さが出ておりますが、この大胆です。

「大胆と、そして神に近づくこと、それが確信をもって」、なぜかというところ「キリストにあって」です。贖いをする本当とするからです。贖いを信ずるからです。贖いによって確信ができる。自分で味わう場合には、この「信ずる」という字も「彼に対する信仰」という字、これも「信仰」は取ってしまったらよろしい。「主キリストにあ

って」です。「贖いにあつて確信をもつて」です。われわれの確信は贖いからくる。自分の信仰、行ないによらない。贖いがあるゆえに、われは大胆に神に近づくことができる。

これを第三者が見ると「小西は贖いを信じて神に大胆になっている」と言う。客観的に説明したら「信ずる」という字が出てくる。自分が主観的に味わう場合には「贖いによつて」です。これが多くの信者が「信ずる」という字に引つ掛かつているゆえんです。

信仰の客体には「信ずる」という字は要らない。入れたらいけない。ややこしくなる。ルターが「信仰だけで救われる」と訳しましたから、このことが害した。あれは「贖いだけで」と言わなければいけない。自分で味わう場合には。客観的に言えば「彼は贖いを信じて救われる」と、「贖いで救われると信ずる」と。「信ずる」という字は、客観的に言う場合に必要です。主観的には必要がない。「確信をもつて」というのはそこからくる。

「大胆」という字を、ルターは「喜び」と訳した。一、三原語を訳した英語でも、これは「大胆」と訳してありますけれど、原語は「大胆」ですけど、ルターは「喜び」と訳した。ルターという人は、じきにパウロが書いたものを自分の言葉に直す。

ルターという人はよつぽどパウロの書簡を勉強した人。そうですから勉強し抜いて、口訳するというのはパウロの言葉でない言葉を言う。「信仰で救われる」とあつたら「信仰だけで」と「だけ」という字を入れてみたり、あれはルターが入れたのです。

今日のここも、ルターは「喜び」と訳しておりますから、本当に大胆になってくると喜びがくるのかもしれない。われわれは大胆がないから喜びはないんでしょうけれど、ルターみたいに大胆さができてきたら喜びになるのかもしれない。そうですからルターはこれを「喜び」と訳しました。

○一三節「だから、あなたがたのためにわたしが受けている患難を見て、落胆しないでもらいたい。わたしの患難は、あなたがたの光栄なのである」

「落胆しないでいてもらいたい」というこの訳も、原語は、「わたくしが落胆しないようにありたい」と、「わたくしが落胆しない」というふうにも読める。両方読める。どっちでも読めます。

どっちでも読める場合には、パウロは他の場所においてどう言っているかということを見たらよろしい。聖書の本文を訳する場合には、他の聖書の本文を見たらよろしい。この場合も「落胆しないでいてもらいたい」と訳するほうが、パウロの他の場所で、そういうことを言っているのです。私が患難を受けているのはあなたたちのためだ、私の困難には君たち落胆するな、ということとは他に言っています。ここも両方に訳せますけれど、ここは「患難を見て落胆しないでいてもらいたい」と訳する。聖書の訳は、他の場所の聖書の本文をもってすればよろしい。

以上、大体の訳であります。言いたいことが胸に満ちておりまして、どうも言い表せませんで、本当にまずい講解に終わりましたことをお許し願いたい。

以上のところで私感じたことを、一つ二つ申し上げたい。

第一、「キリストの無尽蔵の富」ということ。これがキリスト教の全部です。キリスト教の無尽蔵の富、キリスト教がわれわれ人類にもたらし給うた無尽蔵の救いの富、これが福音の内容でありますし、これを述べ伝えるのが福音を述べ伝えることでありますし、これを信ずる者をキリスト信者という。キリスト行者とは言わない。キリスト信者という。良い行ないをする人がキリスト信者であるなら、キリスト行者と言ったらよろしい。キリ

スト信者というのは、この無尽蔵の富を信ずる、それを本当だと受ける者を、これをキリスト信者という。

そして信仰は、無尽蔵の富は永遠の命ですが、そんなものはわれわれは欲しくない。不幸にして、われわれはキリスト教の救いを欲しくない。これが難しいところです。そうでしょう。われわれは健康が欲しい、金が欲しい、人に褒められる、自由をしたい、そういう欲求はありますけど、永遠の命が欲しいという欲しさはない。無尽蔵の富も、食欲のないものには山海の珍味も意味がない。われら普通の凡人には、永遠の命は欲しくない。無尽蔵の富は有っても無いようなものです。欲しくない。

それを味わうように、ロマ書一〇章一二節に「主の名を呼び求むる者に対して、無尽蔵の富は向かっている」と書いてある。われわれ、信仰もない、信仰することもできないような落第生には、この「主の名を呼ぶ」ということが、これがもう命の綱です。

第二に感じますことは、パウロの謙遜。すなわち、最も小さいものよりもまだ小さい、英語で *nothing* と言いますが、*nothing* に対して *less than nothing*、何も無いものよりもまた少ない、パウロはそういう謙遜さを、自分には本当に何も無い者であるということをもっておられた。

どうもキリスト教の信仰というものは、深くなればなるほど自分が低くなるし、低くなればなるほどキリストの深い無尽蔵の富が分かるようになっているのでしようが、パウロのこの謙遜さというものは、われわれ年と共に少しでも学びたいと思います。

それから第三に、今日の「確信」という字です。「確信をもって神に近づく」。これはさつき申しました、贖いからくる。われわれが神に近づくということは、天国に行くと言ってもよろしい。確かに天国へ行くのだという確信は、イエス・キリストの贖いからくる。他からはこない。これはイエス・キリストの無尽蔵の富です。その

富を自分に吸い取るのは、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことです。

私が最近感じますことは、自分一人が分かたらよろしい。人にまで分かつ必要はない。自分一人が分かたらよろしい。自分というものも人類の一部分です。自分が分かるといふことは、また他の人も分かるといふ可能性がある、他の人が分かることです。自分一人が分かたら、人のこと心配することはいらぬ。

私は自分一人というものがいかに尊いものであるかということが、このごろ少し分かつてきた。人にまで説教する必要はない。自分も人類の一部分です。伝教大師は「一隅を照らすもの、これ国宝」と言った。本当に自分がイエス・キリストに照らされて、福音を分からせてもらうといふことは、これ国宝になることです。内村鑑三は「一人の信者ができたら日本の国は変わる」と言った。

一〇年前にここを講義しましたときに、小沢辰男兄弟が司会してくれまして、そのときに『続一日一生』の三月三十一日の内村先生の感想文を読みましたから、今日もこれをもって終わりたいと思います。

「来世によつてこの世のすべての苦痛が慰められる。すべての不幸艱難しかり、死そのものまでが完全に慰められる。この世限りと思うがゆえに、人生に不平が多く、堪えがたきもだえがあるのである。されども確実なる来世の希望の前に不平不満は消えて跡なしである。人は能率増進の必要を説くが、来世の希望ほど能率を増すものはない。口に讚美歌が絶えずして、仕事は常にはかどるのである。人の過失はたやすく許すことができるようになるのである。身の不幸は希望の輝きの前に消散する。もし全ての人に堅き来世の希望があるならば、社会問題は直ちに消え、平和は世界にみなぎるのである」

平和は世界に「みなぎるのである」で、「みなぎるのであろう」といふ未来ではない。(Present Indicative) 現在。平和は世界にみなぎるのである、と書いてある。これは内村鑑三の感想。私は全く同感です。

第一三講 エペソ教会への祈りと神への讚美 第三章一四節―二二節

(昭和五二(一九七七)年五月二二日)

本日は、司会者に読んでいただきましたエペソ書三章の一四節から二二節までの大意を学びたいと思います。エペソ書三章までは、前半の信仰の勧めを説いた場所であり、第四章より今度は行ないのほうに入るわけです。信仰の教えの最後の場所としましてパウロは、エペソ教会の人々に対する祈りと神への讚美をもって終わっているのです。信仰の教えを祈りをもって終わる、神の讚美をもって終わっているということは、これはキリスト教の信仰の内容というものがいかに難しいものであるかということが分かる。

われわれはどうかと教会へまいるまして学んでおりますけれども、信仰というものは神の知恵でありまして、聖霊がわれわれに臨んで初めて分かることであります。これはいかに難しいことであるかということはパウロがここに、信仰の教えを終わる場合に祈りをもって終わり、神への讚美をもって終わることによって分かる。われわれはどうかと聞いておりますけれども、キリスト教の信仰というものは人間の知恵を超えている。

ですからわれわれは、本当に謙遜なる心をもってこれを聴く必要がある。こうべを垂れて聴く必要がある。頭を上げて聴くべき問題ではない。信仰の問題は頭を下げて、神の前にひれ伏して聴くべき問題です。

○三章一四節「こういうわけで、わたしはひざをかがめて、天上にあり地上にあつて『父』と呼ばれているあらゆるものの源なる父に祈る」

当時、祈りの姿勢は立って祈った。ところがパウロがこの厳かなる信仰の内容を勧める終わりにあたりまして、

「ひざをかがめて、天上にあり地上にあつて『父』なるものと呼ばれているあらゆるものの神」、この創造されたものには命のあるものと命のないものとありますが、そのうち命のあるもの、命を持つている創造物のすべての源である父なる神に対して、パウロは祈ると言った。パウロの教えの最後は祈りです。エペソの人に対して、すなわち父なる神に祈った。いつもは立つて祈るのですが、パウロは「ひざをかがめて祈る」と言った。

これはカルヴェインが申しましたごとく、パウロは手紙を書くときには人に書かせておりますから、パウロは口で言っている。筆記者が書いている。そのときにパウロは、この祈りになったときにはひざをかがめて祈った。

一四節から一九節までは日本語では多くの文章になっておりますけど、原語では一 sentence、一つの文章です。ですから一つの文章はごたごたしている。日本語になりますと非常に分かりにくい。どうぞ外国語でこれをよく読んでいただきたい。そうするとこれがはっきりします。日本語ではややこしいですけども、ご辛抱願います。祈りの内容は二つある。その祈りの第一番目の内容。

○ 一六節「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くしてくださいるように」

これが祈りの第一です。一は一番大切です。

「栄光」というのは、父が持つておられる知恵、力、愛、そういうものを皆、全部ひつくるめたものを「栄光」という。全ての、父の持つていらっしやるその「富」、「富」というのは人に与えるのに適当な言葉です。父の持つたもう無限の富にしたがつて、「御霊により、聖霊により、力をもってあなたの方の内なる人を強くしてくださいる」。これがキリスト教の全部です。「内なる人を強く」、一言で言えば「聖霊の力を給う」ということです。「信

者に聖霊の力を与えてください」と、パウロは祈った。これが第一。

われわれは何十年教会に来ていても、ちつとも聖霊の力、内なる人が強くなっていない。われわれは未信者とちつとも変わっていない。

第二。

○一七節「信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み給うように」

これがパウロの祈りです。われわれの心に、信仰によってキリストが住み給うように。これは皆、賜物です。信仰というものは賜物です。キリストがわれわれの心に住み給うように。

どういうふうに住み給うかと言うと「あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより」、「生活することにより」と書いてありますが、原語にはこういう言葉はありません。これは「愛に根ざし、愛に基せられ」と、「根ざす」という動詞も、「基とする」も、動詞です。動詞が二つある。これは現在完了受け身ですから、「愛に根ざされ愛に基されて、キリストがあなたの心に住み給うように」と原語はなっています。「生活することにより」、これは取ったほうがよろしい。原語にこんな字は無い。「愛に根ざされ愛に基されて、キリストがあなたの心のうちに住み給うように」と、これが祈りの第二の内容。

そして第一、第二の祈りの目的は、二つのことができるということが目的です。よろしいか。

○一八節「すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができること、これが第一。

○一九節「人知をはるかに超えたキリストの愛を知ること。この二つをできるために、パウロの先の第一と

第二の祈りがあった。

「その広さ、長さ、高さ、深さを理解する」というのは、何の高さ、深さか書いてない、この文章に出てない。ですから学者は、何かということについて議論が多くございまして、大体三つの説がありますけれども、大同小異。

私はその三つのうちの「キリストの愛」を取ります。キリストの愛を取りますと、「人知をはるかに超えたキリストの愛」と同じことになる。第一も第二も同じことになりますから、要するに「人知をはるかに超えたキリストのわれわれに對する愛を知るために」です。キリストの無限の愛を知るために、パウロは第一と第二の祈りをした。

皆さんは、人知をはるかに超えるキリストの愛を知っていますか。人知を超えるキリストの愛とは何を言いますか。これがキリストの福音です。

そしてその結果、最後は「神に満ちているものすべてをもって、あなたがたが満たされるように」。最後の結果が、神の満ち給うもの、すなわち初めの神の栄光です。神の知恵、神の力、神の愛、そういうものがあなたがたに満ち満ちるようになるということです。結局は、われわれに神の栄光が満ちるように、われわれに神の御旨がわれわれに入ってくるように。これが最後の目的です。

われわれはキリスト教を学んだら、だんだんこうなつてこなければならぬ。神の知恵、神の力、神の愛がわれわれに満ち満ちてくるようになる。これが最後のパウロの目的。これが伝道の目的です。

そしてパウロは、二〇節、二一節に神を讚美した。

〇二〇、二一節「どうか、わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めまた思うことのいっさい

を、はるかに超えてかなえてくださる神様、キリスト、父なる神に、教会により、またイエス・キリストによつて、栄光が世々限りなくあるように」

これはイエス・キリストにより、また教会によつて、教会を通じまたイエス・キリストを通じて、神の栄光と言つたら神の力、神の恵み、神の知恵、これが栄光です。その神の持ち給うものが、世々限りなく全ての人、generationにあるようにと。そうですからキリストの福音というものは、イエス・キリストを通じ、教会を通じて、教会というのには信者です、「イエス・キリストを通じ、信者を通じて、神の恵み、神の力、神の全てのものが世々、永久に住める人間の上にあらんことを」という祈りです。讚美です。神はそうすることができます。神は永遠に人類を恵むことができます。He is able to do it.

以上が大体の訳であります。これが、パウロ先生の福音の内容の教えの部分。第四章から行ないの部分に入りますが、すなわちエペソ書の信仰の部分は最後です。最後はエペソの人々、信者に対するお祈りと神に対する讚美をもつて終わっている。

ここは真にパウロの福音の性質、伝道の性質といえますか、真にこれは厳かなる場所であります。英語では「荘厳な」というのは sublime という字があるようですが、英語の注解者の申すように、パウロは sublime close をもつてこの文を終わつたと注解者は言っております。ですからこれは、誠に荘厳な場所であります。人の言葉を絶している。人間の言葉では言えない。

牧師の試験にエペソ書から問題がよく出るのでありますが、このごろここが非常に大事であるということをおも少しく分かるようになりましたが、八〇の年になって少しくその深さが分からせていただくようであります。

終わりにあたりまして、内村先生の有名な『ロマ書の研究』の序文をちよつと読んで終わりたいと思います。

内村先生の『ロマ書の研究』、私はこの本は日本に残る、後世に残る書物と思います。

先生の『ロマ書の研究』の序文、Dedication（献呈の辞）には、

「余と同時にキリストを信じ、一生涯を通じて信仰を共にしてきたれる同好、同級、同窓の友なる北海道大
学教授ドクトル宮部金吾君に、旧友の変わらざる愛をもってこの書を献ず。著者」

とDedicationがあまりまして、次に「『ロマ書の研究』に附する序」。

「余に一生の志望があつた。それは日本全国に向かつてキリストの十字架の福音を説かんことであつた。

この志望は、余が明治の十一年、札幌において初めてキリストを信ぜしときに起こつたものである。爾来星
霜四十年、その実現の機会を待つも到らず、時にあるいは志望は夢として消ゆるのではあるまいかと思つた。

されども機会はついに到来した。神は余のために所を備えたもうた。それは東京市の中央、内務省正門前、
近くに宮城を千代田の丘に仰ぐところ、大日本私立衛生会の講堂であつた。余は此所に、大正八年五月より
同十二年六月まで、満四年にわたり、日曜日ごとに聖書を講ずるの自由を許された。建物はドイツ式の宏壯
なるもの、設備完全にして、震災以前の東京市において、他に得る能わざるものであつた。聴衆はすべて
の階級を網羅し、キリスト教各派の信者、教会以外の信者、またみずから信者と称せざる者、また仏教の僧
侶さえをもそのうちに見た。実に日本にキリスト教が伝えられて以来、いまだかつて見たことのない聴衆で
あつたと思う。その熱心に至つては、彼らの内に、あるいは宇都宮より、あるいは名古屋より、毎回列席せ
る者ありしに徴してもわかる。余自身にとりては、余の生涯の最高潮に達した時であつて、五十九歳より六
十三歳に至るまでの間、この楽しき事業に従事するを得て、感謝この上なしである。

余は大手町において、ダニエル書、ヨブ記、ロマ書、ならびに共観福音書の一部を講じた。その内余が最

も深く興味を感じしものはロマ書であつた。使徒パウロによって口述せられしこの書はキリスト教の真髓を伝ふる書である。この書を解せずして、キリスト教を解することはできない。また余の四十七年間の信仰の生涯において、余が最も注意して研究したりと思うはこの書である。余はロマ書を講じて、実は余自身の信仰を語つたのである。ゆえに六十回にわたりしこの講義は、余にとりては快樂の連続であつた。これを百回または二百回となすも、余は倦怠を覚えなかつたであらう。神の恩恵の福音の講述である。キリストに現われたる天父の愛の宣伝である。これにまさる愉樂たのしみの、他にありようはずはない。余は第六十回の最後の講義をなし終つたときに、惜別の涙を禁じ得なかつた。

著者なる余自身が、この書の不完全をもつとも痛切に感ずる者である。余は編纂者と共に最善をつくしたつもりであるが、その結果たる、理想に遠く及ばざるを遺憾とする。『われらこの宝を瓦器うつわに持てり』（コリント後書四・七）とあるがごとく、パウロの遺せし本文は宝玉であるが、我らがこれに与えし註釋は土の器にすぎない。ただし器は無きにまさるべし。あえてこれを世に提供するゆえんである。

余はここに、過去六年の間余の講筵の席につらなり、直接に間接にこの聖業に参加せられし多数の聴講者諸君に心よりの敬愛を表す。また藤井武君、黒崎幸吉君、時田大一君、畔上賢造君ら、余と講壇を共にせられし諸君に感謝す。またその音楽的天才をもつて会衆一同を讚美の歌に導かれし故吉澤重夫君の好意を記念す。ことにまた聴講者の一人なる古我貞周君が、本書出版の費用を負担せられしを感謝す。人生は短し、真理は長し、われら、この短き生涯において幾分なりとも神の福音の真理のために努力して、その永久性の分与にあずかりしことを感ぜざるを得ない。願わくは榮光限りなく聖靈により、イエス・キリストの御父なる真まことの神に帰せんことを。

大正一三年（一九二四年）七月五日

内村鑑三

と、先生のロマ書の序文がありますが、この最後の部分に「余はここに、過去六年の間余の講筵の席につらなり、直接に間接にこの聖業に参加せられし多数の聴講者諸君に、心よりの敬愛を表す。また藤井武君、黒崎幸吉君、時田大一君、畔上賢造君等、余と講壇を共にせられし諸君に感謝す」とあります。

ここに鈴木秀夫君がご出席になっておりますが、この先生の最後の感謝の初めに、鈴木君や私ら、誠に取るに足らない、ふらふらしているいくら聴いても分からない人間、そういう聴講者をつかまえて、私等は聴講していた、その聴講者をつかまえて「余はここに、過去六年のあいだ余の講筵の席につらなり、直接に間接にこの聖業に参加せられし多数の聴講者諸君に、心よりの敬愛を表す」と。鈴木君や私ら、ふらふらしておりましたけど、そのわれわれに対して内村先生は「敬愛を表す」。「敬愛」と言ったら一番大きな言葉でしょう。

あとの「藤井武君、黒崎幸吉君、時田大一君、畔上賢造君等、余と講壇を共にせられし」者に対して「諸君に感謝す」です。軽いですよ。自分の一の弟子と言われる藤井武、黒崎幸吉、畔上賢造という弟子には、君らは私と講壇を共にした、ちょっと感謝してやろう。しかし鈴木君やわれわれみたいにふらふら聴いていた、そういう人間に対して「敬愛を表す」。われわれは内村鑑三に敬愛を表されてきた。

それで信仰が分かった。パウロがエペソ教会のために、信者のために祈ったその祈りが受け入れられて現在に及んでいる。日本においては内村鑑三を出した。われわれは伝道者の敬愛の心によって信仰を与えられている。

第一四講 信仰生活の基礎 (一) 第四章一節―一一節

(昭和五二年(一九七七)年六月二日)

本日は、司会者に読んでいただきましたエペソ書四章、第一節から一六節まで、これが一つの区画になっておりますが、これは分量が多ございますので、一節から一一節まで、今日読んでいただきました前半の大意を学びたいと思います。

パウロは三章までに、キリスト教の教義、福音の内容につきましてこんこんと述べました。初めの三章は誠に金玉の文句でありまして、われら生まれつきの知恵と知識をもつてしては誠に平平坦坦といたしておりましたけれども、われわれに真理の御霊くだりたもうて、この意味を少しく理解することができましたならば、いかにこれが深い、いかにこれがわれわれに慰めの大きい、いかにわれわれに力を与える教義であるかということを知りわけであります。

不幸にして私らは罪深く、何十年まいりましても誠に馬耳東風のごとく、その意味を理解することはできませんけれども、われはまた時きたって聖霊われわれにくだりたもうて、このキリスト教の福音の内容がいかに深く、尊く、広く、無限の神の愛をわれわれに給うものであるかということを知りたもうて、一日も早く来るよう、われわれは念願したいと思います。

第四章から第六章、最後まで説かれるキリスト教信仰生活、キリスト教倫理、これはひとえに、三章までに学びましたことの理解から表れてくる実であります。そうでありますから、四章以下のキリスト教倫理というものは、三章までに学んだことを学ばずして、知らずしては、出てこない。全然人間道徳等の性質の異なる徳が表れ

てきているわけでありませう。

われわれは何十年たつてもちつともわれわれの人生が変わつてこない、未信者とちつとも変らないゆえんは、三章までに説かれてある福音が理解されていないからです。このことはいくら強調しても強調しすぎることはない。信仰の裏です。

それでは、一節から簡単な注釈を加えたいと思います。

○一節「さて、主にある囚人であるわたしは、あなたがたに勧める。あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩き、」

「歩き、」と点が打ってありますが、これは「歩きなさい」と言った方が意味がはっきりいたします。原語は長い文章になっておりまして、日本語ではぼつぼつ切りますものだから、その切り方によつて原語の意味が消えてしまう。「歩き、何々、謙虚で」となりますと、「歩き」というのが非常に弱くなつてくる。「歩きなさい」と大きく命令形の強い力を出さなければいけない。

初めの「さて」というのは、前の文語訳では「されば」となつておりましたが、この文章が「さて」となつております。これは誤訳といふべきでありまして、前のように「されば」と言わなければいけない。文語で「されば」というのが悪ければ、「そうであるから」と訳さなければいけない。よく語学もできる立派な先生たちが「さて」とお訳になりましたが、これは非常な誤訳である。非常な誤訳であるという意味は、道徳というものは、キリスト教信仰生活というのは、キリスト教倫理です。その信仰生活というのは、信仰が基礎になつてゐる。信仰の裏です。信仰の裏ですから「信仰のゆえに」です。「そうだから」と訳さなければいけない。

ロマ書第一二章一節でも、「このゆえに」とパウロは訳した。英語では“Therefore”と書いてある。私が英語

聖書と一緒に読んでくれというのは、この意味です。

こういう訳し方をしますと、この誤訳はキリスト教倫理をご存じない先生の訳と言われても仕方がない。この翻訳者はキリスト教道德の性質を理解していない。

「そうでありますので、主にある囚人であるわたくしは、あなたがたに勧める。あなたがたが召された召しにふさわしく歩きなさい」。あなたたちは善行をなすために召されているのだ、その善行に召されたるその召しにふさわしいように歩きなさい、という命令であります。

○二節「できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互いに忍びあい」

二節の初めに「愛」という字が出てこない。初めに「できる限り謙虚で」という字が出てくる。キリスト教倫理の、信仰生活の第一の徳目は、謙虚 *humble* です。愛ではない。人を愛することでない。クリスチャンの第一の道德は、自分が謙虚になることです。

謙虚に二義あり、第一の意義は、自分が罪深い悪人であるということを知ることです。自分は善人でない、悪人である。自分は間違いが多い者である、自分は正しくないということを知ることです。自分が親切の心が無い者だということが分かったら、お前は不親切だと人の不親切を責めることはできない。平和になる。自分は正しいことはないんだということが分かってくれば、お前が間違っていると、お前が悪いんだということは言わなくなる。われわれは人ばかりを責めておつて自分を責めない、クリスチャンにおいて。そのゆえに平和がない。社会に平和がなく、家庭に平和がなく、友人間に平和がないというのはこれです。自分が悪人であるということが分かっていない。

パウロはロマ書を書きまして、初めの三章を使って、われわれは罪びとである、滅ぶべき者である、正しくない者である、神の前に正しくないということを三章かかって述べた。われわれは罪人であり、不正なものであり、善行ができないと、その自分の本当の姿を知ることが、これがキリスト教道徳、クリスチャンの初めです。これがキリスト教の第一定理です。ロマ書において詳しく学びました。

謙虚の第二の意義は、自分は三の力があるのに三以下の力、二、一の力に人から扱われても我慢する。これが謙虚の第二の姿です。自分は一〇万円謝礼取る力があっても、五万円くれてもそれで満足している、これが謙虚の姿です。謙虚ということが分かってきたら、社会問題は消える。

そして「柔和であれ」、「寛容を示せ」、そして「愛をもって互いに忍べ」。「愛」という字はほとんど最後に出てきている。

○三節「平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい」

神から給う聖霊による一致を守り続けるように努めなさい。「平和のきずなに結ばれて」と、三節に書いてありますが、「聖霊の一致」ということになってきますと、四節から一一節まで、これはまた信仰の問題に帰ってきました。行ないというのは信仰の裏ですから、行ないが難しくなってきたら、また信仰へ帰ってくる。

四節から一一節までは、また信仰の内容です。

○四節「からだは一つ」、教会のからだは一つ、「聖霊一つ、あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのである」

「あなたがたが召された」というのは、すなわち復活の望みを目指して召されたと同様、一つである。わたし

たちの召された、善行をなすために召されたのは望みです、復活の望み。その復活の望み一つに、われわれは召されている。

キリスト教で「望み」と申しましたら「復活の望み」をいう。「永遠の命の望み」をいう。キリスト教では、それ以外は望みと言わない。キリスト教で望みといえば、われわれは肉体が減んでそして天国へ帰り、キリスト再臨のときに復活してキリスト復活と同じ体を頂くこと、これを「望み」という。いくら繰り返しても、これがあるがゆえにわれわれが日々生きることが出来る。他のものは消えます。これだけが不滅のものです。

この不滅のものを頂くこと、これを福音という。永遠不滅の命、復活の望みを頂戴することを「救われた」という。これのないものは救われていない。この望みのない者は、この世の俗人です。クリスチャンをすることを辞めたまえ。

○五節「主は一つ、信仰は一つ」、キリスト、主を信ずる信仰ですから一つ。主を信ずる信仰というのは贖いの信仰です。どこをどう信ずるかといったら、贖いを信ずる。そうですから信仰は一つです。「バプテスマは一つ」、一つの信仰を言い表すんだから、バプテスマは一つ。

○六節「すべてのものの上にある、すべてのものを貫き、すべてのものの中にいます、すべてのものの父なる神は一つである」

「われわれ信者も未信者も、すべてのものを貫き、その上にありますすべてのものの中にいます、それは父なる神である」という。われわれの内には、目に見えないけれど、われわれは罪をもってして見ることはできない

けれども、内なる神はすべての中にいます。

この「すべてのもの」というのは、原語では「すべてのもの」となっておりますが、ルターは「すべての人」と訳した。「すべての信者」と訳した。「われわれ」と訳した。そうですからルターの訳によりますと、これは「すべて信者の上にあります、すべての信者を貫き、すべての信者の内にいます、すべての信者の父なる神は一つである」と、ルターは信者に限定しました。

○七節「しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりは、恵みが与えられている」

この一節は今日のレッスンでは一つの山でありまして、「われわれは主一つ、信仰一つ、バプテスマは一つであるけれども、賜物は違う」という。「われわれが持っている賜物は、量も質も皆違う」という。

これは誠に注目すべきことでありまして、われわれパウロは他のところで、人間の体には目があり耳があり手足があるように、われわれの働きは皆違うと言っています。目の人もあるし、足の人もあるし、手の人もある。一つの教会を形成しているということは一つであるけれども、われわれみんな違うということでもあります。

○八節「そこで、こう言われている、『彼は高いところ上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた』」

この文章は詩篇から引かれている文章であります。この詩篇ではイエスの復活昇天を予言した。これは、イエスが高い所へ上った、復活昇天したときに、「とりこを捕えて引き行き」というのは、多くの人々をとりこ

して救って引き行った。人々を捕えて引き行った。そしてその人々に異なる賜物を分け与えたという意味でありまして、「とりこを捕えて引き行き」というのは、「人々」、「信者」に解釈されております。

クリソストムという大学者は、「とりこを捕えて引き行き」というのは人類の罪、人類の死、悪魔、この三つをとりことして捕えて復活したと解しておりますけども、どちらに解しても同じ意味であります。すなわち、贖いを成就して、われわれに永遠の命を与えて、人々を救って、そして人々に賜物を分け与えたという意味であります。

○九節「『上った』と言う以上は、また地下の低い所にも降りてこられたわけではないか」「上った」と言う以上は、地下の低い所にも下ってこられたわけである。

○一〇節「降りてこられた者自身は」、すなわち、地下の低い所に降りてこられたというキリストは、「あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上のままで上られたかたである」

すなわちイエス・キリストは復活されて天に上りましたが、また地上へ帰って、また下って、低い所まで下って、すべての人に満ちるために下って来ておられる。現在、聖霊としてわれわれに降り給うて、そしてわれわれすべてに満ち満ちるためにイエスは復活したわけであります。

イエスはヨハネ伝においても「わたしはまた汝らに来て、そして父と共に汝らの内に住む」と言われましたが、すなわち聖霊として彼はこの世に下って、われわれの内に住み給うわけであります。

そして彼は、みんなに満ち満ちる方法として、

○ 一章「ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった」

イエス・キリストがみんなに聖霊として満ち満ちるための一つの方法として、ある人々に特別な賜物を分けてある。

この意味において、われわれの賜物が違う。キリストの賜物はみんな各自が違うということは、これは各自、全人類にまで、すべての人にまで賜物が、イエス・キリストが満ち満ちるための一つの神の手段とみてよろしい。以上、これが大意であります。

今日のレッスンにおいては、大体三つの重大な点があります。

第一は、キリスト教倫理というものは信仰の裏である。もっと簡単に言えば、復活の望みからキリスト教倫理は出てくる。復活の望みの裏です。復活の望みなくして、キリスト教道徳はない。それは自然に人間としてもって生まれ出る小さな道徳です。キリスト教道徳というものは、復活という、われわれは復活させてもらうんだと、これが確立したときについてくるものです。そのことが一つ。

第二は、謙虚。その信仰から出てくる第一道徳は謙虚、謙遜ということです。謙遜に二義あり、もう繰り返さない。

それから第三、三つ目の今日の重点は、すなわち神が、われわれに信仰を給うて復活の望みを与えられて、そして各自、賜物は違うという。各自の仕事が違う。賜物が違う。それは全人類が救われるために、われわれの賜物は違う。人々は仕事が違う。自分と同じ仕事を人に要求したらいけない。人々は皆、仕事が違う。

そういうことを今日は学びました。

最後に、内村先生の『続一日一生』の四月二八日の文章、これは一〇年前にも読みました。非常に今日のレッスンに適切でありますから、読んでみます。

「まことに神は公平でいましたもう。彼は天才を少数に賜いて、多数を顧みたまわないのではない。かえって、より善きものを多数凡人に賜いて、彼らを祝福したもうのである。凡人たるの幸福、また特権は大である。神が何びとにも賜いし意志の力をもって、何びともなし得る事をなすのである。神の造りたまひし宇宙において、平凡は決して平凡でない。凡人もまた神に似て造られし者である。そして神を現わす点において、凡人は天才以上である。われら何びとも、持続せる忍耐と勤勉とをもって、「偉大なる凡人」たるべく努むべきである」

第一五講 信仰生活の基礎 (二)

第四章 一節 一六節

(昭和五二(一九七七)年六月二六日)

今日の司会者のお祈りのうちに、パウロが書きました書簡は小さな教会に宛てた手紙であろうと司会者が申しましたが、最も大きな手紙であるロマ書が送られたロマ教会は、当時は二〇人余りでありまして、私の教会も大体二〇人ぐらい集まるのが普通でございますが、これは全く当時のロマ教会と同じような教会の人数であります。そこに書きましたパウロの手紙が二〇〇〇年に渡りまして人類を導いている、教えているという不思議なる事実があります。

内村先生が当時のロマ教会のことを『聖書之研究』誌上にお書きになりました、名をおあげになって、老人もいたであろうその小さな集まりが、地上のこの小さな集まりが、実に天の様子を地に映した、天上の生活の前味わいをしたこの教会のことを思うと言つて、先生がロマ教会についてお書きになりました。

私もその先生の記事をよく思い出しまして、この教会が徐々でございますけれどもロマ教会に近づかせていただいているのではないかという感じがいたします。そういうのは、内容が非常に靈的になってまいりまして、牧師をはじめ信徒の証言が非常に聖書的なものが多くなってまいりまして、真に天上の生活の前味わいをすることができるといふ状態が展開しつつあるように私は思ひまして、誠に感謝に耐えません。

特に内村先生がおっしゃっていた老人の贖いでありまして、うちの教会におきましては年の最長の鈴木秀夫兄弟夫妻がほとんど毎日曜日ご出席いただきました、この教会の靈的気分、靈的空氣を濃厚にしてくれています。また石館夫人もほとんど毎日曜日ご出席いただきますし、また北川姉妹、その他、この小さな集まりに毎日出て

いただいて、その信仰的雰囲気濃厚にさせていただいているということは、牧師にとりましてはこれに過ぎたる喜び、感謝はない。

私もいよいよ八〇歳の年を迎えるに至りまして、少しく伝道者としての特権、伝道者の喜びを少しく味わいつある。誠に感謝、感激に耐えないところであります。

しかるに語るころ誠に貧しく、金玉のパウロの文句に対しまして変わらぬ注解を加えまして、誠にパウロ先生の文字をけがしているような講義でございますけれども、聖霊豊かに臨み給うて、われわれが少しずつ霊的意義を理解する者となることができるよう、ひとえに聖霊の御導きを願うわけであります。

本日は「信仰生活の基礎」と題します第二回目でございます、司会者にはエペソ書四章一節から一六節まで読んでいただきました。本日はその後半。前回は一一節まで講義いたしました。一一節というのが非常に大切な文でありますので一一節を繰り返しまして、一一節から一六節までの大意を学びたいと思います。

四章の一節から二四節までは、ちょうど三章までに信仰の問題を論じまして、今度は行ないの問題に入りますときに、信と行との間に挟まっている場所でありまして、一節から二四節までは非常に大切な場所であります。信と行とのつなぎ目でありまして、信を述べ、行を述べている場所でありまして、非常にこれは私は大切な場所と思うのであります。

親鸞聖人の名著『教行信証』も、行の巻から信の巻へ移る間に、あの有名な正信偈という不滅の名文があるのでありまして、つなぎ目に入る部分というものは両方の、信の分も行の分も、それをひっくり返して大意を述べている場所でありますから、非常に重要な場所となるのであります。

前には一節から一一節まで述べましたが、本日は一一節から一六節まで、各節につきまして簡単な注解を加え

たいと思います。

一一節から一六節までは、口語訳聖書では四つの文章からなっておりますけれども、原文は一文であります、一 sentence であります。ですから原文は非常に長い文章です。こういう長い文章は、大抵重大なことが多いです。例えばロマ書の序文、あれは九六文字、一 sentence です。パウロは大事なところはだらだらだらと言いますものですから、非常に重大な場所が多くあります。

本日のこの場所も、一一節から一六節まで一 sentence でありまして、どこで切つていいか分からない。ですから、どうしてもこういう重大なる場所になると、日本語の訳は不十分です。どうしてもこれはヨーロッパの系統の言葉でないという意味が分からない。日本語は切るところでないと切つていきますから、ばさばさになっていて、どこにひつつくのか日本語では不明瞭です。ギリシャ語がもつとも完全ですけれども、ギリシャ語でなくとも英語でもドイツ語でも、あるいはフランス語でも十分に文章の続き方がよく分かります。

いつも言うとおり、必ずヨーロッパ系の外国語を一つ補つて聖書を読んでいただくということを私はいつもお勧めしておりますが、本日のような場所になりますと、なおさらその観が深い。日本語で読むと分からないです、ごたごたしているから、どこに重点があるのか、どこに掛っているのか、この切り方がどうも不十分と私は思うのであります。

○ 四章一一節「そして彼」、これはキリストです、「彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった」

この間申し上げたように、「お立てになった」というのは「われわれ人類にお与えになった」。「お立てになっ

た」というのは英語では evangelize です。意味は、人類にくださったとことです。これが非常に大切な文句であります。伝道者というのは賜物です。神からくださった。

伝道者すなわち福音を述べ伝える人、これが現代、非常に少ない。福音以外のことを述べ伝える伝道者は多いですけども、福音それ自身を伝える伝道者は非常に少ないことを私は感じます。これがキリスト教団がごたごたやっている理由です。伝道者がいない。福音というのはどういうものであるかということが理解されていない。

このごろの牧師は、ただ人にちょっと親切にしたらいいぐらいがキリスト教と思っていると、私は想像する。

使徒、預言者、伝道者、牧師、教師、これは皆、福音に関与する者です。福音を述べ、福音を教え、福音を人に勧める。そういう福音中心の教師が現代非常に少なくなっているのは、誠に残念なことでありま。

この一一節が非常に大切な場所であります。

神が伝道者をくださったということの目的は、

○ 一二節「それは、聖徒たちをととのえて」、日本語では「ととのえて」と訳してありますが、詳しく言えば「聖徒をととのえるため」です。こうするとはつきりします。伝道者をくださったのは聖徒をととのえるためです。聖徒をととのえるという言語の意味は「完成する」という意味がある。そうですから「聖徒を完成するため」です。信者を完成するために、神様が伝道者をくださった。伝道者がいなくなったら信徒は完成しない。

そして、聖徒を完成するためには二つの目的がある。第一の目的は「聖徒に奉仕のわざをさせるため」、第二は「キリストのからだを建てさせ」、というの「教会を完成するため」です。これが一二節です。

一二節は一一節の理由でありまして、すなわち伝道者をくださったのは聖徒たちを完成するためであると。完成するのは二つの目的があると。奉仕のわざをさせるということと、第二はキリストのからだは教会ですから、

教会を建てるためであると。

教会を完成する、この「キリストのからだを建てる」という字がまた最後の二六節に出てきます。

この二つの目的をルターは一つに訳した、「キリストの体を完成するために奉仕の技をさせ」、そういうふうには、二つのことをルター訳では一つの目的にした。

ルターという人は、たびたび言うとおり、パウロの原文の意味を変えて訳する。大胆な信者です。私は、ルターという人は本当にロマ書を読みこなしただけに、確信をもってそのようにパウロの文字と違うふうに訳することができたのだらうと思う。

今まで述べた一一節、一二節により、一三節で三つの結果が起こってくる。一三節は三つの結果が書いてある。

○一三節「すべての信者が、神の子を信じる信仰の一致」、というのが第一。第二が「神の子を知る知識の一致」、第三が「全き人となり、キリストの満ちみちた徳の高きにまで至る」、こういう三つの結果が起こってくるということがあります。

その三つの結果が起こってくるとその結果、二つのことが達成されてくる。

消極的に言い表した第一、

○一四節「わたしたちはもはや子供ではなくなつて、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによつて起こる様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなくなつてくる」消極的結果。

第二が積極的結果、一五節。

○一五節「愛にあつて真理を語り、あらゆる点において成長して、かしらなるキリストに達するに至るようになる」

一六節はそれをひつくるめて、全体をもう一遍言った。

○一六節「また、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わせられ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだを成長させ、愛のうちに育てられていくのである」

「キリストを基として」という原語は、「キリストから次のことが流れて出てくる」と書いてある。キリストを基として、キリストから次のことが流れて出てくる。「全身は」、これが一六節の主語。この部分が中心です。どうぞ聖書の文句を見てください。黙って聴いていただけでは分からない。聖書の文句を見たまえ。

「全身はすべての節々の助けにより」、「節々」という原語は「タイ」という字です。英語の joint という字です。ですから原語は「助けになるすべてのタイによって」ということになります。「すべての節々の助けにより」という原語は「助けになるすべてのタイによって、しっかりと組み合わされ結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働くことによつて」、原語は「よつて」という字がある。「それぞれの部分は分に応じて働くことによつて」、これが非常に大切な部分です。「それぞれの部分は分に応じて働くことによつて、からだを成長させ」、からだの成長をさせるのだ、「そして、愛のうちに育てられていくのである」というのは、原語は「キリストのからだを完成していくのである」。

最後の部分が「キリストのからだを完成する」という訳が抜けておりますけれども、これがさっきの一二節の後半の「キリストのからだを建てさせる」と同じ文句が、ここに繰り返して出てきている。

以上、大意であります。簡単、明瞭でありますけれども、日本語に移しますと非常にややこしい。これは英語をもつて、あるいはドイツ語をもつてお読みいただいたなら、はつきりします。

以上、略解を終わります。

この一節から一六節までの中心の問題は、「聖霊による一致」ということになります。黒崎幸吉先輩はこの部分をお訳しになって、一節から一六節までの部分を「信仰の一致」という見出しで、ここをご解釈になりました。そうですからここは「聖霊の一致」。聖霊によるわれわれの一致をもつと分かりやすく言ったら、われわれは復活の望みで一致している、ということですよ。復活の望みでみんな一致する、ということですよ。それがこの問題の中心ですよ。

これはエペソ書を中心であるのみならず、コリント前書の中心でもあります。コリント前書は一章から四章までごたごたやっている、そのごたごたの一致のことを論じた。そしてコリント前書の最後に、復活の望みをもつてコリント前書を閉じた。

ことごとく、「一致」ということは「聖霊の一致」「信仰の一致」、「主一つ、信仰一つ、バプテストも一つ」、その一致を簡単に分かるように言ったら、「復活の望みで一致している」ということです。

日本キリスト教団でごたごたやっているのは、復活の望みで一致していないからです。もちろん新教にも長所あり短所あり、旧教にも短所あり長所あり、聖公会にも短所あり長所がありますけれども、むしろ私は、聖公会、旧教をとる。間違ってもあんまり間違わない。ちゃんとガチツとしたことが残っているから。書いていること、特にお祈りとかいったガチツとしたものが、本当の聖書の神髄が文字になって表れているから。

聖公会の葬式というのは、なるほどという、天国をほうふつとする葬式です。しかるに新教の葬式といたら、

牧師が何を言っているか分からない。勝手なことをしゃべっている。牧師が天国の話ができない。葬式というときにでも天国の話ができない。残念なことです。福音が分かっているからです。

私はある尊敬する新教の先輩のお葬式に出たら、もう情けない。立派な信仰をもっておられる先輩の葬式に、牧師が何を言っているか。聖書の話が出てこない。自分の話している。モーク先生に言わせたら「このごろの牧師さんは聖書の話せずして、自分の話してますな」と言っておられる。

聖書の勉強をこのごろの牧師は、われわれは、やっていない。もう少し牧師は聖書の勉強をする必要があります。教会を建ててみたり、幼稚園をやってみたりしているから、聖書の勉強ができない。

ここは幸いに、石館兄弟が全ての物質的負担を負ってくれて、私に存分勉強させてくれて、ここで説教させてくれている。私は教会を建てる必要がない。幼稚園をやる必要ありません。そんなことから収入を得る必要はない。私はむしろ旧教や聖公会が間違っても、あまり間違わない。方角が西向いている。信仰が天国を向いている。しかるに新教の現在の信仰というのは、天国に向かずに地上を向いている。そんなものはキリスト教ではないですよ。一つの道徳です。そんなものは、道徳教です。

本日のところは、「信仰の一致」すなわち「復活の望み」を中心に置いている。それが私感じます第一。

第二に感じますことは、今日のところ「子を信ずる信仰の一致」と、もう一つは「彼を知る知識の一致」と書いてある。理性的に彼を知る知識ということが書いてある。その一致です。宗教は感情のことではない。知識のことです。われわれはもう少し聖書を勉強して、キリストについて知る必要がある。Know、Knowledgeの必要がある。もう少しキリストについて知る必要がある。キリストに関する知識の必要がある。それは聖書の勉強ということになる。

第三に感じますことは、伝道者の重要性です。伝道者というものがいかに重要か。エペソ書の初めには「キリスト教の土台である」とパウロは言った。このごろは土台がない。土台がぐらぐらしている。伝道者がいない。いないということは言い過ぎでありますけど、少ない。

それから第三に感じますことは、これはごたごた書いてありますけれども、キリストの説明です。キリスト教というものは、キリスト行者とは言わない。キリスト信者という。キリストを信じて、キリストのものを頂戴することです。信も行もキリストから流れて出てくる。もつと具体的に言えば、キリストの贖いからわれわれに流れて出てくる。

今日のところ「キリスト」という字は九回出てくる。一 sentence に九回「キリスト」という字が出てくる。キリスト教の初めはキリストであり、キリスト教の中程はキリストであり、最後はキリストです。われわれは心を低くして、謙遜になって、キリストの前に頭を下げて、キリストから学ぶ。これをキリスト信者という。キリスト行者とは言わない。

第一六講 信仰生活の基礎 (三)

および この彼岸中の一大発見

第四章一七節―二四節

ロマ書三章二二節、一〇章一二節

(昭和五二年(一九七七)年九月二五日)

本日は、司会者に読んでいただきましたエペソ書の四章一七節から二四節までの大意をお話することになっておりますが、それに入ります前に、このお彼岸中に示されました、おおげさに「一大発見」と書いておきましたが、その一つの示されました真理を申し上げたいと思います。

二週間前の第二の聖日に、私は「夏休み中に示された三大発見」と大げさな題で申し上げました。「大発見」という字は大げさな題でございますけれども、私にとりましては八〇年の生涯において新しく発見したことなのです。私にとりまして大きなことであつた。そうでありますので「大発見」というような題を付けました。今日の一つの気がつきましたことも、私にとりましては八〇年の生涯で新しいこと、かつまた私の信仰にとりましては大きな出来事ですから、「大発見」という字を用いさせてもらったこと、前回のとおりであります。

「発見」とか「大」とか申ししましたが、私はキリスト教の学問につきましては非常に無学でありますので、二〇〇〇年の歴史において、学者たちがすでにこういうことをはつきり文章になつて申しておられるということがあるかもしれません。そういう場合には、私の無学、無知のためでありますので、お許しを願いたいと思います。端的に申しますと、「イエスを信ずる」また「イエスの救いを信じる」あるいは「イエスを神の子と信じる」あるいは「神の義を信じる」あるいは「神は愛なりと信じる」と、このように「信じる」という言葉はたくさん

聖書に出てきますが、これはみな内容は同じことです。これは「神の義」を信ずると同じでありまして、「イエス・キリストの贖いを信ずる」ということです。言葉はいろいろになっておりますけれども、聖書に、ヨハネ伝あるいはロマ書、いろいろ字は変わっておりますけれども、内容は同じことです。「イエスの贖いを信ずる」ということです。これをはっきり知っておく必要がある。イエスを信ずると言っても、どこをどういうふうに信じているかということによって結果が違います。

そうですから聖書に「イエスを信ずる」あるいは「イエスを神の子と信ずる」あるいは「イエスの救いを信ずる」あるいは「神は愛なりと信ずる」と言ったら、その内容は、神がイエスをこの世につかわして、そしてわれわれの罪とがを贖って、われわれに永遠の命を与えてくださったというその贖いを信ずることを言う。これをはっきり知っておく必要がある。何十年教会へ来ていても分からない人がいる。

それから今日の「発見」というものは、贖いを信ずることとイエスの名を呼ぶこと、「わが主イエスよ」と名を呼ぶことが、同じであるということが分かった。イエスを救い主と信ずるということと「わが主イエスよ」と称えることが同じであるということが分かった。贖いを信ずるということと「わが主イエスよ」と称えるということが同じであるということが分かったということ、これがこの彼岸中の大発見です。

その理由、根拠を三つ挙げます。

第一の根拠は、『よろこび』の四月号に、英文で書きました。ここにすでにそのことが表れている。よく読んでください。ロマ書一〇章の一一節から一三節についての私の講解が書いてありますが、これはキリスト教信仰というものは聖書の文句による。聖書の文句に明らかな根拠がなければ、それはキリスト教信仰とは言わない。キリスト教信仰というものは聖書に、明文のはっきりした根拠が必要です。

○ ロマ書一〇章一一節「聖書は、『すべて彼を信ずる者は、失望に終わることがない』と言っている」(一二節)
「ユダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである」

この一一節、一二節を読んでください。これは、聖書は「すべて彼を信ずる者は失望に終わることがない」と書いてある。

彼を信ずる者と言ったらどうする者かということを一二節は説明している。一二節は、一一節の「彼を信ずる」ということはどういうことであるかという説明とみてよろしい。一二節の「恵んで下さるからである」と「から」という字が書いてありますが、原語では一二節の初めに「その訳は」という字、英語でいうHowという字があります。ですから失望に終わることはない、彼を信ずる者というのはどうすることかということを説明しているわけです。一一節、一二節をよく読めば、この文章から、彼を呼び求めるということ(称名)が彼を信ずるということと同じ意味であるということがはっきり分かる。

これが、私が贖いの信仰とイエス・キリストの名を呼ぶということが同じであるという根拠の一つ。これは、『よろこび』四月号に私の英文をもつて書いておきました。よく読んでください。

第二の理由、これもロマ書の本文から。

○ ロマ書三章二二節「イエス・キリストを信ずる信仰による神の義は、すべて信ずる者に与えられる」

神の義というのは贖いです、贖いというものが信ずる者に与えられる。「与えられる」という原語は、動詞はありません。これは「信ずる者のほうに」という前置詞です。英語のfor、「そのほうに」という字です。「神の

義というものは信ずるすべての人に向かって「いる」という字です。そうですから二二節は「すべて信ずる人に向かって「いる」となる。

それから一〇章一二節の方は、彼を呼び求めるすべての人を「恵んで下さる」という動詞になっておりますけど、これも原語は「向かっている」という字です。三章二二節と全く同じ前置詞。これもすなわち「イエス・キリストの恵みが」、恵みというのは贖いです、神の義と一緒に、「贖いが、彼を呼び求める方に向かっている」。

「そのほうに向かっている」という原語の前置詞は、「向かっている」という意味と「向かって中へずうつと入っていく」という意味がある。原語の前置詞は、「そのほうに向かっている」というのは「その中へずうつと入っていく」という字なのです。

そうですから三章二二節の「神の義は、贖いは、すべて信ずる人に向かって、そのほうへずうつと入っていく」。そうですからこの訳は「与えられる」と訳している。一〇章一二節は「豊かに恵んで下さる」と書いてある。神の恵みが、イエスの贖いが、彼を呼び求める人にずうつと向かってその中へ入っていくという。三章二二節と一〇章一二節は、全く同じ言葉です。パウロは「信ずる」ということと「彼の名を呼ぶ」ということは全く同じ意味に解している。

この彼岸に、これが分かった。

第三の同じだという理由は、信ずるということは心の状態でしょう。贖いを信ずるとか、自分は罪びとであると信ずるとか、あるいは神の子とせられたと信ずるとか、復活を望むということとは心の状態です。この心の状態、信ずるということ、すなわちロマ書八章までに書かれたことは、心の状態です。

この心の状態は、われわれはいかに悩み、心の乱れているときには、信仰とわれわれの心の乱れとは共存しな

い。よろしいか。われわれの心乱れているときは、信仰の余地はない。われわれは、信仰だけに頼っていて危ない。いっとうなっているか分からない。

ところが称名、名を呼ぶということ、これは心の乱れと共存しうる。恵心僧都は「妄念のうちより称名せよ」と言った。私はこの意味において、同じであるというよりも、称名のほうが信仰より優れていると信ずる。なぜかと言うと、乱れた心と共存しうる。信仰、望みは、乱れた心と共存し得ない。

以上三つが、私の称名と信仰とが同じであるという根拠です。

それでは今日のレッスンに入ります。第一六講。

ここは信者の信仰生活の基、第三回目になります。すなわち四章に入りまして、パウロは三章までにキリスト教の信仰について語り、四章からいよいよ行ないに入るところであります。

行ないに入る前にパウロはここで、信仰を大観し、行ないを大観した。信仰から行ないへ入る場所は大変大切な場所であります。そうでありますので、四章一節から二四節まで三回にわたって講義したわけです。本日は第三回目です。

○四章一七節「そこで、わたしは主にあつておごそかに勧める。あなたがたは今後、異邦人がむなしき心で歩いているように歩いてはならない」

「そこで」とあるのは、第一節で「さて」と書いてあるところで論じましたが、これは「それゆえに」と訳さなければいけない。四章の初めの「さて」というのは誤訳であります。「されば」と訳さなければいけない。い

つも言うとおりに、三章までに救いのことを書いて、救いを受けた、永遠の命を頂いた、「それだから」なのです。いつも言う言葉であります。われわれはちゃんと永遠の命を頂いた、復活するようにしていただいた、それだから、です。「さて」「そこで」ではない。一七節の「そこで」は「さて」よりもよろしい。

「されば」です。「あなたたちは永遠の命を頂いた。キリストにより無限の富を頂いた。されば、主にあつておごそかに勧める。あなたがたは今後、異邦人がむなししい心で歩いているように歩いてはならない」。異邦人のように、未信者のときのような歩き方をするなど。「されば」です。

われわれ永遠の命を頂かずして、天国へ生まれること、それから復活させていただくということが分からなかつたら、キリスト教倫理はない。そんなものはキリスト教道徳ではない。それは親が子を愛する愛です。そんなものはキリスト教では愛と言わない。「されば」です。永遠の命を頂いた、復活するようになった、天国へ行くことになつてるとだと、「されば」異邦人のようなむなししい心で歩くな。

○一八節「彼らの知力は暗くなり、その内なる無知と心の硬化とにより、神のいのちから遠く離れている」

原因は、一八節は、無知と心が頑なという。これが、われわれの状態です、未信者の状態です。無知です。知らない。無知というのは知恵の問題でしょう。このごろの人間は人生哲学がない。無知です。自分の心が分かっていない。これは心の硬化が原因です。心が頑ななのです。自分の考えを振り回している。大抵そうですよ、われわれは賢いと思つているけど、自分の考えを振り回している。無知です。神を知らず、天国を知らない。

信仰は感情ではないですよ、知恵です。天国はある、われわれが死んだら天国へ行き復活するという intellect です。一つの知識です。信仰は、ありがたいと思う感情ではないです。感情みたいなものはいつも動いている。

そんなものは頼りにならない。

それは心が頑なだからです。ここで、この字が一番大事です。自分の心が頑ななことは、残念ながら自分には見えない。あたかも自分の顔は見えないが如しです。自分の顔は分からない。その効果によって、無知の状態が続いている。それだから永遠の命から遠く離れている。

○一九節「それが原因となって、ほしのままにあらゆる不潔な行ないをして、放縱に身をゆだねている」

皆、自分のほしのままの生活をしている。これが未信者ならびに信者と称するわれわれ、大体これです。元は何かというところ、その行ないはどこから出てくるかというところ、無知から出てきている。人生哲学を持っていない。無知です。何も知らない。われわれは、それで自分で偉いと思っている。

○二〇節「しかしあなたがたは、そのようにキリストに学んだのではなかった」

○二二節「あなたがたはたしかに彼に聞き、彼にあつて教えられて、イエスにある真理をそのまま学んだはずである」

それから二二節から二三節、二四節、この三節がすなわちパウロの勧め、これが今日の山です。一七節、一八節、一九節で学びました心の乱れというものは、行ないの乱れ。われわれ未信者あるいは信者と称している者の大部分、われわれは未信者と同じです。そういうわれわれが勝手な生活をしているというのが根本になっている。何も知らない、無知です。頑固です、頑なです。こういうことは、われわれ非常に反省したいと思います。

○二三節「あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、」

○二三節「心の深みまで新たにされて、」

○二四節「真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである」

「着るべきである」と訳しておりますが、ルターは「着よ」と、三つとも命令に訳しました。これは命令に訳してもよろしい。「着るべきである」と訳しても、原語はどちらにでも訳せる言葉であります。

要するに三つの、「古き人を脱ぎ捨てる」、それから最後の「新しい人を着る」、真ん中の「心の深みまで新たにされる」、これが今日を中心問題であります。

この三つの動詞は、日本語では真ん中の「深みまで新たにされて」と「新たにされる」という字だけが受け身に訳してありますが、原語では「古き人を脱ぎ捨てよ」「新しき人を着よ」と、これも受身、反自力半他力という字です。原語の動詞の態は中態ですから、受け身の意味を持っている。これは三つとも「神の力によって」「聖霊の働きによって」という意味がある。

ですから「聖霊の働きによって古き人を脱ぎ捨て、聖霊の働きによって新たにされる」。「新たにされる」というのは全然自分の力は認めていない。全て聖霊の力を頼りに、全て神の力によって新たにされると、二三節は非常に強調されております。

二四節、「新しき人を着よ、着せられよ」。新しき人を着て、古い人を脱ぐというのは、洗礼の儀式を受けるときです。われわれはイエス・キリストの贖いを信じ、神の子とされ永遠の命を頂いた、復活の望みを頂いた、これがすなわち「古き人を脱ぎ捨て、新しい人を着た」というそれです。イエス・キリストの贖いを信じたときに起こる現象です。これが、われわれ信者の姿。

すなわちイエス・キリストの贖いを信じたときに、われわれ罪の身はこれで死に、そして永遠天国へ帰り、復活するべき命を頂いた、新しい衣を着た、新しい人を着た。ですから信仰と同時にこれが起こっている。ですからこの動詞の形は、一回きり起こる動詞の形です。

ですからイエス・キリストの贖いを信じたときに、イエス・キリストはわれわれの罪のために十字架についてわれわれの罪を贖ってくださって、われわれに永遠の命を与えてくださった。これを信じたときにわれわれは、この古きからだは生きていられるけれども、それで十字架につけられたことになるし、そしてそのときに復活の新しい人を着たことになる。

二三節の「心の深みまで新たにされて」は、聖霊によって新たにされる、毎日神の子たる信仰、復活の望みによって新たにされる。この新たにされる具体的方法は、主の名を呼ぶことです。私は彼岸中に、主の名を呼ぶということは信ずると同じことを示されましたが、これはまさしく今日の「心の深みにまで新たにされて」ということの注解になる。

「新たにされる」というのは受け身の動詞です。自分が聖書を研究して、努力奮闘して、お祈りして新たにされるのではない。この文句のかたちからして、「聖霊によって日々新たにされよ」。二三節は、自分の力というのを認めていない。ひとえにキリストの贖いの力、神の子たる信仰、復活の望みによって新たにされよ。パウロは「われは日々永遠の冠を目当てに走っているのだ」。その姿です。どうぞ、この二三節は受け身であるということをお忘れ給うな。

ここを一〇年前、講義したときに、今は亡き村田スミ姉妹が出席してそこへ座っておられた。この日は第三日曜でした。月が変わって五月、四二年五月二一日、ここを講義した。大体、今と同じような講義をした。ただ一

○年前には、「主の名を呼べ」ということはなかったのですけれど。私はロマ書の第二回目の講義のときに、主の名を呼ぶということが救いの条件になっているということが分かったのですが、もし一〇年前に、内村先生と同じく七〇の年で召されていたら、私はロマ書を五〇年学びましたけれども、主の名を呼ぶということが救いの条件となっているというロマ書のこの重大なることを知らずに死んでいる。

諸君もどうぞ体を大事にして、長生きしてください。「聖霊は徐々にくだる。力は年と共に増す」と内村鑑三は言われた。そうですから、われわれみたいな者はだんだん長い時をかけて真理を学ぶ。

私は、今日のこの称名ことは、ロマ書一〇章一二節こそは、ロマ書の画竜点睛だと思う。もしこの一〇章一二節がなかったら、八章までにパウロはあんなに贖いのこと、万人の罪と贖いの信仰、復活の望みと、こんなと八章までに説きましたけれども、もしも一〇章一二節がなかったならば、いかなる麗しい信仰、望みも、われわれの妄念のために、われわれの心の乱れのために消されてしまっている。しかるに一〇章一二節があるために、贖いの信仰が生きてくる。実にロマ書一〇章一二節こそは、ロマ書の画竜点睛ともいえるべき場所です。

一〇年前には私はあんなには分からなかった。一〇年前にこのことを言って、村田姉妹に聞いてもらいたかった。村田姉妹は僕から称名ことは聞いていなかった。聞かずに死んだ。しかし、そのときは第三日曜だったが、高野まさ姉妹が司会をしてくれまして、始めは高野姉妹の司会、最後は村田姉妹の祈禱をもって終わっている。ですから今日は亡き村田姉妹の祈禱を聴いて、私の説教を終わりたいと思います。

【祈り】（村田スミ姉妹）

在天の尊き父なる御神様、今日この初夏の聖日に、皆様とともに礼拝をとものにすることができましたことを誠

に感謝でございます。

すぐる年、なきに等しいこの身を、罪をお許しくださしまして、十字架の贖いによって永遠に救われます、この福音を頂くことができましたご恩寵を、ただただ感謝する身でございます。

そして今日ここに初めて、皆さまと共にこのつたない感謝のお祈りを捧げることができました。この勇氣をお与えくださいましたことを誠に深く感謝いたします。

今日、先生によって語られましたあなたのお言葉、信仰と行ないについて、誠に心にしみわたり、言葉に表すことのできない感銘を深くいたしました。今後もこの世で信仰と行ないが実行できますように、あなたの御霊の働きを切に願うものでございます。

今日、ここに礼拝をともしることのできませんでした方々とともに、あなたの御祝福がありますように。そして、あなたによって与えられましたこの世の宝の一部をお捧げいたしました。どうぞ清めて御用にお用くださいますようお願いいたします。

誠に言葉の足りませんつたない祈りでございますが、皆様のお祈りの端に加えまして、尊いイエス様の御名をとおし、御前に捧げいたします。アーメン。

第一七講 悪を避け、人を許せ 第四章二五節―三二節

(昭和五二(一九七七)年一〇月九日)

本日は、司会者に読んでいただきましたエペソ書四章二五節から三二節までの大意を申し上げます。

エペソ書は六章から成り立っておりますけれども、他の書簡と同じく、初めの三章はキリスト教の教義について述べておりまして、後の三章は道徳、行ないの問題になっております。初めの三章の教義というものが非常に大切でありまして、その三章の教義から道徳は自然に出てくる。紙で言えば、表が教義であれば、紙の裏が道徳というふうに、四章から六章までの道徳は、これは一章から三章までの教義から流れ出ている。裏のようなものであります。そうでありますので、道徳を学びます四章から六章までは、常に三章までの教義を繰り返し繰り返して思い出しつつ、その結果として学んでいるわけであります。

キリスト教道徳というのが、普通の道徳と全然性質を異にしているわけであります。繰り返し繰り返し申しておりますが、非常にこれは大切なことであります。われわれの日常生活・道徳は、信仰の裏付けがあつて初めて道徳というものが出てきているのであります。これがあるがゆえに、いよいよ信仰がはつきりしてくるし、信仰がいよいよはつきりしてくると道徳もしつきりしてくる。こういうふうにキリスト教道徳というものは信仰の実践と申しますか、信仰の毎日の告白であります。

われわれ教会に来ておりまして何十年と信仰の教義を学んでおりますけれども、教義が宙に浮いていて、行ないとちつとも密接していない。日々の行ないが信仰と離れ離れになっている、こういう状態にわれわれがおりますので、われわれは、何十年教会へ来ていてもちつともものにならない。前と一緒です。非常にこれは悲しむべ

きことでありまして、われわれは道徳を学ぶ部分につきましては、特に教義を思い出すということが必要であります。このことはいくら繰り返しても繰り返し過ぎないのでありまして、本当にわれわれは教会へ来ている信者であると言いながら、誠に誠に浅ましい信仰状態、日常でありまして、むしろ未信者の方々に劣っているという現状であります。これがキリスト教は魅力が無いという証拠です。自分を見たら分かる。

そういうわけでありまして、われわれは注意して、これから学ぶ道徳の部分でありますけれども、これも信仰と結び合わせて、われわれの日々の自分の行ないとして、これから学びたいと思っております。

いよいよ四章から四、五、六章と実践道徳、道徳の問題へ入ります。

四章からすぐに行かないの部位に入りますけれども、パウロは四章の一節から二四節まで、これにまた信仰を復習している。四章一節から二四節まで三回にわたって申し上げましたが、すなわち、パウロは実践道徳に入る前にここで「あなたは召されて信者となつてゐる。召されたから、その召しに應じて、すなわち生活せよ」。また、あなた方は教会と一体をなしているのだから、みんな職分が違う。そうですから自分の行ない・職分については、どんなにみすばらしい職分であっても、それを一生懸命やるんだ。そしてまた、毎日のわれわれの道徳というものは、実に復活の希望を持って日々天国に近づきつつあるんだという、これをもって生活するんだというのです。四章一節から二四節まで、またこんこんと信仰を繰り返した。いよいよ行ないへ入る前に、また信仰を繰り返している。いかにわれわれの行ないというものが信仰というものと離れることができないということ、パウロはまたここで説明した。

パウロは四章の一節から二四節までそういうふうな信仰を繰り返して、いよいよこれから行ないについて注をします。いよいよ本日、四章二五節から具体的なキリスト教倫理、道徳の問題に入るわけであります。

○二五節「こういうわけだから、あなたがたは偽りを捨てて、おのおのの隣り人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、お互いに肢体なのである」

「こういうわけだから」と、またこの字を付けている。「こういうわけだから」というのは、すなわち信仰です。今まで一章から三章までに述べた、また四章の一節から二四節までにこんこんと述べた、「そういうわけだから」です。そういうわけだから、われわれは神の子とせられて、永遠の命を頂いて、日々復活に天国に近づきつつある、そういう恵まれた状態にあるのだから、「そうだから」、あなたがたは偽りを捨てて、おのおのの隣り人に対して真実を語りなさい。

すなわち、隣り人に対して真実を語れ。言葉のことに初めて出てくる。われわれから言ったら、行ないが先に出そうなのですが、言葉。「真実を語れ」、うそを言うな。言葉の教訓が初めに来ている。私はこれは注目すべきことであると思います。いかにわれわれ人間の言葉ということが、われわれの人生生活に大きな関係を持っているか。キリスト教道徳に入りますエペソ書では、パウロは第一に言葉を持ってきている。うそを言うな、真実を語れということを行っています。われわれはお互いに一つのからだの部分部分のようなものである。そうですから真実を語りなさい。

われわれは知恵を働かせて、こう言ったほうが具合が良からうとか、ああしたほうが都合が良からうとかいって、真実でないことを繕ってよく工夫しますけども、それはかえって結果がよろしくない。われわれは、知恵を働かせて真実でないことを工夫することはいけない。ありのまま、真実を語れ。

○二六節「怒ることがあっても、罪を犯してはならない。憤ったままで、日が暮れるようであってはならない」

今度は、「言葉」の次には「怒り」が出てきた。怒りという感情です。

「怒ることがあっても、罪を犯してはならない」、これは原語とちよつと調子が違います。原語は「怒れ」という命令です。そして「罪を犯すな」という、原語では二つの命令になっている。パウロは「怒れ」と命じている。だから怒ることは正しい。そうですから、われわれは怒るべき時には怒らなければなりません。このごろは怒るといふようなことはなんだか自由主義に反して、横暴である、帝国主義であるという、そんなことを考えている人もあるようですが、これは「怒る」。

必要です。怖いものが無くなったら、人間は駄目です。日本赤軍の青年は恐るべきものを知らない。恐るべきものを持つていない。神が、悪いことをしたら人間を罰して地獄の火に入れると聖書に書いてありますが、そういうことを日本赤軍の青年は知らない。恐るべきものは無い。恐るべきものが無くなったら、人間は何するか分からないですよ。

神はそれぞれの行ないに応じて、これを処分して罰する。地獄の火をもって人を亡ぼすというのが、これが聖書の原理です。「怒れ」。「しかし罪を犯すな」。そうですから、怖い人を持つている人は幸いです。怖いものが無くなったら、人間はそれはもう駄目です。

怒れ。しかしながら罪を犯すな。自分の怒りの感情に支配されて罪を犯すようなことをしたらいけない。罪を犯して、憤ったままで日が暮れるようなことがあつてはならない。怒りを収めよ。

○二七節「また、悪魔に機会を与えてはいけない」

悪魔に機会を与えてはいけないというのは、これは悪魔に機会を与えて罪を犯すようなことをするなというこ

とでありまして、二七節は二六節にかけて解釈する学者もありますが、これはしかし一般に、悪魔に機会を与えて、すなわち罪を犯してはいけなさと、一般的の解釈としたほうがいいでしょう。

○二八節「盗んだ者は、今後、盗んではならない。むしろ、貧しい人々に分け与えるようになるために、自分の手で正当な働きをなささい」

「盗んだ者は」、原語は「盗んだ」となっておりません。原語は「盗んでいる人」。現在分詞ですから、「盗みを行なっている人は、今後、盗んではならない」とこういう原語になっております。マルチン・ルターがこういうふうに現在完了に訳した。「盗んでいる人は、今後盗んではならない」、これはマルチン・ルターの訳です。「盗んだ者は、今後盗んではならない」としてもいいでしょう。

「正当な勤労をせずして盗むという、この「盗む」というのは、十働く給料をもらいながら八しか働いていないというのは、やっぱりこれは盗むのほうになるのでしょう。また、十働いている人に対して、十の報酬を与えるべきなのに八しか与えないという、これはやっぱり盗むほうでしょう。盗むというのは、物質的なことでしょうか、盗んではいけないということでもあります。

「貧しい人に分け与えることができるように、自分の手で正当な働きをなささい」。自分の手で正当な働きをせよと、これは平凡な勧めのようでもありますけれども、われわれ本来に、正直な正当な働きをするというのは実に大切なことでありまして、正当な働きをしておられる人々によって人類生活が円滑にいつているわけでありまして、特に筋肉労働を卑しむ人もありますけれども、そうではない。イエス・キリストは三〇年の間、すなわち三〇年の間といったら、イエス・キリストは三三で死んだのですから、イエス・キリストの生活の九〇パーセントは

筋肉労働をやった。われわれは労働のことを、筋肉労働はいけなとか、この仕事が好きであるとか、わしはあの仕事は嫌いと、そういう自分の分に与えられた、われわれのなすべきことをかれこれ言ったらいかん。自分の正当な働きをして、そして自分の手で正当な働きをなすべきであります。

「人々に分け与えるようになるために」と、貧しい人に分け与えると書いてあります。物を与えるということとは物質的だから、物を人に与えるということは大したことではないと、分け与えるというのを感じることはありませんけれども、これは、実際貧しい人に、必要な人に物を与えるということは必要なことでありまして、クリスマスチャンとしてわれわれがなすべきことです。

内村先生がかつて、病気で困ってる人のためにお祈りしているというようなことを言ったら、「ああ、祈りはただだからな」と先生は言われた。やっぱりわれわれは分相応に、物をもって人を助ける必要がある。

○二九節「悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはいけない。必要があれば、人の徳を高めるのに役立つような言葉をもつて、聞いている者の益になるようにしなさい」

これまた言葉の、言語の教訓です。私は、行動と同じく、いかに人間の言葉というものが人生活に大きな働きをしているかということを感じざるを得ない。そうですから、われわれの一言一行は本当に慎んで、人に対し、自分の上長に対し、また同僚に対し、また目下の者に対して、われわれの言行、言葉というものは、これは非常に注意する必要があると思うのであります。

○三〇節「神の聖霊を悲しませてはいけない。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊の証印を受けたのである」

三〇節にまた信仰の裏付けが出てきた。パツとまた信仰が、裏が出てくる。行ないの人間の裏が。クリスチャンの行ないの裏が。

われわれはクリスチャンであつても、ちつとも信仰が出てこない。日曜日この午前一〇時の一時間ほど信仰の話を聞いているというだけでは駄目です。何十年やつていても、それはものにならない。そうでしょう。

私はいつも宗教というのは外国語の勉強だと思つてゐる。外国語の勉強をするのに、日曜日の朝一時間英語を勉強しても、何十年やつても英語にならないでしょう。自分では英語をしゃべつてゐるつもりかもしれないけれども、人から聞いたら英語になつてゐない。日本語ですよ、そんなものは。そうでしょう。日曜日の朝一時間だけ英語を *It is a dog.* とやつてゐる。五〇年やつてゐるからといつてゐるけれど、そんなもの西洋人が聞いたら英語になつてゐない。福沢諭吉がアメリカへ行つたときに、英語でやつたらしい。そうしたらアメリカ人は「君、日本語をやめたまえ、英語で言え」と言つた。福沢諭吉は「いや、私は英語でいつてゐるんだ」。自分では英語のつもりかもしれないけれど、そんなものはたから見たら英語になつてゐない。そうでしょう。

われわれのキリスト教というのは、これは私ですよ、私のキリスト教というものは、大体「わたくしチャン」、わたくし教です。われわれの生活は、キリスト教の聖書の精神がどこからも出てきてゐない。そうでしょう。葬式にでも、牧師は天国の話ができない。それほどまでに、われわれはこの世にへばりついてゐる。われわれは永遠の生命ということが分かつてゐない。牧師がそうです。このごろの牧師は葬式のときにでも、永遠不滅の命、天国の命、天国に入るのはどうしたらいいかという、そういう話ができない。この頃の牧師は、私を含めてです

よ。

そんなことでは、宗教というものがこの世で日々送る力にならない。頭だけで分かっている。そんなものはやめたほうがよろしい。害があつて益がない。

三〇節には「**聖霊を悲しませてはいけない**」と書いてある。神の霊。われわれは聖霊が無い。われわれは悲しまずべき聖霊を頂いていない。こんなもの、読んでも分からないですよ。「神の聖霊をあなたがたは悲しませてはいけない。あなたがたは、贖いの日のために聖霊の証印を受けたのである」と三〇節を聞いても、われわれは何か分からない。私はキリスト教を五〇年やっているのですよ。三〇節を読んでも、こんなもの、よそ事みたいですよ。私でもそうです。いわんや、他の人々はこんなもの聞いても、聖書にそんなこと書いてありましたな、ぐらいに思う。

キリスト教というのは聖霊教ですよ。聖霊をわれわれは受けて、われわれは神の子とせられて、永遠の命を頂いて天国に行くというのは、これは聖霊です。聖霊の働きです。そうですから、そういう聖霊をわれわれは受け取らなければ、こんなもの読んでも意味ない。分からない。

「**あなたたちは聖霊の証印を受けた**」というのは、原語のテンスは「受けさせられた」。証印を受けさせられたという過去の一つの出来事を表わす動詞です。そうですから、あなたたちは罪を、すなわちイエス・キリストの十字架の贖いを信じて、神の子とされて、永遠の命を頂いた、その経験、その聖霊をあなたは受けている。その聖霊を悲しませてはいけないということです。

そうですからこれは、われわれは罪を許されて、神の子とされて永遠の命を頂いて、復活していただいた。そういう聖霊があなたたちにいらっしゃるが、その聖霊に反するようなこと、悲しませるようなことをするなとい

うことです。この三〇節は。また信仰が出てきた。

ルターは、「証印を受けた」という動詞を現在形に訳した。「あなたたちが現在、聖霊によって証印を受けている。受けているんだから、その受けている、その聖霊を悲しますな」と、ルターは現在形に訳した。

これは現在に訳しても、過去に訳しても、未来に訳してもいいです。私はいつも言うとおりです。聖霊を受けているんですから。過去に受けた上で神の子とせられているのですから、その聖霊が働いて今度は、キリスト来たもうて復活する、その聖霊ですから、そうですから未来において聖霊が働く。未来においてその聖霊を悲しませたらいけない。そうですから、これは過去、現在、未来、この聖霊というのは何時に訳してもいいですが、ルターは現在に訳した。あなたは聖霊を受けて、証印を受けているのだから、現在受けている聖霊を悲しますな。

聖霊を悲しますというのはどうかというと、二九節の「悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはいけない。必要があれば、人の徳を高めるのに役立つような言葉をもって、聞いている者の益になるようにしなさい」、こういうふうになんか言ってきた、ああせい、こうせいということ、それに反対のことをしたら聖霊を悲しませることになる。

今度は、聖霊を喜ばすことはどういうことかということ、三一節、三二節でしょう。

○ 三一節「すべての無慈悲、憤り、怒り、騒ぎ、そしり、また、いっさいの悪意を捨て去りなさい」

○ 三二節「互いに情深く、憐れみ深い者となり、神がキリストにあつてあなたがたを許してくださいように、あなたがたも互いに許し合いなさい」

これを実行することは、聖霊を悲しませず、聖霊を喜ばすことになるのでしよう。神を喜ばすことになるの

でしょう。

そういう意味におきまして、「無慈悲、憤り、怒り、騒ぎ、そしり、また、いつさいの悪意を捨て去りなさい」、それから「互いに情深く、憐れみ深い者となり、神がキリストにあつてあなたがたを許してくださったように、あなたがたも互いに許し合いなさい」。許し合え。許せ。

今日のレッスンの山は、この三三節。積極的勧め。「互いに情深く、憐れみ深い者となり、神がキリストにあつてあなたがたを許してくださったように、あなたがたも互いに許し合いなさい」、許せ。人を許せというところが、私は今日のレッスンの山だと思えます。「人を許せ」。

これがまた一番難しい。けしからん、あいつはけしからん。どうしても許せない。あいつは嫌いだ。嫌いだというのは、その人の罪を憎んでいる。許していませんよ。本当に許すということができてきたら、あいつは嫌いだという人が無くなるわけです。仁者敵なし。本当に許せる心があつたら、嫌いだという人がおらなくなるわけです。「あいつは嫌いだ」というのは許していない。そうでしょう。「あいつはけしからん」というのは許していない。

「悪を避け、人を許せ」という、今日の教えはそうなります。今日読みました「主の祈り」を見ますと、今日は「主の祈り」を礼拝の初めにやりましたが、「主の祈り」といつても、平凡な「日々の糧を与えたまえ」「日々の飯をくれ」と言ってみたり、「人の罪を許させたまえ」「悪より救い出したまえ」。何も悪いことをしないで人を許す。「人を許す」というこれが、「主の祈り」にあるごとく、これはイエスを喜ばせ、聖霊を喜ばすことになりますが、本当に人を許す人になりたい。

人を許すということはなかなか、これはできない。できないが、ここにその秘訣が書いてある。すなわち「神

がキリストにあつて、あなたがたを許してくださったように」。またここに信仰が出てきている。すなわち、神がキリストにあつて私たちのすべての罪を許して、そして永遠の命を与えてくださった。その神に倣つて、そのようにわれわれは人を許す。

イエス・キリストの例え話がありましたね。ある人に、金額は忘れましたが、まあ、一億円借金していた。この一億円の借金を、私は今返せませんからと言つたら、それなら許してやろうと言つて一億円の借金を許してもらつた。その許してもらつた人が、ある人に一百万金を貸していた。そうしたら「一百万円返せ」。「私、今ありませんよ」と言うと「いかん」と言つて牢屋の中に入れたというたとえがあります。一億円を許してもらつた人も一百万円の借金を許さないようなことでは何も許さないというたとえ話をイエス様がなさいましたが、ちょうどわれわれはそれです。

人をいじめているというのは、人を嫌いだとか、お前はけしからんとか言う人は、自分の一億円の借金を神様に許してもらつているけれど、人の一百万円を許すことができない。それは、われわれが自分が持っている一億円の借金を神様からイエス・キリストの十字架によつて許してもらつたということが分からないからです。無理ないですよ。分からないのだから、われわれは人の罪を許せない。こういう者を、われわれは「罪人」という。

そういう罪人が許される方法は、イエス・キリストの贖いに頼るしか、一手しかない。その贖いを信ずるといふことが、これがまたわれわれはできない。難しい。そうですから、われわれはその手は「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶほか手が無い。

われわれはこういう難しいことをパウロから何度聴いても、何十年聴いても、ただ日曜日の朝一時間ここで聴いているだけでは駄目です。落第です。私も数年前にそのことに気が付いた。五〇年、六〇年やっていても、

ちつとも変わっていない。前と一緒です。だから救いの条件に「わが主イエスよと主の名を呼べ」ということを、パウロはロマ書一〇章一二節一三節に述べておりますが、私は数年前にその意義の深さ、広さを少しく気付いた。それから私は主の名を呼ぶことをやっておりますが、どうぞ皆さんも、なるべくこれを実行するようにして頂きたい。

要するに、「わが主イエスよ」と主の名を呼びつつ、毎日目の前に置かれたるなすべきこと、自分のなしたいことではなしに、毎日自分の目の前に置かれたなすべきことを、主の名を呼びつつなして、そしてまた日曜日に来て、この信仰の告白と言うべきキリスト教道徳を聴いて、それをまた参考に分相応に、日々自分の行ないたいと思うのであります。

この間、教会のメンバーの山口周三君が、「先生にちょっと見せたい本があるので夜に訪問したい」と言ってきた。「お前、なんだ、無理にこんな夜来んでも、またいつか会える機会があるんだから、会う機会でいいじゃないか」と言ったら、「いや、急いで会いたい」と言って、この本を持ってきてくれました。

この本は、増谷文雄と言つて、仏教の宗教学者です。私より数年後に東大の宗教学科を出られた方です。日本における権威ある仏教の専門家の一人でしょう。この方が『仏教とキリスト教の比較研究』（筑摩書房）という本を出された。

この本の重大な一つのところに「キリスト教の信仰の基本構造と、浄土門の仏教の信仰のそれとの間に見いだされる驚くべき類似は、全く瞠目すべきものが存する。そのことを、私はできる限り突っ込んで書いてみたいと思つている」と、そういうことを序文のうちに書いてありまして、そして、キリスト教と浄土門の仏教との信仰の構造の類似点について、数章にわたつて論じられている。

これは、私はずっと以前から「よく似とるなあ」「これは不思議だな」と思って、浄土門の仏教の信仰とキリスト教とはよく似ているなというのはずっと思い続けていたのですが、これは私と全く意見が一致しております。そうですから、私の話をいつも聞いている周三君が、あんまりこれよく似ているですから、「先生、仏教学者がこう言っております」と私に持ってきた。

私がここで称名の信仰の話をしておりますが、これがただ私の思いつきだけではなしに、宗教の理論、キリスト教の神学といえますか、それから見て、称名の意義というものがいかに広く深いものであるかということ、日本の権威ある仏教の大学者の一人が、私とここで話している信仰の話を含め全面的に承認し賛成しておられるということは、非常に嬉しいことであると思うのであります。

『仏教とキリスト教の比較研究』、これは最近出たのでしよう。これをお読みになると、非常に面白いと思う。筑摩叢書一一三、『仏教とキリスト教の比較研究』。増谷文雄。一九〇二年、福岡県に生まれた。一九二五年に東京大学宗教学科卒業。現在、大正大学教授、日本女子大学講師と書いてあります。そして主要著書のうちに『東洋思想の形成』（富山房）とか、『仏教概論』、『仏教百話』。仏教の学者であります、特にこれを英語で書いて、『A Comparative Study of Buddhism and Christianity』（仏教伝道協会）、Buddhism と Christianity の比較研究、これは自分で英語でお書きになっているんですが、それも「非常に自分としては満足な著書である」と序文に書いてあります。私が仏教に非常に興味を持っておりましたものですから、この方の研究について非常に興味深く思っております。

いつも申し上げるとおり、日本はキリスト教と仏教とが流れ込んでいる。こういう国は、誠に世界においても日本の国のごとく両方の教えを公平に見ることができるといって、日本民族は特権を持っている。日本民族が

Advantage を持っているとは思いますが。そうですから、われわれ両方の良いところを見ることができるとこれ幸いなことでありまして、私は将来、偉大なるキリスト教の指導者というものが日本民族から出ることができるよう衷心より希望しつつ、われわれのキリスト教の信仰の勉強を神様からさせていただきたいと思えます。本日一九七七年一〇月の第二日曜は、私が伝道を始めてからちょうど本日をもって満三〇年が終了いたします。次の日曜から、すなわち第三一年目に入るわけでありまして、私としましては、今日は誠に記念すべき集会でございます。

その集会上、お忙しいところをおちこちから今日の礼拝に対しましてご出席いただきましたことに対して、私は深く感謝の意を表したいと思えます。

第一八講 己を神にささげよ 第五章一節―六節

(昭和五二(一九七七)年二月一日)

本日は聖書の平生の講義に返りまして、司会者に読んでいただきましたエペソ書の五章の一節から六節までの大意を学びたいと思います。

一〇年前、昭和四二年六月一八日第三聖日でございましたが、本日のこの一節から六節までの講義をいたしました。当日は第三聖日でありましたので、高野政子姉妹に司会をしていただきました。そして最後の祈りは北川鶴栄姉妹が祈っていただきました。昨日そのテープを聞かせていただきました。誠に感慨無量でありまして、一〇年の間、神が導きたもうて、再びまたこの場所を講義させていただきましたことを誠に光栄に存じます。

エペソ書も前半三章までは信仰のことが書いてある。後半四章から六章までは行ないのことが書いてあります。いつも信仰と行ないとなつてきております。四章の行ないに入りましたも、まだ初めは信仰のことを述べておりまして、四章の終わりから行ないに入つたわけであります。キリスト教道徳というものは、信仰を持つている人に対する、信仰から出てくる行ないの注意書きですから、信仰をまだお持ちにならない方々にはこれは意味がない。

例えばキリスト教の信仰というものは、あなたがお歩きになる時に手を振つて歩きなさいとか、あるいは大きく足をあげて歩きなさい、あるいは歩くときにあごを引いて歩きなさいと、そういうことを書いてある。そうですから歩く能力の無い人、病人、床にいる人、あるいは歩けない人、そういう人には意味がありません。そうですから、われわれが信仰を与えられずにこの場所を百回読みましても、千回読みましても、意味が分からない。

分かったといっても誤解しています。

これは信仰のある人、すなわち歩ける人に対する歩き方を書いてある。歩ける人、能力がある人というのは、初めの三章までの信仰が分かった人が歩く能力を持っている。あなたは能力を持っているから、能力をこういうふうにして發揮せよということの、これは注意書きです。

そうですから、キリスト教道徳というものはどうしても、信仰をいただいで歩く者となる必要があります。それ無くして道徳を何度言っても、例えば山上の垂訓を何度読んでいても、それは意味がない。誤解します。また、それを行なう力が無い。キリスト教道徳というものはいつも信仰、エペソ書の初めの三章までに書いてあることを繰り返し繰り返し繰り返し、自分のものにならなければいけない。そうですから、これは申し上げるとおり、キリスト教道徳というものはいつも信仰の上に、「このゆえに」という字が付いてきている。

歩けるということはどういうことかという、自分は神の子とされた、永遠の命を頂いている、死ぬ時にはキリストが迎えに来てくださる、その時の喜びは如何と、そういうふうな永遠の命を歩いている人を信者と言う。そういう人は歩く、歩行する力を持っている。そういう人に対する、これは歩き方です。手を振って歩きなさい、もつと足を上げなさい、もつとあごを引いて歩きなさい。

これは、たびたび言いますが、信仰を与えられずしてはできない。何度読んでも、また、何度話しても駄目です。何遍聴いても駄目です。行なう力が無い。歩く力が無い者に足を高く上げよと言ったら、どのようにしていいか分からないですよ。

多くのクリスチャンが魅力が無いというのは、それです。このごろのクリスチャンは、牧師はじめ、私はじめ、歩く力を持っていない。そんなのは魅力が無いですよ、歩く力が無い。そういう者が聖書を何度勉強しても、そ

んなものはもうやめといたほうがよろしい。

そういう意味におきまして、われわれは、エペソ書は三章までを本当に分かなければいけない。本当に自分はいかに罪深いけれども、神様の恵みによって神の子とせられて、永遠の命を頂いて、そして死ぬ時キリストに迎えられて復活する者であるということが、本当に心の底から分かっているなければならない。それが分からなければ、人に親切にせよと言っても、人間は親切にする力が無い。己に勝つ力が無い。

人間は病人です。人間は業病人です。自分は賢い、自分は偉いと思っけていますけれども、実際は、自分は自分に打ち勝つ力が無い。これはパウロ先生はじめ、皆そうなのです。善をなすことはできない、願わない悪はなしっている、この死の体より救わん者は誰かと言っけてパウロが言っけた。これは人類全体の姿です。それにもかかわらずわれわれは、自分は賢い、自分は偉い、自分は善行ができると思っけている。これを罪人と言っく。

それでは、一節、二節を説明いたします。

○ 五章一節「こうして、あなたがたは、神に愛されている子どもとして、神にならう者になりなさい」

○ 二節「また愛のうちを歩きなさい。キリストもあなたがたを愛してくださって、わたしたちのために、ご自身を、神へのかんばしいかおりのささげもの、また、いけにえとしてささげられたのである」

一節、二節、これが本日の全体の要であります。

「こうして」というのは、一章から三章まで述べた信仰。四章へ入っけても、ほとんど四章の終わりまで、一節から二四節までに書いた信仰のこと。こういうふうなわけで、すなわち、われは神の子とせられ、永遠の命を頂き、そして死ぬば天国に迎えられて素晴らしい境涯に入れていただく、こういうわけであるから、あなたがたは、

神に愛されている子どもとして、神にならう者になりなさい。かくのごとく、あなたは神に愛されているのだから、すなわち神の子どもとしていただいたのだから、そうですねから神にならう者となりなさい。神にならう者となれ。

神にならうというのはどうすることかというところ、二節で説明した「愛のうちを歩きなさい」。愛のうちを歩け。この「愛」と言うのは、親が子を愛するとき愛ではない。これは、神が人類を愛したもうた愛のうちを歩けということです。神が子どもを愛するというのは、神がイエスを一人子を世の中に降して、われわれの罪とがを全て贖ってくださされて、われわれを神の子としてわれわれに永遠の命を与えてくださったというのが神の愛なのです。神の愛のそのアガペーのうちを歩きなさい。

それは具体的にはどうするかというと、「キリストもあなたがたを愛して下さって、私たちのために、ご自身を神への芳しい香りの捧げもの、またいけにえとして捧げられたのである」。キリストがお歩きになったごとく、それにならって歩くと、そういうことです。イエス・キリストがこの土を歩きたもうたように、それを手本として歩きなさい。

どういうふうにしてイエス・キリストが歩かれたかといったら、イエス・キリストはわれわれの罪とがを贖い、われわれに永遠の命を与えてくださった。その贖いを成就されましたが、そのイエス・キリストの歩き方というのは、イエス・キリスト自身がお好きなような歩き方ではなかった。神がイエス・キリストに命じたもうたような歩き方をされた。すなわち言葉を替えて言えば、イエスは毎日自分のしたいことをするのではなくして、イエス・キリストは、神が自分の前に置かれたなすべきことをされた、イエスの三三歳のうちの三〇年までは大工をしておられた。これは非常に考えるべき問題ですよ。

愛といったら、なにか自分のことを放っておいて人のことをすることが愛と思つたら間違いです。愛ということとは、自分のしたいことをするのではなくして、神がせよとおっしゃることをすることです。神はわれわれに毎日毎日、ちゃんと愛の行ないをできるようにしてくれてある。神は毎日毎日われわれの目の前に、自分のしたいことではなしに、自分のなすべきことをちゃんと置いてくれている。

そうですからイエス・キリストは、彼の三三年の生涯は、終始目の前に置かれたこと、イエス・キリストのしたいことではなしに、神がせよとおっしゃるなすべきことをされた。そしてついに贖いの大偉業を完成なさった。完成なさったというよりも、神によって完成せしめられた。受け身です。

そういう意味におきまして、われわれがイエス・キリストにならう者となれということは、その愛のうちを歩け。この愛というのは、神の意志をなすことを愛という。自分のしたいことをすることが愛とは言わない。キリスト教で愛というのは、なすべきことをなすことを愛という。キリスト教では神の意志をなすことを愛という。われわれとしては神の意志をなすとはどんなことかという、目の前に置かれたなすべきことをなすという。これは可能です。こうすることが、すなわち神にならう者、すなわちイエス・キリストの愛にならう者になることなのです。キリスト教は不可能なことを強くない。可能なことです。目の前に置かれたなすべきことをなすことなのです。

人類の救い主であるイエス・キリストの生涯というものは、九〇パーセント以上は大工の仕事をもって完成された。われわれはこれを考える必要がある。人類を救うのに大きなことをする必要はない。大工をやっていたらいい。もし神の御旨であるならば。

世の中の人には自分のなすべきことを放っておいて、人のためといって自分のなすべきことをなさずして、人

助けといっているいろいろなさる社会事業家がありますけれども、私はそれは好まない。自分のなすべきことをなして、そして余裕あらば他の人の社会事業をすることを私は諸君にお勧めしたい。

これがイエス・キリストにならうということです。目の前の義務をなすことは、非常に地味です。しかし、この目の前の義務をなす、なすべきことをなすというところに、私は人類の幸福がかかっていると思う。物がたくさんあるとか、物が豊富になったとか、そういうことをもっては人類の幸福は来ない。

○三節「また、不品行といろいろな汚れや貪欲などを、聖徒にふさわしく、あなたがの間では、口にすることさえてはならない」

○四節「また、卑しい言葉と愚かな話やみだらな冗談を避けなさい。これらは、よろしくないことである。それよりは、むしろ感謝をささげなさい」

感謝をしたいと思います。われわれ本当に聖書の教えを何十年聴いておりましても、感謝の心がございませんが、これは、われわれが罪人である最もよい証拠になると思います。しかし聖霊のお助けによりまして、われらもすなわちイエス・キリストの贖いの深さ、贖いの無限の恵みに対しまして少しでも感謝をするようになりたいと思うのであります。

何と言いましても、私は三〇年贖いのお話をしておりますけれども、まだ話している私とその感謝の心がございませんものですから、これは皆さんに無理にお勧めできませんけれども、やはり感謝の心が起こってこないというのは、まだ贖いということが分かっていない。本当に感謝の心が無いということは、やはりこれは贖いということがまだ、口では言い、頭では分かっているけれども、まだ本当に神の恵みということがわれわれ分かっ

ていないという、証拠になると思うのであります。お互いにこれは、神様に聖霊を受けまして、少しでも感謝の心が起こるようにしていただきたいものであります。

○五節「あなたがたは、よく知っておかねばならない。不品行な者、汚れたことをする者、貪欲な者、すなわち偶像を礼拝する者は、キリストと神との国をつぐことができない」

われわれは神の国をつぐように思っていますけれども、貪欲な者、不品行な者、汚れたことをする者、それは天国に行けないと書いてあります。ですからわれわれ信仰を振り回しておりますけれども、御恵みによりまして貪欲の心が少しでも少なくなるよう、そういう不品行ことはしないように神様の御恵みを頂きたいものであります。

「神の国をつぐことはできない」と書いてありますから、われわれは、いくら信仰あると言っても、不品行なことをやったり、偶像を崇拜して、神よりも物、天国よりも物に力を入れていくようなことでは、それはもう落第ということになりますから、この言葉によってわれわれは、歩き方を十分注意する必要があると思うのであります。

○六節「あなたがたは、誰にも不誠実な言葉でだまされてはいけない。これらのことから、神の怒りは不従順の子らに下るのである」

「不誠実な言葉」というのは、これは信者の仲間でも、永遠の命のことを語らずに、信仰に反するような言葉にだまされてはいかん、神の怒りが下るぞと、そういう警告。すなわち、これは信者と言っているも自称信者で

ありまして、語るところこのようなことばかり語っていますから、そういう者は神の怒りが下るぞという。これは「不誠実な言葉」。

今日のところは言葉の訓戒が非常に多いですが、われわれの言行、口で言うこと、人に対して言う言葉を、われわれ慎みたいと思います。言葉のことについて非常に訓戒が多い。そういうわけで、今日のこれは信者に対するパウロ先生の警告です。こういうふうにせよと言うのです。

一〇年前に話しました時に、私は目の前の仕事をなすということについて、昭和四二年の六月一八日の説教に小僧さんの話しをしました。感銘深い話ですから、一〇年前の話をもう一遍繰り返し返します。

私にご承知の通り、二〇年間安田財閥の一つの会社でサラリーマンをさせてもらっていましたが、その財閥を始めた人、安田善次郎が、これは明治の初めでしょう。まだ安田銀行もそれほど大きな事業ではなかったんでしよう。安田銀行に一人の一〇代の小僧がいた。それが千葉県側から東京の方へポッポという蒸気船に乗って、金塊を運ぶ役を仰せつかった。その金塊を持って汽船に乗っていたのですが、その汽船が何かの都合で沈没した。その小僧さんは金塊を放っておいて逃げたら逃げられた。ところが、金塊というのは相当重たかったらしい。その小僧さんは金塊を運んで逃げたいと思って、金塊にかじりついて運んで死んでいた。安田善次郎はその小僧さん——一〇代の小僧でしょう——その誠実に対して深く感謝の意を話されまして、毎年その小僧さんのために善次郎は供養をされた。そういうことを私聞いております。

金を運ぶということは目の前の仕事でありまして、誠に地味な仕事であって、そんなものは人類の幸福に何の関係ない、逃げたらいいのだと、理屈はそうかも知れない。イエスは大工みたいなそんな仕事はやめておいたらよいのではないか、家を建てるぐらいは人類の幸福に関係ない、それよりも人を助けよと、われわれが考えたら

そう思うかもしれませんが、「目の前に置かれた、なすべきことをなす」というこれが、私はこの精神が人類の幸福に、これをどの程度各自が行なうかによって人類の幸福が決まる。この小僧さん、一〇代の子どもが金塊を運ぶというその仕事に対して命を捧げて金塊にかじりついていたということには、私も深い尊敬を表したいと思います。

それから、私の先生とその弟子、私の先生ですからその弟子は私の先輩になるわけですが、先生と弟子との信仰について、ちょっと今日は語りたい。

先生というのは私に仏教、浄土門の信仰を教えてくださいました島村清吉先生です。よその宗旨になりますけれども、私の先生でありますのでご辛抱して、他山の石として聴いていただきたい。私の先生の信仰とその弟子の信仰について、語ります。

そのお弟子さんの大学を出た丈夫な息子が急に死んだ。自分の息子が死んだものですから、息子の死んだ供養のために彼の先生、私の先生ですが、その先生を呼んで供養の集会をもった。そして先生に「死王に勝て」という題で先生に講演をしてもらった。これは、先生がなさった講演の一部です。

「恵心僧都の歌に『われだにもまづ極楽に生まれなば知るも知らぬも皆むかへてん』とあります。開けたる法の悟りの花の上に、父上をはじめとして人を待つておられるでしょう。参ったら面会することができません。私もきつとそこへ参つてお目にかかります。

その極楽というのは、決して遠くはない。近い所にあるのです。その上、老少不定、無常迅速の世の中で。ゆえに、いつ逝くかも分からんです。のみならず、弥陀の光明のうちに住んでるのであります。例えば、今日本は昼でアメリカは夜ですが、共に同じ太陽の光を受けております。彼土は幽界で見えませんけ

れども、ちょうど浄土は昼のように明るい。われわれは無明の闇に閉ざされていますから夜に当たります。けれども仏は平等にお照らしくださっているのです。

ゆえに房十郎君（これは死んだ息子です）、房十郎君もわれわれも同じ光明のうちに包まれているのです。裏面から見れば、実にこういう結構ないわれがあります。そこが仏教の、仏法のありがたいところです。

それに、世間では相当学識ある人でそれは迷信だと言われる方もありますが、信ぜられぬお方はお信じにならぬでよろしい。しかし、これには確かな証明すべき方法があります。例えば盲者に光を知らしめる方法があつて、物理学の実験の一種として磁石のようによく回転するところの機械に光線を与えます。光線が運動力に変わって動くのです。それをめくらの手に触れしめると、その運動しているのが分かります。これが光線を感じさせることになるのです。しかしその運動の源は光です。

阿弥陀如来の光明には清浄、歓喜、智慧光というのがあります、われわれの三毒の煩惱を消してください。それでその光明に触れた人の心を、私の歌に「みめぐみの光はるかにかぶりばや何につけても嬉しかりける」。この仏法の無い人の喜びは実にはかない喜びです。例えば子どもが高い縁の上で戯れているようなものです。一つ踏み外したら下へ落ちます。甚だしきはけがをします。実に危ないでしょう。それを知らずに高い縁の上できゃあきゃあと言つて戯れているのです。

ある家では、家内そろつて夕飯を食べてしまつてからの話に、どこの人も中風ちゆうふうになられたそうなのに、うちは幸い誰も中風にかからないと言つて喜んでおられたのに、その夜の一〇時ごろ、その家のおばあさんが中風にかかれた。おばあさんといつてもまだ六〇あまりです。そんな無常迅速の世の中です。

仏法のある人はどんなことがあつても「御恵みの光はるかにかぶりばや何につけても嬉しかりける」で、

弥陀の慈悲、光明は西方の浄土から被らしてください。そうすると光明によって、われわれは直接拝むことはできませんが、「何につけても嬉しかりける」、どんなことに出会って嬉しいのです。

これは実に不思議です。中風にかかって嬉しい、そんなばかなことがあるものかと言われるかもしれませんが、不思議でもなんでもないので。歓喜光に照らされて、慈悲の光に照らされますから、目には直接見えておりませんけれども心に喜びがあります。これが光明に触れているのです。何につけても嬉しいのは照らされている証拠です。

また、私と同年の人で郡山付近に住居しておられた方がありましたが、かねて脚気で悩んでおられたのです。ある朝早く奈良へ診察を受けに行かれたところが、大安寺という所まで行くと足がだるくて歩めなくなりました。それで車に乗って常持病院へ行かれた。常持院長はまだそのころご壮健であられた時です。ところが診察の始まるのが午前八時ですから、玄関で診察の時間を待っておられた際、にわか心臓麻痺がおこって死んでしまわれた。どうです。診察を受けに病院へ行つて、そして診察を受けぬ間に死なれたのです。それから戸板に乗せて下棧橋の在まで担いで帰られた。

私はこれを聞いて驚いて悔みに行く途中、嬉しい心が起こった。私と同年です。こう言いますと、人はこう思いませんか。それは同年の人がもはや死んでいるのに、自分はこうして結構なことにはどんどん歩いて悔みに行ける、と。そんな喜びは何になりますか。歩いているうちに今にも倒れるかも分からないのです。またそんな喜びはちようど、中風が起こらないと言つて話をしておつたのと同じことです。また、子どもが高い縁の上で戯れているのと同じことです。

私は『ああ、あの方は死なれたか。こうして道を歩いている時もし倒れても、私は倒れたここが浄土であ

る。ここが、すなわち極楽世界である。あのお方は後生を願うておられなかつたから、まことの死亡で、まことに六道を輪廻しておられるだろう。しかるに私は何たる幸いであるか。『私の命は永遠の命である』と、こう喜んだのです。それが仏法信者の喜びです。

御家の主人は御息が死なれたのもつて、無上の教訓であるといつて活用しておられるのです。ゆえに、ただ故人を追慕するばかりではありません」

以上、私の先生の説教の一部。

次に弟子、この息子の親です。四十数年前、私はこの弟子を訪問しまして、そしてその弟子の信仰を聞いた。私がこれから言うのは、私が書いた文章。その弟子から直接聞いて私が書いた文章です。その弟子の言葉です。「先生」というのは今の話をされた島村清吉先生。

「島村清吉先生は大学者であられました。平凡でありました。先生の念仏もまた平凡な念仏でありました。私は年老いて盲目となり、最近病魔に侵され、世間からみると逆境であります。念仏から見ると非常に順境であります。この平凡な念仏の味をしみじみ味わうことができ、感涙にむせんでおります」

以上。
内村先生がロマ書第四章をご講義なさいましたときに、「アブラハムの信仰」と題して四章全体の大意をお話しになりました。その時に先生のお話ししたお言葉。これは先生のお言葉であります。内村先生の言葉。

「福音、もし神の真理ならば、わが民族の過去において包有せし全ての良き信仰、良き思想、良き精神を満たすものでなくてはならない。すなわち、わが民族の過去において包有せし全ての良き信仰、良き思想、良き精神は、福音の裏書きたらねばならぬのである。そして、われらはそのことをしっかりと断定するのであ

る。実にわれらの祖先の抱きたる最も尊きものは、さらに純化せる姿において福音のうちに見いださるのである」

これが内村鑑三の感想であります。

そうですから、内村先生のお考えをもつてすれば、イエス・キリストの福音が真に神から来たる福音であるならば、日本の祖先の、われわれの祖先の持っていた良き信仰が福音の裏書きとなければならない。すなわち、われらイエスの福音を知る者は、祖先の持っていたその麗しき信仰を活用、発展、拡充する者でなければならず、という意味であります。

私は学生時代に内村鑑三から福音を学び、そして島村清吉から浄土真宗の仏教浄土門のことについて学んだことを、非常に光栄とするのであります。

第一九講 光の子のごとく歩め 第五章七節―一四節

(昭和五三(一九七八)年一月二二日)

本日は、司会者に読んでいただきました、エペソ書五章の七節から一四節までの大意を申し上げたいと思います。

―前は五章の一節から六節まで学んだわけですが、一節から六節までのところは、神とイエス・キリスト、父と子ということに倣って、そして見習えと。父と子のその愛と、人を許すというふうな、父と子を標準の手にして倣うようにということで一節から六節まで学びました。

今日のところは、聖霊の助けによつて聖霊の中を歩めと、聖霊の方面から説いた場所でもあります。キリスト教の神は父、子、聖霊と三つが説明されておりますけれども、前回のところは父と子の方面からの説明でございましたが、本日は聖霊の方面から説明した場所でもあります。

言葉は違っておりますけれども、大体内容は同じことであります。一つのことを、あちらの方面から、こちらの方面からというふうな、いろいろ方面を別にしておりますけれども、実質的内容というものはごく同じことを言っているようであります。どの方面から説明を聞きましても、それを突き進んで理解できますと、皆同一のことをパウロが言っているようであります。すなわち、パウロの言葉で言えば「愛の行ない」、パウロは「愛」と申しておりますが、この「愛の行ない」に帰するわけであります。

「愛の行ない」とは、どうすることかということ、パウロは言葉を尽くして説明しているわけであります。簡単にその聖書の文句について申し上げたいと思います。

○七節「だから、彼らの仲間になつてはいけない」

これは前節にかかつておられますから、七節からは、「あなたがたは、だから、彼らの仲間になつてはいけない」と、七節は、消極的に仲間になるなという、否定的な説明であります。「彼らのような」、一節から六節までに述べたような不従順の子に倣うなど、と否定的に言っている言葉であります。

七節に、そういう不従順な怒りの子は神が罰するから悪いことをするなという、否定の「するな」というほうは非常に地味であります。「せよ」という積極的のほうは、人に非常に見えますから誰でも好きですけども、「するな」というほうは地味でありますから、あまり人々は好みませんけれども、「するな」というほうは非常に大切であります。それが基礎になっていて、そして「する」ということが出てくるわけでありますから、「せよ」というよりも「するな」のほうが非常に道徳としては大切な部分になるわけであります。

○八節「あなたがたは、以前は闇であつたが、今は主にあつて光となつている。光の子らしく歩みなさい」

これが今日の山であります。今日の教訓の絶頂でありまして、中心であります。以前は救いを知らず、神を知らず、天国を知らずであつたが、それは闇であります。われわれは闇と思つていませんけれども、天国無く、神無く、自分の力で歩んでいるのは、これは闇の中を歩いているわけでありまして、君たちはそうであつたけれども、今はキリストの救いを示され、キリストの救い、すなわち贖いの恵みを示され、そしてわれわれの罪とが穢れを全てキリストに贖つてもらつて、われわれは神の子とせられて、永遠の命を頂いて、天国を目標として歩いている。これが光であります。光の中であります。

光の中を歩みなさい、光の子らしく歩めというのは、「天国を目標として生活せよ」ということであります。

われわれは天国を目当てとして、この世が終れば天国へ帰るのであるという確かにそういうことを思って、思うといつてもなかなか思いませんが、「天国を目当てとして歩く」というのが、「光の子のごとく歩け」ということであります。これが非常に難しいのでありますが、これには「主の名を呼ぶ」という一つの非常に簡単にして確実なる方法を神様はご準備くださいます。司会者が祈りましたごとくに、「わが主イエスよ」と呼んで生活せよということでもあります。「光の中を歩め」と書いてあるのは、パウロはこれは「主の名を呼んで生活せよ」と、「わが主イエスよと主の名を呼んで生活せよ」という。その意味は、天国を目当てとして生活しているということでもあります。

この光というのは贖いの恵みの光でありまして、すなわち聖霊によって、イエスの恵みが聖霊としてわれわれに下りますときに、われらは「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことができる。

そしてまた、天国を目当てとして生活するわけがありますが、

○九節「光はあらゆる善意と正義と真実の実を結ばせるものである」

聖霊の結びは、善意と正義と真実というものがわれわれの生活に実として与えられる。内村鑑三は「聖霊は徐々に下る、終生、徐々に下る」と申しましたが、信仰生活をしているうちに、われわれに徐々に下る。そうですから、力は年と共に増す。

○一〇節「主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい」

これは命令形になっておりますけれども、原文は「わきまえ知りつつ」という分詞でありますから、一〇節は

八節の「光の子のごとく歩め」ということにかかる副詞的 clause であります。すなわち「主に喜ばれるものは何であるかを考えつつ、光の中を歩め」。

主に喜ばれるものは何であるかということとは、これは具体的に言えば「毎日目の前に置かれたなすべきこと」です。自分のなしたいことではなしに、自分のなすべきこと、目の前のなすべきこと、これが神の喜びたもうこととです。

そういうふうには、われわれの日常、目の前に置かれた、なしたいことではなくして、なすべきことをなしつつ、天国を目当てとして主の名を呼びつつ生活せよ、ということとあります。

○ 一節「実を結ばないようなわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい」

実を結ばないような暗いわざ、未信者のときのわざに加わらないで、むしろそれを指摘してやりなさい。

わざを指摘してやりなさいという、「指摘せよ」というこの原語の意味は、大体二つの意味があります。一つはここに示してある「指摘する」。英語でいう expose、あるいは、光のところへ持つてくる bring to light、そういうふうな意味があります。これが第一の意味でありまして、ここに書いてある意味であります。

もう一つは、それを「責めよ」。それは悪い、改善せよ、責めよという、そういう意味があります。英語のいう reprove。そういう意味がありまして、前の文語の訳では「責めよ」と、reprove のほうを取っております。口語訳では「指摘してやりなさい」と書いてありますが、私はこの口語訳の「指摘する」という訳を取ります。指摘するということよりむしろ bring to light、「光へ持つて来なさい」、「光へさらせ」という意味があります。です

からこれは、聖霊の光、神の導き、神の恵みの光にこれを持って来いと、そういう意味に私は解したら良いと思

います。

すなわち、実を結ばないような悪いわざ、そういう悪いわざに加わらないで、実を結ばないような罪のわざ、そういう悪い行ないが自分のうちにあるならば、それを神の恵みにさらせ。イエス・キリストの贖いに持つて来い、贖いの恵みにそれを持つてくる。持つてきて、その恵みにさらす。そういうふうには私は解したいと思えます。

○一二節「彼らが、（未信者の方々が）隠れて行なっていることは、口にするだに恥ずかしいことである」

○一三節「しかし、光にさらされる時に、すべてのものは明らかにする」

ここに「さらされる」という字がきていますが、私と同じ訳のようであります。聖霊の光、恵みの光にさらされた時に、罪が明らかにする。明らかにするというのは、聖霊がわれわれにのぞむ時に、われわれの罪が鮮やかに示されるのであろうと思えます。われわれは自分の罪の深いこと、自分の穢れに満ち満ちていることを自分では分かりませんけれども、神の恵みがわれわれに加わってくるにしたがって、いよいよ自分の罪深いことがはっきりしてくるのであろうと思えます。

○一四節「明らかにされたものは、皆、光となるのである」

聖霊の恵み、贖いの恵みによって明らかにされたものは皆、汚いものも光に変わってしまうのである。罪のいや増すところ恵みもいや増せりというふうには、汚いものが幾ら多くあっても、すなわち贖いの恵みの光に照らされるとみんな光になる。

われわれ非常に失望、悪が多い。自分が罪が深い。自分の弱さ、深さ、自分の醜さを残念に思いますけれども、

それがかえって、また喜びの光の種になるわけであります。罪の多きところに恵みもいや増すとパウロが言ったのは、このへんの消息であろうかと思えます。

(一四節の続き)「だから、こう書いてある、『眠っている者よ、起きなさい。死人の中から、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照らすであろう』」

これは出所が明らかではありませんが、この文句によく似ているのは、イザヤ書六〇章の第一節です。イザヤ書六〇章の第一節はちよつとこれと違ひまして、「主の光があなたのうちに出ているから、あなたたち、立ち上がりなさい」と、こういうふうになつております。エペソ書のほうは「眠っている者よ、起きなさい。死人の中から立ち上がりなさい。そうしたら、キリストがあなたがたを照らすであろう」となつておりますが、イザヤ書のほうは「キリストの光があなたを照らしているから、立ち上がれ」と、逆になつております。

逆になつておりますが、これは事実をどちからでも言えましようから、やはり順序はイザヤ書のように「キリストの光が、聖霊が、恵みの光があなたを照らしているから、起きなさい」。起きたらそのことが分かる。照らしているということが分かる。やはり恵みのほうを先に先行しているイザヤ書のように解して良いと思ひます。以上、雑ばくな講義をいたしました。

「光の子のごとく歩め」というのは「天国を目当てとして歩け」。天国を目当てとして歩め。そして毎日、自分の、天国を目当てとして歩け、生活せよという日々の善行、良い行ないを勧めているわけであります。

なぜパウロは、こんなに善行せよ善行せよと言うのでしょうか。救いの条件ではない。救われるためには、イエス・キリストの贖いだけで十分です。われわれはイエス・キリストの恵みによつて救われて、永遠の命を頂いて、天国へ行かせてもらう。そうしたらパウロは、信仰を述べて、救われれば後にいつもパウロは「善行せよ」と、

「神の意志にかなう行ないをせよ」、「愛の行ないをせよ」、すなわち「自分のなすべきことをなせ」と、いつもうるさいほどパウロは言います。

なぜパウロは救いの条件ではないものをそんなに「せよ」と言うのでしょうか。われわれは善行をするのは嫌です。そういうわれわれに向かって、善行せよ、善行せよ、善行せよ、と言うのはなぜか。パウロにそんなに言ってくれるなとわれわれは言いたい。

しかし、パウロが必ず善行せよ善行せよというのには、近頃分かってきた。それは、仏教とキリスト教とちよつと両方かじらせていただきましたが、両宗教の理解が薄うございますけれども、その二つの宗教の底に流れる共通な原理というものは、これは「良い行ないには必ず良い報いがあり、悪い行ないには必ず悪い報いがある。それは、来世また現世において、われわれは必ずその報いを受ける」。良い行ないには良い報いがあり、悪い行ないには悪い報いがある。これは仏教では三世因果と申しておりますが、キリスト教では、神は正義であるといつて、仏教とキリスト教の底に流れる、共通した原理が流れている。

そうですから、われわれも一言一行は必ず自分に報いてくる。うかうかうか毎日暮らして、それをわれわれは知らない。そうですからわれわれは、本当に小さく見える小なる善、悪はなさない。小なる善はなすということ、これはわれわれが本当に真剣に考えるべき問題です。これがわれわれの人生の幸福、不幸を決定している。そうですから、お互い毎日の生活を、真剣に称名して、主の名を呼びつつ、なしたいことをなすのではなくして、目の前に置かれた毎日のなすべきことを真剣になす必要がある。われわれの毎日の行ないが、われわれの来世を決定する。私は、パウロがいつもいつも「善行せよ。悪いことをするな。神の意志にかなうことをせよ」というのは、こういう意味があると思う。

われわれは少しく日々の毎日の人生を真剣にやる必要がある。特にそれは難しいことではない。「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことも、そうです。毎日目の前に置かれた、なしたいことをなすのでなくして、なすべきことをしたらよい。万人に可能です。

第二〇講 知者のごとく歩め 第五章一五節―二二節

(昭和五三(一九七八)年二月二日)

司会者に読んでいただきましたエペソ書の五章一五節から二二節は、一一年前になりますが、昭和四二年七月の一六日に講義した場所であります。昨日、その講義を聴きましたが、もう一一年たちますけれども、誠に貧しい聖書の理解をもって、「めくら蛇に怖じず」と昔から言いますけれども、大胆に聖書の講義をいたしている自分の声を聞きました。昨日は誠に傲慢不遜なる自分の伝道の態度を非常に悲しく思いました。

七月一六日は第三日曜であったものですから、最後に北川鶴栄姉妹がお祈りをしていただいています。一一年の年月は流れておりますけれども、また健康を与えられて再びここを講義させていただきました。一一年前の講義を少しく御旨になつた講義にさせていただくよう、本日は祈っております。

一一年前の話のうちにも、「天国へ帰る希望」ということを私述しておりますが、これは間違っております。これは、今も全くその時の講義が正しかったと思います。今日の初めの讚美歌五四番の最後の四節に「あめなる家に帰る日まで、この日の幸を歌い続け、父・子・御霊の大御神を、いよいよ新たに称えまつらん」とあります。「御国に帰る」というのが、キリスト教のすべてと言つてよいのであります。一一年前の講義にも、「御国に帰る」ということを私は非常に強調しておりましたが、この点はまことに正しい。本日もその点を強調したいと思います。

各節に入つて、簡単な注解を加えたいと思います。

○一五節「そこで、あなたがたの歩き方によく注意して、賢くない者のようではなく、賢い者のように歩き、」

○一六節「今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代である」

一五節と一六節、これは原文では一文をなしております。これは続いている文章であります。

「賢くない者のようにでなく、賢い者のように歩け」。これは、この前に出てきた「光のうちを歩め」というのと同じであります。具体的に言えば、天国へ帰ることを目当てとして歩けということでもあります。天国に帰ることを目当てとして生活せよ。これが信者に対するパウロの勧めであります。われわれはこの世のものを目当てとして歩いている。

人の悲しみを取り人を喜ばし、人へ愛を行なうことを目当てとしている生活の仕方をしているクリスチャン、それをクリスチャンと普通申しておりますけれども、それは生活の表れを見た形ではありますが、クリスチャンの目的、日々のあり方の根本は、天国へ帰ることを目当てとして歩くことです。

私が三〇年前に普通の会社のサラリーマンから伝道者へ転向します時に、ちょうどその時に、同志会という私の学生時代の寄宿舎で寝泊まりをして、四〇日ほどお世話になっていました。いよいよサラリーマン生活が終わって伝道者へ入るという時に四〇日ほどご厄介になったその同志会を発つ時、朝早く同志会を発つたのですがその時、私は朝出ようと思ったら、同志会の玄関の先の黒板へ、正確な文句は私忘れましたが、「小西先輩の旅路、平安なるを祈る」と黒板に書いてありました。勇んで同志会を出る時にその黒板へ、私はその送別の辞に対して、蓮如上人がおっしゃられた「たとえ一文不知の尼入道なりとも、後世^{ごせ}を知るものを知者とす」と、私書いて同志会を出たことを思います。今日ここへ出席しています山口良二君がその時同志会に泊まっておりまして、「われわれが送別の辞を書いたら、小西先輩が、その横に何やら書いてあった」というようなことを覚えていますが、文句ははっきり覚えていないのですけれど、そういうことを書いた。

これは何遍も言う話でありますけれども、私は非常に感銘深い。伝道の初めに当たって、「たとえ一文不知の尼入道なりとも、後世を知るものを知者とする」と蓮如上人が仰せになりました。読んで字のごとく、一文不知の何も知らない女でも、後世、来世を知っている女は知者、*wife*だと蓮如は言った。

ここにある「知者のごとく、賢い者のごとく歩け」というのは、これは蓮如の言葉で言えば「後世、来世を当てとして歩け」という言葉です。全くこの二つの教えがピタッと一致しているように思います。

話は脱線しますが、数年前、一九七一年でしたが、私はここで第二回目のロマ書の講義をしております、ちょうど三章の二一節、あの有名な場所へ入るときでありましたので、当時村山(愿)兄弟が、彼の親族に当たる若い女性に「ちようど今説教が始まっているから、いい説教があるから聞きに来たらどうか」と村山君が言った。その若い女性が来られた。その女性が話を聴かれたら、ロマ書の三章二一節、限りなき命とか、罪を許されて義として永遠の命を頂くというあの福音の真髓の話です。その女性は「私はこの世の話だったら聴きたいけれども、この世の話でない話は聴きたくない」、私は嫌ですと、もう聴きに来ませんと言ってここへ来なくなった。

私は、その女性の考え方は正しいと思う。私がここで話しているのは、罪の贖いとか、永遠の命、天国の話をしている。その女性は、私は天国とか、この世のものでない話は嫌だ、私はこの世のことを勉強したい、そうですからそんなものは嫌ですと来なくなつた。私はその女性は正しいと思います。

この世のものを目当てにここへ何度来てられても駄目です。意味がない。私は天国の話しかしていないから。そんな者は何十年ここへ来られても駄目です、そんな者はここに来るのはやめたまえ。この世のものを目当てにしているのだつたら。

その時に村山君もよく説明できていない。自分が分かっているから。その時に「この世のものでない話、天

国の話だが、その天国が分かったら、この世にえらい力、えらい働きをするんだ」ということを、なぜ村山君は説明しないか。自分が分かっているから、よく説明できない。そうでしょう。無い袖は振れないでしょう。

この福音が本当にえらい力をもっている。この世のものでないけれども、本当にこの世においてえらい力を現わすということ自分を分かっている。その人に話ができる。あなたはそういうふうに言うけれども、この世のものでないのだけれども、この世のものでない永遠の命という福音が本当に分かったら、私がこう生活しているように、こういう力が出てくる、こんなに喜び、感謝を持った生活ができるのだということを示したら話が出る。

先生の小西も分かっているし、弟子の村山も分かっている。そうですから、もう嫌ですと言われたら、ああ、そうですかといって引き下がらなければならない。これは村山を責めているのではない。先生を責めている。私はまだ七年前には分かっている。第二回のロマ書の講義をやっている時にはまだ福音の本当の意味が分かっている。称名の意味が分かっている。そうですから、何も私の弟子を責めているわけではない。

そういうわけで、この世のものでない天国を目標として歩く時に、本当に喜び、本当の力が出る。善をなす力、人に親切をなす力が出てくる。これが宗教です。賢く歩けというが、天国を目標として歩く時に、この世の役に立つ力が出てくる。この世の一隅を照らす人になれる。伝教大師が「一隅を照らす人になれる」と言われたのは、そういうことです。

「時を生かせ。今の時代は悪い時代である」。天国へ行ったら良い時代ですけど、天国へ入るまで、この世は悪い時代です。悪の時代です。この世は、善はしにくく、悪はしやすい時代です。そうですから、天国を目標として歩け。

○一七節「だから、愚かなる者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい」

「主の御旨がなんであるかを悟りなさい」と、神の意志は何であるかと悟れというのは、これは具体的に言えば、自分の目の前に置かれた義務、自分のなしたいことをするのでなくして、なすべきことをなす。これが神の御旨です。主の御旨をなす。天国を目標として、そして現在は、ただ今は、目の前の現在のおくり方は、今日の生活の仕方は、自分のしたいことをするのでなくして自分のなすべきことをなす。これが神の御旨をなすこと。具体的に言えばそういうことです。

それから一八節から二一節まで、これが原文では一 sentence。日本文ではいろいろ文章が分かれておりますけれど、文章は一つです。

この中心は一八節です。

○一八節「酒に酔ってはいけない。それは乱行のもつである。むしろ聖霊に満たされなさい」

この一八節では、「聖霊に満たされよ」という。「聖霊に満たされよ」ということが、この文章の一八節から二一節までの問題です。この全文は、「聖霊に満たされよ」といつたらどうすることかということの説明してある、これは「聖霊に満たされよ」ということです。

聖霊というのはこの世に属するものではない。天国のもつです。神のもつです。この世のものではない。この聖霊を受ける時にわれらは、この世において生きる力、この世において善をなす力、この世において悲しみ苦しみに勝つ力が与えられる。キリスト教は聖霊です。父、子、聖霊。その聖霊に満たされよ、ということなのです。

満たされたらどういふ生活になるかということ、一九節。一九節には、聖霊に満たされると、

○一九節「詩とさんびと霊の歌をもつて人々の間に語り合い、神にむかつて心からさんびの歌を歌いなさい」人間同士では歌をもつて語り合い、主にむかつては讚美の歌を歌うようになる。そして二〇節。これが最も具体的なことです。

○二〇節「すべてのことにつき、いつも、私たちの主イエス・キリストの御名によって、父なる神に感謝するようになる」

聖霊に満たされると、毎日自分自身にとっては、すなわち「すべてのことにつき、いつも、私たちの主イエス・キリストの御名によって、父なる神に感謝するようになる」。

そして、お互いはどうなるかというと、

○二一節「キリストに対する恐れ的心をもって、たがいに仕え合うべきである」

「キリストに対する恐れ」というのは、ルターは「神に対する恐れ」と訳した。キリストに対しても、神に対しても、同じことでしょう。

聖霊に満たされるとこういうふうになる。一八節が、「聖霊に満たされる」というのが、これがキリスト教信徒の生活のこれが conclusion です。結論です。

そうですから信者の生活というのは、聖霊に満たされよ、聖霊によって歩け、聖霊に導かれよ。ロマ書八章には「神の霊、聖霊に導かれる者、これ神の子なり」とパウロは言った。神の霊に導かれる。

今日のレッスンは、二〇節が中心とみてよろしい。聖霊に満たされたら「すべてのこと、いつも、イエス・キ

リストの御名によって、父なる神に感謝する」。感謝せよと。すべてのことについて、いつでも感謝する。こういう人をクリスチャンと言うのです。

これは不可能ではない。可能です。大先生というものは、自分のしていることを弟子に話します。自分の毎日できていることを話します。パウロ先生は大先生です。彼は自分のできないことを言っているのではない。毎日パウロは実行していたことを言っている。これは、弟子にそうせよとパウロが言うからには、これは可能です。

これができない間は、自分は信者といったらいけない。これができなければ信者ではありません。まだ聖霊を受けていない。パウロは自分が実行していること、毎日実行していることを「そうしなさい」、聖霊に満たされてそうせよと言っている。「すべてのこと、いつでも、神に対して感謝する」。これは、天国を目標として生活したら可能です。It's possible. 力ができない間は、わたしは信者であると、諸君、言うな。

そしてその方法は、天国を目標とする方法はちゃんと書いてある、ここに。「イエス・キリストの御名によって」。イエス・キリストの御名といったら、イエス・キリストのすなわち御力、イエス・キリストの力、イエス・キリストの贖いの力です。

村山君、聞いておかなければいけないよ。イエス・キリストの贖いの力だよ。この世のものではない、これは。これが分かったら、いつでも、すべてのことについて感謝できる。これは可能です。そういうことを君、この世のことを話して、その女性に話ししなければいけない。その時分には僕も分かっていないから、君も分からないのは当たり前だけれど。先生が分からないのだから、弟子が分からないのは当たり前ですよ。

そういうわけで、これは可能です。これができたら、われわれは伝教大師が言った一隅を照らす人にしてもらう。一隅を照らす人になる。まず一隅を照らす、自分のいる家の中を照らし、自分のいる職業の一つの椅子を照

らすような人間にならなければ、駄目ですよ。人にこんなことせよ、こういうことしなさいと言って人に口で勧めているようなことではそんなものは駄目。そんなことやめたまえ。自分が初めにそうならなければならぬ。これがクリスチャンの定義です。ロマ書に「すべて、神の霊に導かれるものは、神の子なり」とパウロは書いてある。これは、天国へ帰れということを目当てとしたときに可能になる。

この前の説教に加藤武樹兄弟は、ヨハネ伝の一六章、すなわち「イエス・キリストを再び見るときに、お前ら、その喜びは満ち溢れるぞ」と、「その喜びを奪うものはないぞ」とイエスが言った。われわれはこの肉体の生命の終わる時に、キリストが迎えに来る時に、今までは信仰だけれど、その時はキリストと相見る、その時の喜び、何者も奪うものはないぞとキリストは言った。

キリストはうそは言わないですよ。われわれはうそを言うから、聖書にこれ以外なことが書いてあるのだろうと思っているけれど。人間はうそを言うけれど、神はうそを言わない。

一八節から二二節までは一つの文章、一 sentence。

『歎異抄』という親鸞の弟子の書いた本に、親鸞に向かって弟子が「先生、私はこういうふうにして浄土の話を書いて喜べと。喜ぶべき理由は十分にある。喜ぶべきでありますけれども、どうも喜ぶ心が起こりませんが、いかがでしょうか」と先生に聞いた。そうしたら先生の親鸞は「お前も喜べないのか。わしも喜べない」。『本当に喜べないというのが、喜ぶべきことを喜ぶことができないというのが、これが煩惱だ』。「しかし、その煩惱具足の人間も称名すれば救われると救い主は言ったのだ」。そうですから、喜べないにつけても、喜べないものを称名によって救うというその本願の力が無限だから、喜べないにつけても、いよいよこういう者を救うという本願が分かってありがたいではないかと、親鸞は弟子に言ったと書いてある。

喜べない、そういう者を必ず救ってやるという救い、福音だから、喜べないにつけてもいよいよありがたいではないか。本願の深さがありがたいではないかといって、ありがたいとは親鸞は言わなかったけど、救いは確かではないかと言われた。救いが確かであるということは、喜んでいいことです。喜んでいいとは歎異抄には書いてないけれど、後ろには、喜べない者が救われるんだ、確かだと言って互いに喜んでという字が略してある、あの本は、喜べない者が共に喜んだということを書いてあるのです。

われわれ天国を当てとして歩くようになったならば感謝せよと書いてあるから、感謝しなければいけないのに感謝できない。われわれ本当にちよつとしたら感謝の心が無くなって、腹立って人ばかり責める心になるけれども、われわれの救いは自分の信仰、自分の行ないによらない。ひとえにイエスの贖いによる。贖いの力が全てだ。

その贖いの力をわれわれに味わうことができるように、称名というかたちで神はわれわれに提供している。われわれに下さっている。そうですからわれわれは「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と。喜べない自分、天国を目当てとせよと書いてあるけれど、自分はこの世のことが目当てになってくる。そういうわれわれ、これを罪人いう。そういうわれわれ罪人を、誰でもできる称名、称名のかたちにおいて贖いが提供されているということ、なんとありがたいと言わざるを得ないではないか。称名というかたち、「わが主イエスよ。わが主イエスよ」。

この二〇節は「イエス・キリストを称名することによって、天国へ行く望みがいよいよ確実に与えられて、すべてのことを感謝し、いつも喜べる」と解釈したらよろしい。イエス・キリストの名を呼ぶ、称名することによって、いよいよ天国の望みの確信を与えられて、すべてのことに、いつも感謝しなさい。

これは、すぐには行けない。漸次、聖霊、われわれに臨むによって、これは可能です。観音經に「生老病死の

苦、漸をもって滅せしむ」ということが書いてある。「漸」という字は、自然にだんだん無くなるという事です。内村鑑三は「聖霊は徐々にくだる。一生、徐々にくだる。力は年と共に増す」と言った。キリスト教は聖霊教ですよ。真理の御霊教です。急ぐなかれ。「聖霊は徐々にくだる」。

喜ぶと共に、それと同じ力をもって、パウロは「たがいに仕えよ」と書いてある。たがいに仕える。二一節「たがいに仕え合うべきである」。仕え合うというのは「従う」という字です。ドイツ語で *untertan* と書いてあるが、それは「従う」という字です。

天国への望みがはつきりしてくる時に、たがいに人に仕える精神が起こってくる。「仕える」という精神が起こってくる。われわれは、こうしたい、人に仕えさせたい。自分が仕えるという精神が無い。そうですからじきにけんかになる。

大体今日の大事なところはそういうふうなことでありまして、一一年前には称名ということが分かっておりませんでした。そうですから称名のことを言いませんでしたが、今日は、主の名を呼ぶ、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことを私は実行したい。私は称名をして、そしてすべてのことにいつも感謝する者になりたい。現在はそうならないけれども、将来、すべてのことにおいていつでも、称名しつつ、そういう者になりたい。そして、これは「なれる」と私確信する。よって、伝教大師が言われた一隅を照らす者になりたい。

第二一講 夫婦関係その一 第五章二二節―二七節

(昭和五三(一九七八)年二月二六日)

今日のところは昭和四二年の七月の二三日に講義させていただきました。その説教を昨日聴いたのですが、七月二三日ですから「炎熱焼くがごとき暑い日であった」と講義に申しております。市川浩兄弟が司会をしてくださいまして、ちょうど今日山口良二兄弟が司会してくれましたごとく、ちょうど市川兄弟が信仰にあふれた司会の文句をもって司会をしていただき、集会が終わった最後の終禱は奥様の市川姉妹が終禱をしていただきました。誠に感銘深い講義を昨日聴かせていただきました。

本日は一年たちまして、再び同じ場所を講義させていただきましたが、やはり一〇年の間に私の聖書理解が少しく神様によって教えられました、一〇年前の幼稚であった理解を少しく教えられました感謝いたしております。エペソ書の初めの三章は信仰のことについて書き、後半、四、五、六章は、行ないのことについて書いている場所であります。

いつも申し上げるとおり、キリスト教道徳というものはキリスト教信仰の裏です。そうですから、キリスト教信仰なくしてはキリスト教道徳は出てこない。いよいよ四章に入ってキリスト教の道徳に入りましたときにも、またパウロは信仰のことを話しまして、そしていよいよ五章になってから行ないへ入って、五章二一節まで三回にわたって道徳を述べた。五章一節から五章二一節まで、三回にわたって講義しましたが、ここにおいてパウロは、信者としての道徳を述べた。誠にこの場所は重大なキリスト教道徳、われわれの生活について書いてあります、いよいよそれが終わりました。パウロは、家族関係についての教えを述べた。これが本日の五章二二節から

六章の六節までです。

パウロはキリスト教道徳、われわれの生活を教える最後に、家族関係の道徳を述べた。ロマ書などには家族関係は特に述べておりません。エペソ書において、道徳の終わりのところに、家族関係、家庭の生活の道徳の指針を示した。これはエペソ書の特徴ともいべき場所でありまして、この場所はわれわれ結婚式の司式をさせてもられます時、牧師が読む場所もこの場所から引用する。そうですから、これは家族関係の、われわれの家庭生活の指針として述べた場所でありまして、これはキリスト教道徳においても非常に大切な教訓の場所であると思うのであります。

なぜかといいますと、家庭生活というものは私思いますのに、これは人間の最も深い、最も根本的な生活だと思います。人は家庭生活を軽く見る傾向がありますけれども、これは人間生活の基礎、根底であると思います。ここにおいて鍛えられていなければ本当の人間はできないと、私は思います。大きい話になりますが、人類を導いたというような偉大なる人格を学びますと、みんな家庭においてその根底を養っている。そうありますので、家庭生活というものは、これは実に大きくいえば、人類の幸福を決定するような場所であると私は信じます。

わが日本においてもこのごろ物質はだんだん豊かになりますけれども、もうひとつ人間生活が良い生活ができないというこの根底は、私は、家庭生活がだんだん緩んできているのではなからうか。そうですから立派な子弟が出てこない。もちろん学校も増えて、勉強する人も増えておりますけれども、もうひとつ立派な人物が出てこないというのは、私はやはり家庭生活が緩んできていることが私は根底にあると思うのであります。

家庭生活というものは、実にわれわれはもう一遍考え直す必要があるのではないか。家庭生活におけるパウロ

の教訓というものは、深く注意して学ぶ必要があるのではないかと思っております。

以上、家庭生活の重大性について、私の感想を述べました。

この教訓の指針の第一に、親子関係が出るのではなからうかと思うのですが、ノー。パウロは夫婦関係を述べた。家庭生活においてパウロは第一に、夫婦関係の順序を取った。パウロは、聖書は、夫婦関係を親子関係よりも重大なりとみている。私はそう信ずる。

その理由は、私思いますのに、親子関係というものは自然の関係です。しかるに夫婦関係というものは、もちろん自然な肉体的な関係もありますけれども、その他に精神的、人間の道徳的関係を持っている。親子関係は自然に親子になりますけれども、夫婦関係においては、ただ肉体的関係がある、ただ自然な関係だけでは夫婦関係をなさない。やはり夫は妻を大切にする、また妻は夫に従う、そういうふうな道徳的関係がなければ夫婦関係は成り立たないですよ。だから夫婦関係は、親子関係よりもひとつ深い要素を持っている。むしろ道徳的要素を持っている。そうでありますので、親子関係よりも夫婦関係は深い関係だと、私はそう見ます。聖書はそう見ている。そしてその夫婦関係において、第一に夫に対して注意がありそうなものです。ところがパウロは妻に対して注意している。これも驚くべき注意する場所です。

その本文について、注意する場所に入りましょう。

○二二節「妻たる者よ。主に仕えるように自分の夫に仕えなさい」

○二三節「キリストが教会のかしらであって、自らは、からだなる教会の救い主であられるように、夫は妻のかしらである」

○二四節「そして教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである」

二二節、二三節、二四節、この三節をもって、妻に対する教えを述べた。そして二五節、二六節、二七節の三節をもって、パウロは夫に対する教えをこれから述べます。

この妻に対する三節の教えは、二二節、二三節が原文では一つの文章、二四節も一つの文章と、原文では妻の教えは二つの文章からなっております。

二二節、二三節、これが一つの文章になっております。「妻たる者よ。主に仕えるように自分の夫に仕えなさい」と命令形になっておりますが、この二二節、二三節は原文ではその動詞がない。原文には動詞が無いのでありますが、二二節の最後に「キリストに対する恐れ的心をもって、互いに仕え合うべきである」。二二節のキリスト教道徳の一般道徳の最後に、キリストに対する恐れ的心をもって互いに仕え合うべきである、「互いに仕える」というのが、これがキリスト教道徳の精神です。互いに仕えるという、その字が略してある。「主に仕えるように自分の夫に仕えなさい」。

「妻たる者よ、主に仕えるように自分の夫に仕えなさい」と、これが妻に対する教えです。イエス・キリスト、神に仕えるように夫に仕えよ。「夫に仕えよ」です。「愛せよ」ではない。「夫に仕えよ」と書いてある。その理由は、キリストが教会のかしらであって、からだである教会の救い主であられるように夫は妻のかしらであるからであると、そういうふうには聖書は教えております。そうですから「妻のかしらは夫である」と、それから「主に仕えるように自分の夫に仕えよ」、これが妻に対する教えであります。

それから、もう一つの二四節に入りまして、「そして教会がキリストに仕えるように、妻もすべてのことにおいて、夫に仕えるべきである」。すべてのことにおいて妻は夫に仕えよ、主に仕えるごとく。これは繰り返してあります。二四節は二二節、二三節の繰り返しであります。

なぜこれを繰り返して言っているかということが、私は一〇年前には分からなかった。これは強調です。初めのほうは「自分の夫に仕えなさい、主に仕えるように」と、二二節は「主に仕えるように」という字は原文では後になっている。自分の夫に仕えよ、主に仕えるように。この「主に仕えるように」という字は後になっていたのです。ところが二四節にいきますと、「主に仕えるように」という字が先になっている。エンファシス（ギリシャ語で「入口」、原語ではいつも一番強調する時は先に持つてくる。二四節には「教会が主に仕えるように」、これが先になる。そのように仕えよ。これは強調です。そうですから、仕え方にもいろいろ仕え方があるが、「主に仕えるごとく、神に仕えるごとく、夫に仕えよ」と。「夫を愛せよ」ではない、「夫に仕えよ」です。これが妻に対する教えであります。

次は、夫に対する教えであります。二五節、二六節、二七節とこの三節は、これは原語では一sentence、一つの文章であります。

- 二五節「夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい」
- 二六節「キリストがそうなさったのは、水で洗うことにより、言葉によって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、」
- 二七節「また、しみも、しわも、その類いのものが一切なく、清くて傷の無い栄光のからだの教会を、ご自分を迎えるためである」

この二五節から二七節までの三つの文章、これが夫に対する命令であります。

「モーセは命令し、パウロは勧める」という有名な言葉がありますが、パウロの教えというものはいつも、例

えばロマ書一二章におきましても、信仰の話が終わりましてから道徳に入ります前に「この故にわれ、なんじらに勧む。なんじらを清き体として神にささげよ」と言つて、パウロは勧めている。

ところが、もちろんパウロの道徳は勧めでありますけれども、命令ではありません。けれども、夫に対する努めにあるときには、命令になつてゐる。前の妻に対する教えのときには動詞がない。前の二一節の最後には「キリストに対する恐れをもつて、互いに仕えよ」と「仕える」という動詞があつたが、その字が響いてきてゐるのでありますが、命令形の「仕える」という字が妻に対する教えにありませんが、夫の教えになつてくると明らかに「愛せよ」という命令形の動詞が出てきている。ですから、二五節に「夫たる者よ。キリストが教会を愛して、そのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい」と。

この「愛する」という字はどうも不適當でありまして、日本語で「愛する」と言つたら、なんとはなしに「わが子を愛する」とそういうふうな「愛」と間違ふ。「妻を愛しなさい」という、夫が妻を「愛する」という字は、親が子を愛するということ、その「愛」とは違ふ。すなわち、値打ちがあるからというのではなしに、己を捨てて、その人のいかにかわからず、自分を捨ててその人を立派にするという、それが愛なのです。そうですから夫に對しては、はっきり書いてある。キリストが命を捨てて信者を愛したもうたごとく、汝、妻をそういうふうにして妻のためになせ、ということなのです。「愛する」という字は、これは不適當です。なにか不純な文章が入る。利己的な気分になります。「愛する」というようなことを言うと、値打ちある者を愛するのだから。そうではない。値打ちあるなしにかかわらない。どんな妻でも、命を捨てて妻を愛せよ、妻のためにやるといふのは、これがキリスト教道徳です。

それで、愛しなさいと、「キリストがそんなさつたのは、水で洗うこと、洗礼によつて、福音の言葉によつて

教会を清めて」、教会と言ったら信者です。教会と言ったらぼやっとしているけれども、人ですよ、普通の人です。信者です。「信者を聖なる者とするためにキリストが命を捨てたもう」。「しみもなく、しわもなく、そういうものが一切、清くて傷のない栄光の姿である信者をつくるために」、すなわち、信者に永遠の命を与えるためにキリストが十字架について、そしてその人を救いたもうた、そのキリストのなさったように、妻の値打ちあるないにかかわらず、妻のために命を捨てよ、ということですよ。

これは男子に対する命令ですよ。勧めではない、命令です。パウロはよっぽどこのとき聖霊によって確信を持って言っているに違いない。はつきり命令形が出ている。「したほうがいい」ではない。「せよ」です。できないというのはまだクリスチャンではない。妻に対してそういうことができないというのは、そんな者はまだ信者ではないですよ。われわれ夫たるものは、よく考えて、妻に対してそういうことはできないという自分の状態で、「ああ、俺はまだ信仰が分かっていないな。俺はまだ信仰が無いんだな」と思って差し支えない、これは。信者に対する勧めですから。

キリスト教道徳、道徳というものは説教するのは易いでしょう。口で言うのは。だから道徳の部分になりますと、牧師はやっぱり注意しなければいけない。自分は行なってもいないのに言うでしょう。言ったら、言葉が真理ですからね。牧師は言葉だけは言える。夫たる自分を何も実行していない私がこんな説教できますよ。だんだん説教が上手になる。説教が上手になるけれども行ないはできていないということですよ。われわれはそういうふうになりますよ。

そうですから、牧師はこういう道徳のところはあまり説教しないほうがよろしい。自分が行なったらいい。牧師は「人に道徳せよ」というようなことを説くよりも、むしろ自分がそのキリスト教道徳を行なったらいい。信

仰の話はいいですよ。信仰の話はどんなにしても、贖いの話はどんなにしても、人も利益するし自分も利益しますけれど、道徳の話になってくると、話は上手になるけれども実行はしていないということになる。どこでも大體そうですよ。話が上手な牧師は大体実行はできていない。私をはじめ。

こういうことになりました、これに対するマイヤー^(註)先生の注解の文句をちよつとご紹介いたしましょう。「この教えよりもっと高い、もつと理想的な夫婦生活の基準というものは、考えることは不可能である」。マイヤー先生のこれは注解です。「これはキリスト信者の意識の生ける深さから直接流れいずるものにして、その故に、全ての具体的な関係に實際適用可能である」と。これはマイヤー先生の解釈。

もう一つは、クリソストム^(註)のこの解釈。夫に対して「汝は、服従の限度を見たか。また、この愛の限度を見たか」。妻の服従の限度です。「また、この夫の妻に対する愛の限度を聞け。汝は、汝の妻が、教会がキリストに従うごとく汝に従うを欲するか。キリストが教会に對せしごとく妻に對し、汝自身、妻を大切にせよ。妻のために命を捨てねばならぬ場合、また身を粉々にせねばならぬ場合、その他いかなることでも辛抱せねばならぬ場合が必要となつた場合には、それを拒絶するな。それをなせ。そして汝がこれを実行したとしても、キリストがなしたことをなしたことはない。その訳は、汝は一体となつた妻のためになしたに過ぎないので、キリストは自身を憎みし者のために、すなわち教会を贖いによつて自分に引き寄せ、戻し給うのである」と。

クリソストムの訳は、たとえそういうふうな妻のために自分の命を捨て、身を粉々にするといふような場合、そういうことを実行しても、キリストの教会を愛したようにはならない。その程度にもなっていない。なぜならば、君は一体になつた妻のためにやっているのであつて、キリストはキリストに反する人間のためにまでそういうふうになさつたのだから、君はまだキリストのようにはなっていない、それでは、とクリソストムはおつし

やっています。

そうでありますから、われわれがいくら妻のためにやっても、「キリストが教会のためにしたごとく妻を愛せよ」という標準に達しない。われわれはその標準に行かない。

まずい訳ですが、そういうわけでありまして、夫に対しての命令というものは、妻に対する命令と同じ程度に重い。これは難しい。これはキリスト信者にして初めてなし得る。こういう場所であります。

命令形になっているということが、私は一〇年前にははっきり分からなかった。われわれはキリスト信者である、信者でございというふうに分かた思ひ、人も思っていますけれども、われわれは自分に手を当ててみて、家庭生活においてわれわれは、特にクリスチャンは、夫である人は夫の義務、妻である人は妻の義務を、われわれは考え直したいと思います。

妻たる人は、夫の義務を考える必要はない。夫たるものは妻の義務を考える必要はない。夫は夫の義務、妻は妻の義務を尽くしたらいいと思います。

私も結婚生活、前の家内とは約二〇年、現在の家内とはもう二〇年を越して夫婦生活をしておりますけれども、こういうことを真剣に考えたことはない。結婚式の司式は何遍もやりました。式文は何遍も読みましたけれども、式文では、夫も妻も「愛せよ」になっている。「汝、この妻をめぐって愛するか」と、妻にも「愛するか」と言っているけれど、原文は違うんですよ。夫は「愛せよ」、「命を捨てよ」になっておりますけど、妻のほうは、夫のために命を捨ててではない、「夫に従え」と書いてある。これは義務が違う。夫と妻とは義務が違うんですよ。同等ですから男女同権か、ノー、違う。義務が違う。これは信者に対して言っている。未信者の方はこんな教えを聞かないですよ。これは、パウロは信者に対して命令している。

そして論より証拠、こういうふうな家庭からは立派な人物が出る。こういうふうな精神の無い家庭からは、立派な人物、Greatというような者は出てきません。そんなものは、家庭というものではない。そんなものは男女一緒に住んでいるだけです。これを野合という。われらの大体の生活は野合生活です。クリスチャンだったら、われわれに結婚生活とは言い過ぎますよ。そんなものは結婚生活なんでもつたいない。言葉が泣きますよ。義務を行なわないで結婚生活と言えませんよ。妻は妻の義務を行なわず、夫は夫の義務を行なわずして「俺は結婚生活している」とは、言い過ぎだ、そんなものは。

私もこれから、年は取りましたけれども、この万分の一でも百分の一でも、パウロ先生の命令に従って夫の義務を尽くさせていただきました、天国へ帰ったら、パウロ先生に会った時には「パウロ先生の書簡を勉強させていただきましたが、夫に対する義務も少しく実行させていただきました」と言っつてパウロ先生に報告したい。以上。

(注) ハンス・マイヤー（一八八四—一九六六）ドイツの神学者、哲学者。

ヨハネス・クリストム（三五四—四〇七）聖人、コンスタンチノーブルの大神教。

第二二講

夫婦関係およびその他の家族関係

第五章二八節 - 六章九節

(昭和五三(一九七八)年三月二二日)

本日は、司会者に読んでいただきましたエペソ書五章二八節から六章九節までの大意を申し上げたいと思います。

この部分は、四章の二二節から六章の九節までの行ないの教えの最後の部分に当たっております。いつものパウロの書簡は初め半分は信仰の教え、それからあと半分は行ないの教えとこういふふうになっております。本日のところは行ないの教えの最後の部分に当たっております。

最後にまた行ないのことについて締めくくりの話をいたしますけれども、今日の部分は夫婦関係の続き、それから他の家族関係を述べておりまして、すなわち家族関係の道德の教えをもつて道德の教えの冠としたというか、ピリオドを打ったわけであります。

同じことになりますけれども、行ないというのは信仰の裏でありまして、信仰を学んでその信仰から出てくるのがキリスト教道德です。そうですから、道德と言ったら信仰がいつも響いている。道德を学んだら結局は、信仰を学んでいるようなものです。裏表です。

そして今日のところは、その行ないの最後の部分、夫婦関係、それから家族関係。家族関係の教えが最後に、今日のところであります。ロマ書には家族関係のことを特に述べておりません。そうですから、パウロの教えとしてはここは非常に大切な場所であります。

特に家族関係を論ずるのに道德の最後に持ってきて、いわゆる文章で言ったらピリオドでありますから、ある

意味においてこれは基礎となると思うのであります。これは非常に注目すべき場所でありまして、家族関係の道徳というものは、これは一番道徳の基礎になる。基礎ができなければ何でもものは駄目です。基礎訓練というところが、これが何でも一番大事です。

話は脱線しますが、キリスト教信仰の基礎はロマ書です。ロマ書が基礎になっているから、ロマ書をしっかりと分かっていなければキリスト教は分からないというようなものです。話は脱線しましたが、基礎の家庭、家族関係の道徳、この基礎が行なわれていないということは、道徳が軌道に乗っていないということです。そうですから、これは非常に大切な場所であります。

その家族関係の道徳の初めに夫婦関係がある。私らは親子関係が初めに思いますが、夫婦関係が出てきた。そうですから、家族関係の道徳において夫婦関係が最も大切です。

そして五章二二節から夫婦関係を述べているのですが、夫婦関係で初めに妻が出てくる。妻の義務が出てくる。それから夫の義務が出てきました。それから今日のところは、ずっと夫の義務。夫婦関係の二八節から三三節まで、ずっとこれは夫に対する義務の話です。そうですから前回に話しましたところと今日のところを合わせますと、五章の二二節から終わりの三三節までは夫婦関係を論じている場所となります。

この前一回目を終えましたが、今日のこれを合わせますと、夫婦関係はキリストと教会との関係とよく似ていると言った。第一に似ている点は、相互の義務がちょうど教会とキリストとの関係、教会と言ったらば一つと似ていますから信者と言ったらいいでしょう、信者とキリストの関係が夫婦の関係によく似ている。第一の点は、キリストが信者のかしらであるがごとく夫は妻のかしらであると、それがよく似ている。

それから第二によく似ているのは、相互の関係の義務がよく似ている。すなわち、妻のほうは、信者がキリス

トに従うごとく妻は夫に従うべきである。「従う」というよりむしろこれは、原語の意味は「仕える」という字です。日本語にも「妻たる者よ、主に仕えるように自分の夫に仕え」となっている。「従う」というのは、子どもの場合にも召使いの場合にも、子は夫に従え、召使いは主人に従え、という字がありますが、字が違う。「妻が夫に従え」というのは、日本語も「仕えなさい」となっています。「従え」ではない「仕える」。妻は夫に仕える。ちように信者が神に仕えるごとく、妻は夫に仕えよと。そしてこれがキリスト教道德の家庭道德の初めに出てきている。

夫は、キリストが信者のために命を捨てて永遠の命を与えたもうたように似て、夫は妻のために命を捨てよ。これが夫の義務です。そういうことを書いてある。

そうですから夫婦の義務というものは非常に高い義務であります。私は、夫婦関係は親子関係よりも深い関係だと思えます。

それから第三に似ている点。キリストと信者との関係と妻と夫との関係がよく似ているという第三の点は、信者とキリストが一体であるごとく、妻と夫は一体だという。一つのからだだという。

夫婦の道德というものが、この義務をお互いにとの程度に行なっているかということによって、その家の家庭の幸福が決まる。妻は夫に対し、夫は妻に対し、相手の義務を要求することをやめて、自分が自分の義務を少しでもできるように努めたいと、そういうふうには私には思いません。そこに私は家庭の意味があると思えます。われわれは相手に対して相手の義務を求めておりますけれども、われわれは自分の義務を尽くしていない。そうでありますので、私はやはり少しでも夫の義務を、万分の一でも行なって、天国に行ったらパウロ先生に少しでも「やってきました」ということを報告したいと思う。

このところは、一〇年ほど前の一九六七年九月一七日にここを講義したのですが、その時の講義は高野政子姉妹が司会をしてくれまして、第三日曜でしたから、最後に北川鶴栄姉妹が祈ってくれました。その説教を昨日テープで聴いてまいりました。われわれは夫婦関係の道徳をやっておりますけれども、今までよりもこれが緩んできています、そうですから、いいことができない。夫婦関係が緩んでいるから立派な子弟が出ない。そうですから、立派な子弟が出ないということは夫婦関係の道徳が行なわれていないということです。これが緩んでいるから、家庭の道徳が基礎ですから、人間の他の道徳が緩んできています。

そうですから一般に自分の義務を行わずに人の義務ばかり責めるような、そういうふうな社会状態がありまされども、キリスト教と言えばなにか古臭い、昔の話のように言っておりますけれども、これが行なわれていないから、現代のいろいろな悲しい状態が現われてきているというのは、大体において家庭、家族関係の道徳が緩んでいるところから来ていると私は思います。

われわれ夫たる者、妻たる者は、相手に要求せずして、妻は妻たるの務め、夫は夫たる務めを少しでも実行したいと思います。

私一〇年前には妻の義務が非常に強調されていると思っておりますが、もちろん初めに妻が出てき、最後にまた三三節に「妻もまた夫を敬いなさい」と、妻の義務をパウロは非常に強調しております。一〇年前より私、原語が少し読めるようになっておりますので、これをよく読んでみますと、夫の義務が相当強調されている。

○三三節「いずれにしても、あなたがたは、それぞれ、自分の妻を自分自身のように愛しなさい。妻もまた夫を敬いなさい」

二つとも同じように命令形に訳してありますが、原語では、夫に対して「いずれにしてもあなたがたは」と言つて、そして「自分の妻を自分自身のように愛せよ」というこの動詞のかたちと、「妻もまた夫を敬いなさい」という「敬う」という動詞のかたちが違う。そうですから、これはむしろ「妻が夫を敬うようになるように妻を愛せよ」という命令形です。「敬う」という字は、これは条件文の動詞です。私は原語の知識が薄いですが、これは「妻が夫を敬うようになるように、夫よ、妻を愛せよ」と、こうしたほうが原語の意味に正しいと思います。

この夫婦関係を読んでみるのに、夫に対しては「愛せよ」という命令形がありますが、妻に対しては「仕えよ」という動詞がない。どこも出てきていない。前後を見れば、例えば「教会がキリストに仕えるように、妻もすべのことに於いて夫に仕えるべきである」と二四節にあります。このところにも教会がキリストに「仕える」という動詞がありますけども、妻が夫に仕えるのには「仕える」という動詞が無い。意味はそういう意味ですけれども。そうですから原文を読んでも動詞がありませんけれども、夫のほうに対しては「愛せよ」という強い命令形が二つもありまして、私はこの教えは相当、妻ばかりではなしに、夫にもこれは非常に嚴重に言つていふという感じを受けます。

これはやはり双方やらなければいけないので、夫の最もいい例は、マリアが妊娠した時にヨセフがもし結婚しなかったらマリアは殺されたかも知れない。姦淫の罪によって殺されるというようなことになっていますから、ヨセフが自分の妻として夫としての義務を履行しました。命を捨てて妻を愛しましたから、キリストが育つた。そうですから、あの家庭においてヨセフが夫たる義務を尽くしたことによって、神は祝福して、人類の救い主をその家庭から出した。そうですから、われわれは善行すれば必ず神は報いたもう。

またヨブの場合でも、ヨブがあつた悪い病気になる時は、血族は皆捨てた。しかし妻は捨てなかつた。最後まで妻はヨブを捨てなかつた。しかし最後にはやつぱり妻もヨブを捨てたようで、ヨセフのようにはいかなかつたですけれども、私はこの夫婦関係というものは、これはもう本当に人類の道德の根底をなすものではなからうかと思ひます。

それから「夫婦は一体である」というところは、「一体である」という字は、五章の三一節「それゆゑに、人は父母を離れて」、その人は、「男子は」ですね、「その妻と結ばれ、ふたりの者は一体となるべきである」。この「結ばれる」という字は日本語で「結ばれ」と受け身に訳してありますが、原文もこのとおりであります。「結ばれる」という受け身の動詞です。そうですから、「結ばされる」というのは英語では *adhere* というようですが、英文になるかならないか知りませんが、「will be adhered」と、こういうふうにならなければいけない。

「結ばれ」という言葉が、一〇年前にはこの受け身のかたちが原語で自分もよく読めませんでした、今度の時にはこの「妻と結ばれる」という字はピンときた。これは受け身です。これは人間が、男が、結ばれるのではなく、聖霊の助けによつて結ばしめられる。われわれはわがままですから、一体となるというような、そんな清い心は無い。しかし聖霊の御助け、神の恵みによつてわれわれは一体となることが出来る。妻と一体となることが出来る。そのときに、すなわちヨセフのごとく妻のために命を捨てる事が出来る。

「この奥義は大いなり」とパウロは言つた。信者と教会との関係、また夫と妻との関係は難しい、奥義です。本当に私は、これは過言かもしれませんが、人間の道德の基礎というものは家庭関係にある。家庭関係の基礎は夫婦関係にある。本当に夫婦関係が実行できたら、嫁と姑との関係というようなものは解消します。嫁と姑との関係がややこしくなつてゐる。今これはえらい大問題に人類を悩ましてゐるけれども、妻と夫とがここに示して

あるごとき理想の夫婦に近づいたならば、妻と姑との関係は解消する。僕はそう信ずる。

古い古いと言ってわれわれは、その良い教えをいなししておりますけれども、古い新しいということと良い悪いということとは関係ないですよ。古いものにもいいものがありますよ。また何千年続いているという古いものでなければ本当はいけない。新しいものはまだ実験してないでしょう。キリストがどれだけの力を持ち給うかということは、まだ人類は経験していません。研究し尽くされていませんよ。

それでは夫婦関係はそれぐらいにしておきましょう。

○六章一節「子たる者よ。主にあつて両親に従いなさい」

この「従う」というのは、妻が夫に「仕える」と字が違う。従え。「これは正しいことである」。妻が夫に仕えていたら、子どもがそれを見ているですから、子どもが親に仕えるようになる。これは妻に責任がありますよ。妻の態度を見ているのだから。そうですから、子どもがすなわち両親に従うようになる。「従いなさい」と、これは命令になっています。

○二節『あなたの父と母とを敬え』。これが第一の戒めであつて、次の約束がそれについている」

今日、交読文で、十戒を読みました。「父と母とを敬え」ということが人間道徳の初めにきている。これまたこの元が、妻の夫に対する態度が子どもに移ってくる。また子どもが親に対して誠意を持ってないというようなことで、世の中に出て他人に誠意を持つというようなことはできません、家庭において親に対して真心を学ぶのです。

○三節「そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きながらえるであろう」

○四節「父なる者よ。子どもを怒らせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」

「子を怒らせないで」というのは、「怒る」というのは、自分の思うようにならないから、わがままだから怒る。そうですから「子どもをわがままに育てるな」ということです。「怒らせないで」といったら。わがままに育てないためにはどうしたらいいかというのと、「主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育て」教えよ、ということですから、このごろは子どもを甘やかしている。子どもの言うとおりにしている。そうですから、直に自分の思うようにならないければ憤慨する。このごろの学生は皆そうですよ。若い者は、直に憤慨する。直に人を殺したりしている。それは、親が子どもをわがままに育てたからです。

○五節「僕たる者よ。キリストに従うように、恐れおののきて、真心をもって肉における主人に従いなさい」
これは妻が夫に従うよりも、もつと軽い「従う」です。

○六節「人にへつらおうとして目先だけの勤めをするのでなく、キリストの僕として心から神の御旨を行ない、」
○七節「人ではなく主に仕えるように、快く仕えなさい」

これは、われわれ、職場で当てはまる言葉です。

○八節「あなたがたが知っているとおおり、誰でも良いことを行なえば、僕であれ、自由人であれ、それに相当する報いを、それぞれ主から受けるであろう」

良いことをしたらよい報いを受けるのですが、悪いことをしたら悪い報いを受ける。八節、このことをわれわれはよく学んでおきたいと思います。

善行には必ず善の報いがあり、悪行には必ず悪の報いがある。これは仏教、キリスト教を通じて、神は正義にいます。善には善、悪には悪の報いがある。これが道徳、宗教の根底です。このごろの人はそんなことは少しも考えていない。その場、その時だけのことを考えている。われわれの行ないには必ず報いがある。善には善、悪には悪の報いがあるということを、本当にわれわれは知りたいたいと思います。

○ 九節「主人たる者よ。僕たちに対して、同様にしなさい。おどすことをしてはならない」

「おどす」というのは、この字には定冠詞が付いている。「おどす」というのは、いつもおどしていた。主人たる者はいつもやっていた。そうですから、いつも君らがやるおどすことをしないで、という意味です。原語の意味はそんな意味です。

○ 九節b「あなたがたが知っているとおおり、彼らとあなたがたとの主は天にいますのであり、かつ人をかたよりに見ることをなすならなご」

読んで字のとおり、これは説明を加える必要ありません。読んでください。

大体これが文字の意義であります。これで大体キリスト教道徳の勧めは終わりました。

あとは「最後に言う」と書いて、繰り返して精神を言っているわけであります。

今日はヨセフの話が出ましたが、ヨセフは一つの家庭を清めてイエス・キリストを人類に提供して、彼の小さな家庭を照らしたのみならず、全世界を照らす人となりました。伝教大師が「一隅を照らす者、これ国宝であ

る」と、自分はそういう人をつくるために比叡山延暦寺をつくるということを言われたそうでありますけれども、私も一隅を照らす人になりたい。特に私は自分の家庭を照らす者になりたい。そして私の職場、ここは職場ですから、この職場の隅、一隅を照らす者になりたい。そのために私は聖書を勉強したい。

本日は第二九回目の高円寺東教会創立記念礼拝であります。私はこれからまた聖書を勉強させていただきますけれども、本日の二九回の記念礼拝以後、いよいよ本日から高円寺東教会は第三〇年に入らるわけであります。「三〇にして立つ」と古人は言った。私もこの高円寺東教会三〇年にして今日から私の聖書勉強を、今まで過去三〇年は皆さまに福音を伝道するために、贖いの信仰を伝道するために聖書を勉強させていただきました。今日からは皆さんのためではない。自分のために、自分一人のために、自分一人の信仰、一隅を照らす人、そのために聖書を学ぶ者になりたいと思います。

それは非常に *selfish*、非常にわがままのようでありますけど、許していただきたい。私は皆さんに教えようというそういう大胆な、めくら蛇に怖じざる希望を持たない。私は自分一人を教えたい。自分が教えられないものを人に教えるなんて傲慢ですよ、そんなものは。私はそう思う。そうですから私は、これからは自分一人を教えたい。そして少しく信者らしい信者になりたい。

内村鑑三は「一人の信者ができたら日本は変わる」と言った。私はオーバーだなど思っていた。ところが、一昨年のクリスマスに申し上げたとおり、一人の信者ができたら、その人の感化によって神はその人の死後二人の信者をつくりたもうと、そういうことを神がしたもうたら、死んでから二五年たって二人、倍になるという計算したら、五〇〇年したら百万人できる。六〇〇年したら千万人以上、七〇〇年したら一億以上のそういう信者ができる。

そうですから、本当に二人の人に感化を及ぼすようなそういう信者にしてもらったら、七〇〇年で一億以上ですから、八〇〇年したら一〇億以上になる。そうですから、日本が変わると内村先生は言いましたが、八〇〇年したら、日本は変わって余りある。ちょうど法然上人が専修念仏、念仏の真理を悟ったのが一一七五年。この数年前、われわれ旧制高等学校の百年記念祭をやった年です、七四年は。四年前は法然上人の改宗八〇〇年になる。五〇〇年、八〇〇年というのは一瞬ですよ。神が「千年も一日のごとし」と聖書に書いてある。そうですから、五〇〇年やそこら、そんなものは一minuteですよ。そうですから、もし私が本当に一人の信者にしていただいで、私の死後二人、私に似た者を神様がつくってくれたら、そしたら五〇〇年たったら百万人できる。

そうですから先生は「一人の信者ができたら、日本は変わる」と言われた、これはうそではない。これは可能性がありますよ。内村鑑三がそう言った。「一人の信者ができたら、日本は変わる」と言った。内村先生が死んで五〇年、昭和五年に死んだのですから。そうですから私の計算でいくと、昭和五年までに内村鑑三の贖いの信仰が分かった人が四人出たら、五〇〇年たったならば百万人の贖いを理解している日本人が現れる。五〇〇年やそこら一minuteですよ。

これから私も勉強させていただきますけれども、それは皆さんのためでない。自分のために聖書を勉強させていただきます。そして第二、第四の日曜日はここで私を教えるために、私の聖書研究の結果をここで話をさせていただきます。それを聴いていただきましたら誠にありがたい幸せであります。

第二三講 主にありて強かれ 第六章一〇節―二四節

(昭和五三(一九七八)年四月九日)

司会者に読んでいただきました、エペソ書の第六章一〇節から二四節まで、これがエペソ書の最後の部分であります。本日をもってエペソ書の講解を終わります。

「主にありて強かれ」と題しましたが、この題は今日の

○一〇節「主にあって、その偉大なる力によって強くなりなさい」とある、この言葉を引いたわけであります。今日のエペソ書の最後の結尾ともいべき部分は、一言にして言えば「主にあって強かれ」とその言葉に尽きるのであります。「主にあって強かれ」ということについて、それを詳しく説明したわけであります。そうですから、これが今日の説教の要約であります。

「強くなりなさい」と訳してありますけれども、これは原語では受け身であります。これは英語の欽定訳でも、あるいは標準改正訳でも能動態に訳してありますけれども、これは誤訳と言っても差し支えないと思います。そうですね、これは英語で訳してもどうしても受け身に訳さなければならぬ。“become strong”とか“be strong”という字は誤訳でありまして、“be strengthened”と、こういうふうな受け身に訳さないと原文の意味が出ない。「主にあって、その偉大な力によって」と、この「偉大な力」とありますが、原語では「キリストの力の、その力によって強くせられよ」と。原語では「力」という字が三つ出てきている。そうですね、いかにこの言葉が大きな力を持っているかということが分かる。原語によりましたならば「主にあって、イエス・キリストの力の、その力によって強くせられよ」と。“be strengthened”ですから自分が強くなるのではない。聖霊がわれ

われに臨んで、強くしてください。

そうですから、われらどんな信仰の弱い者でも、どんな平凡な者でもいい。われらはこうしてへばりついて学んでいるうちに、強くせられる。この「強くせられる」ということが、すなわち己に勝つ力です。己に勝つ力を与えられる。ここに人類の幸福はかかっている。何十年、教会へ来ていても、己に勝つ力が無かつたらそんなものは駄目です。教会へ来る意味がない。

ペテロ、ヨハネという方々は無学のただ人でありましたけれども、己に勝つ力を持っていた。人類の教師です。聖霊によって、神から聖霊を頂いて彼らは己に勝つ力を持っていた。自分がなしたことをなすのではなくして、自分のなすべきことをなす力を持っていた。そしてそれは、万人がそういう力を頂ける。

○ 一一節「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい」

神の武具は、後で説明が出ています。

○ 一二節「私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」

私たちの戦いは血肉に対する戦いでなくして、これは「悪の霊」、すなわち悪魔の霊との戦いであるというのであります。私たちの戦いは、すなわちわれわれが悪魔の霊に支配されている、われわれは悪魔に支配されている、そうですから、その悪魔の霊と戦う。

○ 一三節「それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武器を身につけなさい」

それだから、悪の力が、悪の霊が強い、その霊と戦うべきわれわれの毎日です。「悪しき日」とは「毎日」と見てよろしい。悪の霊にわれわれは戦争をしていつも負けているのですから。そうですからこれは、われわれの「悪しき日」と言ったら「毎日」です。この世の毎日、この世の生活です。「毎日、悪の霊に負けないように、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために」。

この「抵抗する」という動詞、それに「堅く立つ」という二つの動詞、それが二つ「できるように」という動詞、これがあるわけです。そうですから「できる」という動詞は、「できるように神の武器を身につけよ」という。「できる」というのは何ができるかということ、一つは「抵抗する」ことができる。それから堅く立ちうる、「完全に勝ち抜いて堅く立ちうる」と、そういう二つのことができるために。

よろしいか。「毎日毎日、悪の霊に抵抗することができるために、完全に勝ち抜いて堅く立つことができるために、そのために神の武器を身につけよ」。要するに毎日毎日、すなわち悪の霊に勝ちうるために神の武器をつけよ。「堅く立ちうる」というのと「抵抗しうる」と二つの動詞がありますけれども、それに、すなわちそういうことができるように神の武器をつけよ。

「できるように」という動詞、これも受け身です。そうですから「できさせてもらう」という受け身です。注意してください。自分ができるのではない。「できさせてもらうために武器をつけよ」という。受け身。

「立ちうる」の「うる」という動詞、この動詞がすなわち、「堅く立つ」という動詞にも「抵抗する」という二つの動詞を、「できさせ」という動詞ですが、この「できる」という字は「できさせてもらう」という受け身で

す。これは訳ができないんですよ。英語でも訳ができない “be able” という字、それが受け身なのだから。英語でも express できない。そうですから、これは原語でないと分からない。

そうですから、これは「勝ちうることができさせてもらうように武器をつけよ」ということになる。武器をつけて、日々、毎日毎日の悪魔との戦いに勝ち得させてもらう。「もらう」。キリスト教の力、キリスト教の道徳は受け身です。自分がやるのではない。させてもらう。そうですから誰でもいける方法です。

それから、いよいよ武器の説明です。

○一四節「すなわち、立って真理の帯を腰にしめ」、「真理」というのは福音の真理です。これは同じことばかりパウロは言っているだけです。福音の真理を帯に締めて、「正義の胸当を胸にあて」、「(一五節)「平和の福音の備えを足にはき」、(一六節)「その上に、信仰の盾を取りなさい」と。これは皆、福音の一部一部を言っているだけです。そうですから、イエス・キリストの贖いの福音を信じて神の子とせられて、そして天国を目標として歩け、ということですよ。

「悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう」と。われわれが神の子たるの信仰、復活の望みを持って日々歩いたら、できる。われわれが神の子たるの信仰と天国へ行く、復活するという望みが無いから、いつも負けている。われわれが真に、神の子とせられた信仰と復活の望みとが、がちっとしてきたら、負けない。勝つことができる。

○一七節「また、救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言葉を取りなさい」

神の子とせられた信仰、復活の望みと、日々天国へ近づきつつある。われわれは日々、永遠無限の栄光に近づきつつあるという、これが全てです。救いのかぶとでも、御霊の剣でもある。

そしていよいよ、これは最後です。「絶えず祈と願いとをなし」、最後に祈りが出てくる。一八節から二〇節までは祈りです。

○一八節「絶えず祈りと願いをなし、どんな時でも御霊によつて祈り、そのために目をさましてうむことができなく、全ての聖徒のために祈りなさい」

最後にまた「私のためにも祈ってくれ」ということが最後に出てきている。最後は祈りです。

私はこれを最後に講義しましたのは六七年ですから、昭和四二年の一〇月八日、小沢辰男兄弟が司会をしてくれまして、最後の献金の祈りを佐生健光君がしてくれました。それを昨日聞いてまいりましたが、一〇年前には私はまだ、ロマ書一〇章の「主の名を呼ぶ」ということが救いの条件となっていることすらもまだ分からなかった。一〇年前にはまだ、この時には私はまだ「主の名を呼ぶ」ということ、これが救いの一つの条件になっているということも知らなかった。私のこの一〇年の生活において、すなわちエペソ書六章の講義した時に知らなかった、すなわち「称名ということが救いの条件をなしている」ということ、それからまた、一つの条件であるのみならず、人間側のすべての条件であるということが最近分かってきた。

そうですから、祈りになってきたら、これは主の名を呼ぶことです。主の名を呼べ、これが人間の祈りの絶頂です。今日は「主の祈り」を学びましたが、主の祈りの初めに「御名をあげさせたまえ」と書いてある。そうですからわれわれは主の名を呼ぶ、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶということは、これは非常に大切です。

真理は真理自身が証明する。「わが主イエスよ」と主の名を呼びましょう。己に勝つことができる。

○一九節「また、わたしが口を開くときに語るべき言葉を賜り、大胆に福音の奥義を明らかに示しうるように、わたしのためにも祈ってほしい」

○二〇節「わたしはこの福音のための使節であり、そして鎖につながれているのであるが、つながれていても、語るべきときには大胆に語れるように祈ってほしい」と、私の伝道のために祈ってくれ、とおっしゃっています。

以上、大体「強くせられる」というパウロのこれが勧めであります。イエス・キリストの持ちたもう力、われわれを強くしたもう力というものは、人類の歴史においてまだ研究し尽くされていない。われわれ各自がこの救いの力を実験したらいい。自分が実験したらいい。そして、この救いの力を実験することによって力が与えられる。己に勝つ力が与えられる。この力が無かったら、自分はまだ福音が分かっているかないと、こう解いたらよろしい。

エペソ書には「無限の富」と、「イエス・キリストの無限の富」という字が出てきている。そうですからわれわれは、イエス・キリストが持ちたもう無限の富、われわれにくださる無限の富を、われわれはどれだけ味わっているかということが問題ですよ。われわれがどれだけイエス・キリストがくださる恵みを味わっているかというところが、われわれの幸福は、ここにかかっている。人によらない。自分にかかっている。人がどんなに親切にしてくれても、自分は人の親切が分からないですよ。

その証拠にイエス・キリストの、神の無限の富、無限の親切がわれわれはちつとも分かっているかない。「おれが」

と言っているから。何十年、教会へ来ていても、駄目ですよ。「おれが」といつていたら。ちつとも信仰が移らない。教会へ来たなら、牧師は「よう来てくださいました」と言つて信者を持ち上げているから、信者はちつとも成長しない。何十年来ていても。そうでしょう。牧師は「あんたは偉い、あんた偉い」と。偉いことはない。みんな落第ですよ、君たちは。落第生だ。それで自分は及第点だと思つてゐる。あんたらの信仰は、失礼だけど。パウロが点をつけたら零点ですよ、その証拠に力が無い。己に勝つ力が無い。われわれ皆、わがままだ。福音が分かつていないという証拠です。

教会、福音伝道第三〇年に入つて、私は大胆に言う。齒に衣を着せません。私はこれから本当のことを言います。今までも言つてゐるつもりだけれど。

その証拠に何十年教会へ来ていても、ちつとも信仰によつて慰められておらない。力が無い。己に勝つ力が無い。これは、受け身です。キリスト教は。「自分が」ではない。その証拠に、コリント前書にパウロの教えた教会でちつとも信仰が分かつていない。コリント前書で、がたがたがたやつてゐる。いかにこのキリスト教信仰というものは難しいものであるかということが分かる。五年や一〇年じゃいかん。一つの外国語が分かるのも一〇年かかる。

雑駁な解釈でしたが、これをもつて終わります。

第二四講 エペソ書大観 第五章一、二節

(昭和五三(一九七八)年四月二三日)

【祈り】

在天の父様、麗しき春の聖日のあした、おちこちより熱心なる兄弟姉妹をお集めくださいまして、ともに聖書の真理を学び、あなたを讚美するこの集会をいただきましたことを、ありがたき幸せと感謝をいたします。

誠に無学、無徳の身を持ちまして、「めくら蛇に怖じず」のたとえのごとく、大胆にもこの三〇年間、聖書の講義をさせていただきましたが、兄弟姉妹が忍んでこれをお聞きいただきましたおかげによりまして、少しく聖書の真理を学ばせていただきましたことを、誠に幸せなることと感謝をいたします。

どうぞ、語りますところ、めくらが色の濃き薄きを論じ、耳しい者が声の好悪を言わんがごとき、そういう聖書の知識を振り回すところの聖書の講義でございませんで、真に聖書の真理を、自分でも聖霊の御導きを受けまして、これを語る者も聴く者も知ることができるよう、終始聖霊の御働きを御名によって祈り奉る。

【説教】

本日は「エペソ書の大観」と題しまして、エペソ書全体の精神を学びたいと思います。

ちようど昭和四二年(一九六七年)の一〇月一五日、一〇年前になりましたが、「エペソ書大観」と題しまして、ここで、一〇月一五日で第三日曜でございましたから、高野政子姉妹が司会をしていただきまして、山口恵美姉妹が最後の終禱、祈りをしていただきました。その説教を昨日静かに聴かせていただきました。

皆さまが終始忍耐を持って聞いていただきました。私の聖書知識も少しく増しまして、本日もここに同じ場所を、同じことについて聖書講義をさせていただきますことを、誠に感謝に耐えない次第であります。

一〇月の第三日曜。これは、私が初めて旧制高校時代一年生の時に白山教会へまいりましたのが大正六年一〇月の第三日曜でありまして、どうも一〇月の第三日曜というのは忘れえないのであります。それから伝道者になりまして初めての説教が、これまた一〇月の第三日曜、昭和二年の第三日曜でありました。そうでありますので、昭和四二年のエペソ書大観は、ちょうど教会に行きかけてから満五〇年、それから伝道師になりましたから満二〇年の時の講義でありまして、誠にその時は感銘深い講義でありました。

本日はまたここで、第四日曜でございますけれども、教会へ行きかけましてから六〇年、伝道師になりましたから三〇年というこういうふうな、すなわち伝道師となりました第二の三〇年目の伝道の、初めの説教になるわけでございます。

こういうふうのエペソ書は不思議に私と関係がありまして、すなわち伝道二〇年の終わり、伝道三〇年の終わり、初めにエペソ書が引つかかっているわけであります。

エペソ書は学者によつてパウロが書いていないという学者もございますが、しかし大部分の学者は、これはやっぱりパウロが書いたであろうと、六〇から書いたであろうということになっておりますから、パウロの書簡ということになっておりますが、私はやはりすべての聖書の部分はロマ書と合わせ読む必要があると思うのであります。

ロマ書は、私はキリスト教のアルファでありオメガであると思うのであります。全てのキリスト教の真理がロマ書にちゃんと含んでいる。ちょうど玄米が日本人の人体が必要とする滋養分を全部含んでいるように、たとえにはならないかも知りませんが、私は、ロマ書は本当にキリスト教のアルファでありオメガである。どこを勉強する時にもロマ書と一緒に勉強する必要がある。

エペソ書のごときは、誠にダイヤモンドや真珠といろいろな宝石ばかりの書簡でありますけれども、ロマ書の理解がないときには、まるでめくらが色の浅い深いを論じ、耳しいたる者が声の好悪を言っているようなことになってしまいました。浮いてしまう。そうでありますから、どうしてもわれわれはロマ書を学ぶ必要がある。

特にロマ書の初めの一章から三章まで、「万人、罪人である、滅ぶべき者である」とあるという、これが分かってこなければ、聖書の真理は移ってこない。そうですから、われわれ何十年教会へ来ておりましたが、もう一遍ロマ書の一章から三章までを勉強する必要があります。

今申しますとおり、エペソ書の文句は実に金玉、宝石の文字でありますから、どの部分を取って題につけていか分らない。私はここでエペソ書の五章一節、二節を引いたわけですが、これはどの部分を引いても全くまばゆいばかりの、少しく信仰を教えられますとこの書の深さ、尊さが少しづつ分かるようであります。

以上、大観をいたしました。これからこの中に入って論じたいと思います。

いつもこの書簡のように、前半は信仰の問題。何を信ずるかということ論じている。それから後半四章から六章まで、これは行ないの問題。どう行なうかということ論じているわけであります。

そして一番初めの挨拶、一番最後の締めくくりの挨拶に、「恵みと平安とが汝らにあるように」と、こういうふうに関わりしてありますが、これがまたエペソ書全体の締めくくりであります。

エペソ書のみならず、新約聖書全体が結論は「恵みと平安とが汝らにあるように」と。われわれがロマ書を勉強しておりますと、これも浮いてしまう。「恵みと平安とが汝らにあれ」と言っても、何を言っているか分からない、少しも。どうしてもロマ書が分かっていなければ、「恵みと平安が汝らにあれ」と言っても、何か分からないですよ。

私ら六〇年読んでいるけれども、このごろ最近に分かってきた。「恵みと平安、汝らにあれ」ということはいに聖書の中心であるか、これが全体であるかということが。

「恵み」というのはいつも言っているとおり、イエス・キリストの贖いです。イエス・キリストの贖い、これを「恵み」と言う。これをまた「神の愛」と言う。聖書で「神は愛なり」と言ったら、「神は贖い主だ」ということです。それ以外ではない。われわれは恵みが分かっていると平安、われわれが神の子とせられ、永遠の命を頂き、そして天国を目当てとして生活する時に平安が来る。これはご利益。このご利益が無かったら、われわれは信者の看板を外す必要がある。そういう言葉であります。

初めの三章、すなわち一章から三章までは、「贖い」のことを書いています。贖いというのはいつも言うこと、もう繰り返す必要はないでしょう。神がキリストをこの世に下して十字架につけて、そしてわれわれの罪とが穢れ、すべてのものを処分して、われわれに永遠の命を与えてくださった。これを贖いという。これによってわれわれは神の子とせられ、永遠の命を頂き、天国に行く者としてもらった。これが一章から三章までに書いてある。次に四章から六章までにはすなわち、われわれはこれによっていかに行動すべきか。毎日生きている生き方は、われわれの信仰を表している。毎日の生活はわれわれの信仰が表れている。われわれの行ないというのは、われわれの心が表れてくるのですから。われわれの日々の行ないというものがわれわれの信仰を表しているわけでありませんが、そうですすから行ないというものは信仰の裏でありますから、一章から三章までに学んだ信仰がわれわれにどういうふうに表示されてくるかということ、表すべきであるかということが三章から四章に書いてある。そういう仕組みであります。

まず、第一章から第三章までのことをもう一遍、贖いのことですありますが、このことにつきまして、贖いの一

章から三章までのことについてちょっと語らせていただきます。

一章の三節から一四節まで、これは一つの文章。大分長い。一章の三節から一四節ですから半ページですが、これが原語では一つの文章です。一 sentence。パウロは大切になつてくると一 sentence になつてしまふ。一文です。そうですから、どこへどういふにかかるのか分かりにくい。これは非常に分かりにくいのでありますが、長い文章はまた素晴らしい、金銀宝石で成り立っているのですから。これも一つの例でありまして、三節から一四節まで半ページ、これが一つの文章。

この中に「神」「キリスト」「聖霊」という字が三四回出てくる。もちろん原語は動詞のかたちによつて主語を略しますから、「神」「キリスト」「聖霊」という文字は出ておりませんが、動詞の形でそれが出てきている。「神」「キリスト」「聖霊」は出てきている。そういうものを勘定しますと三四回、この一つの文章の中に出てきている。この大なる救いの贖いの内容、ならびに贖いの讚美、それを讚美しているわけですが、その中に三四回、「神」「キリスト」「聖霊」が出てきている。そうですから、キリスト教というものは「神」「キリスト」「聖霊」です。それ以外ではない。

「われわれの信仰」と言つてもこれは、信仰で救われるといつたら信仰は神からくださる。神から頂戴する。俺が信ずるといふ、そういう余地はない。そうですからキリスト教というものは、徹頭徹尾、「神」「キリスト」「聖霊」です。自慢することはできない。

ここに「キリストの奥義」という字がありますが、贖いというのはキリストの奥義です。神の奥義ですから、人間の生まれつきのままでは分からない。われわれの生まれつきの知識、知恵を超えている。そうですから、どうしてもこれは幼児のような心をもつて聖書の言葉を信じ、それに従うよりしようがない。そうですから、キリ

スト教は贖いであり、神の奥義であるから、われわれの知恵を超えているということをいつも知っておく必要がある。

次の四章から六章へ入りますと行ないの問題であります。これはいつも信仰から出てくる。信仰が裏になっている。裏表になっているわけです。われわれは神の子とせられた信仰、復活の望みと、われわれは日々、永遠無限の栄光に近づきつつあるんだ、この神の子たるの信仰と復活とが無ければ、これが出てこない。まねしてもこんなもの続かないですよ。それが出てくる。

それはどういうふうに出てくるかといったら、イエス・キリストを見たらよろしい。イエス・キリストの一生涯を見たら、非常にこれが参考になる。エペソ書五章の一節、二節には、「キリストにならえ」と書いてあるから、イエス・キリストがすなわちわれわれのこれが手本になってくるわけです。未信者の時にも、贖いが分からん時にもイエス・キリストが手本ですけども、信者になってもやっぱりキリストが手本になる。同じ手本でもだいぶ性質が違うけど、手本です、やっぱり、イエス・キリストは。

特にイエス・キリストが三〇年大工をしていたところを学ばなければいけない。われわれは人に見えることをしたい。人に褒められることをしたい。偉い者だ、と言ってもらいたい、われわれは。イエス・キリストは無限の力を持って、人間としては最高の力を持っていらっしやっただけでも、大工。筋肉労働者。低い筋肉労働者を三〇年やっておられた。こういうことは、神の子たるの信仰、復活の望みがなければできない。一年や二年はやれるけども、一〇年、三〇年は続かないですよ。これは神の子たるの信仰、復活の望みを持っていらっしやるからこういう芸当ができる。

行ないというものはいつも言うとおりに、四章から六章までには「神の意思をなす」。「神の意思をなす」という

ことは具体的にいえば、われわれの日常の目の前の義務をなすことです。われわれの日常の目の前の、自分のなしたいことをなすのではなくして、なすべきことをなす。これが愛という。パウロは「信、望、愛、このうち最も大いなるものは愛なり」と言った。そうですから何遍も何遍も言いますが、われわれが自分のなしたいことをなすのでなくして、なすべきことをなす。ここに人類の幸福はかかっている。

ペテロ、ヨハネは無学のただ人、と人が言いました。事実、そのとおりです。しかし彼らは聖霊を受けて神の子とされ、復活の望みを持っておりましたから、目の前のことをなす力を持っていた。首が千切れても自分のなすべきことはなした。そういう力を持っていた。私は、彼らは人類の教師であると信ずる。

われらも信仰相応に、自分のなしたいことをなすのでなくして、自分のなすべきことをなす力を神から頂きました。力が問題です、力が。無い袖は振れない。力の無い者は何もできない。そうですから神から聖霊を頂いて、力を頂いて、われわれは分相応のすなわち奉仕をしたい。これが四章から六章まで。

それから最後に、有名な四章から六章までの最後のところに、六章の一〇節「最後に言う。主にあって、その偉大な力によって、強くなりなさい」と。これはこの前に申し上げましたとおり、ここに「力」という字が、強くなるという力ですが、イエス・キリストの力の、その力によって、イエス・キリストの力の力、「力」という字が三つ来ている。「強くなりなさい」、これは受け身でありますから、「強くさせてもらいなさい」という受け身です。自分で強くなるのではない。原語は受け身。

そうですねからこの一節に、私は力が問題だと言いましたが、ここに「力」に関する字が三つ出てきている。イエス・キリストの力、その偉大な力によって、強くせられよ。これです。力が無ければ行ないができません。口でいくら言っている、愛が実行できない。

この聖霊による力、己に勝つ力、この力に人類の幸福はかかっている。家庭の幸福も、職場の幸福も、社会生活の幸福も、国際間の幸福も、どれもこれも皆、この力にかかっている。

そしてこれは、この前にも言いましたごとく、第六章一三節「それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけよ」。抵抗し、堅く立つ、この二つのことをするために。「できる」という字は受け身です。また。「うる」という字が受け身です。

“be able” という字の受け身ですから、英語では表わせない。これは。そうですから「抵抗し、完全に勝ち抜くことができるように、神様にしてもらいなさい」ということです、原語は。これはどうしたらいいかというたら、「神の武具を得られよ」って書いてある。これは一章から三章までに習った信仰です。これによって強くしてもらおう。

そして、一章から三章までの信仰の結論は贖いでしよう。その贖いの結論は、ロマ書一〇章一二節によれば、「贖いの恵みは主の名を呼び求める者に与えられる」と書いてある。そうですから、贖いの力を得るのには「主の名を唱える」ということが最も手近な方法です。

そうですから「強くせられる」というこの一〇節は、「主の名を呼べ」。主の名を呼んだら強くせられる。実行しましょう。

この「主の名を呼ぶ」ということは、一〇年前には私は分からなかった。一〇年前にはまだ、ロマ書一〇章一二節「神の無限の富が主の名を呼ぶ者に向かっている」というあの原語の意味が分からなかった、しかし、一〇年たちまして、この「強くせられる」という具体的方法、「主の名を呼ぶ」ということが、私には現在非常に嬉しく思うのであります。

内村先生は「咲く花は多し、されど実となるは少なし。実となるは多し、されど熟するは少なし」と言われた。そのようにわれわれはどうしても、成熟するためには聖書の勉強が必要です。聖書の勉強無くしてキリスト教は無。どうしても聖書を知る必要がある。

そして聖書の真理は言うとおり、贖いです。奥義です。これは人間の知恵を絶している。私の言葉で言えば、外国語です。使わなければ忘れる。毎日これを使う必要がある。

私は大正六年一〇月の第三日曜日に初めて教会へ行きましたが、教会へ行く時に、当時外交官を希望しておりましたから英語を勉強しに行つた。そして聖書も学びたいというのは、これは副、大きな希望ではない。主として英語を学びたいから行つた。そして第三日曜日に行きましたその目的が、やがて達せられた。英語を勉強したい目的が達せられまして、現在少しく英語は読めるようになった。それから副産物である聖書を知りたいということも、少しく皆さんのおかげでさせていただきました。聖書の真理というのは英語の勉強とよく似ている。毎日やらなければ落第です。よろしいか。英語の勉強と信仰とは、よく似ている。毎日使わなければいけない。

英語を勉強するのに辞書を引くのも、英英辞典で引かなければいけない。鈴木秀夫君もここにおりますが、われわれの高等学校では幸いに畔柳という英語の先生がいた。この先生が勉強をさせる時に、必ず英英辞典。英英辞典でも小さい英英辞典ではない。スタンダード・オックスフォード、この辞書が図書館に一〇冊ほど置いてある。必ずこれを引いてこい、と言われた。そうですからわれわれみたい力に力のない者でも、あの大きな辞書を引いてやった。組は四〇人ほどでしょう。そうですから直に当たる。その辞書を引いてなければいけないように「その他にどんな意味があったか」と先生が聞く。そうですから必ずその辞書を引かされた。そうですから幸い

に、私や鈴木君は英英辞典を引くことに慣れた。これが幸いした。学生時代に大きな辞書を引いたから、このごろでも英語の辞書を引くのはちつとも苦痛ではないですよ。ご存じでしょう、スタンダード・オックスフォード・デイクシヨナリーは大きいですよ。

そうでしたから、英語を勉強するには英語を引かなければいけない。聖書の真理は聖書の文句によらなければいけない。聖書は聖書によって分かる。聖書の文句は最も有力な注解書です。諸君、聖書を読みましょう。

【祈り】在天の父様、誠に足らざる聖書の講義をいたしました。主よ、聖霊をもって清めたまえ。御名によって祈り奉る。アーメン。

あとがき

本書の著者元日本基督教団高円寺東教会牧師小西芳之助先生は、今から三五年前一九八〇年四月九日満八一歳で召天されました。高円寺東教会は、小西先生が召される直前の一九八〇年三月に解散しました。高円寺東教会の解散後は、約一四〇名いた教会員は、いろいろな教会へ籍を移しました。

小西先生の信仰の忠実な継承者であった石館基氏は、高円寺東教会と同じ土地にあったご自分の家庭で高円寺家庭集会を始め、二〇一一年一月病気のため閉じるまで、毎月二回、三一年間も家庭集会を続けられました。その間石館基氏は、集会で聴いた小西牧師の講解説教テープから、『ロマ書』、『コリント第一の手紙』、『コリント第二の手紙』、『ガラテヤ書』の四冊の講解説教集を編集発行され、また小西牧師の略伝『天国の外交官』を出版されました。石館基氏は、二〇一四年一月一六日八二歳で天に召されました。

石館基氏が家庭集会を閉じられた後は、佐生健光と山口周三が中心になって、東京都目黒区都立大学駅の近くにある今井館聖書講堂の集會室をお借りして、高円寺東集會と名前を変え、毎月第二、第四日曜日に、小西先生が遺された講解説教の録音テープにより礼拝を続けています。

本書に収められた小西先生の講解説教は、一九七六年から一九七八年にかけて最晩年に行なわれた説教であり、ロマ書一〇章一三節の称名の重要性を強調する箇所が随所に出て参ります。小西先生の講解説教は関西弁でしたが、本書を編集するに際しましては、標準語に直しました。祈禱は第一講と第二四講のみに収めました。また、本書で引用している聖書は、「口語訳」（一九五四年改訳）であります。

筆者は、二〇一〇年二月、テマサ・トラベルの『トルコ・パウロの旅』に参加し、エペソを訪問しました。エペソには、古い町の遺跡が残っており、巨大な円形劇場、立派な図書館、大きなヨハネ教会の跡などが残されて

いた。このトルコ旅行以来、私は、エペソがキリスト教の形成過程で、重要な役割を果たしたのではないかと考えるようになりました。そのように考える理由は、次のとおりであります。

- ①パウロ亡き後、パウロの第二次、第三次伝道旅行に随行したテモテがエペソ教会の監督になったと言われること。テモテは、パウロといつも一緒にいたから、パウロがどこの教会に手紙を書いたか知っていました。
- ②テモテの後、オネシモという人がエペソ教会の監督になったこと。監督オネシモは、ピレモン書に出ているオネシモと同一人物であるという学者がいること。
- ③エペソには、大きなヨハネ教会の跡がありますが、ヨハネがエペソに住み、ヨハネ文書を書いた可能性がありません。
- ④パウロ書簡は、紀元一四〇年頃、ローマでマルキオンという人が集め、編集したといわれますが、パウロ書簡が執筆された紀元五〇年代と紀元一四〇年までの期間が長すぎると思います。その間誰かが、パウロ書簡を部分的に蒐集し、編集を行っていたに違いない。それがテモテ―オネシモを中心とするエペソ教会に連なる人達ではなかったかと思えます。
- ⑤ローマの獄中で書かれた書簡とされるピリピ書も、エペソの獄中で書かれたと考える方がつじつまが合う部分が多いように思います。
- ⑥コロサイ、ラオデキヤ、ヒエラポリスは、エペソの近く（地図で測れば、二〇〇km位の距離）であり、エペソ教会が中心になって、これらのエペソ周辺の教会を指導したと考えられます。
- ⑦ヨハネの黙示録に出てくるアジアにある七つの教会は、①エペソ、②スミルナ、③ペルガモン、④テアテラ、⑤サルデス、⑥フィラデルフィア、⑦ラオデキヤですが、エペソからそう遠くありません。エペソ教会が中心になってエペソ周辺の教会を指導したと思われれます。ヨハネ黙示録が書かれたパトモス島も、エペソからそう

遠くありません。

⑧ ヒエラポリスには、ピリポの教会があり、ピリポが住んだという説明を聴きました。

⑨ エペソには、マリア教会があり、イエスの母マリアをヨハネが晩年あずかり面倒を見たという説明を聞ききました。

⑩ エペソは、ギリシアのコリントと、エーゲ海の対岸の位置であり、結構船による行き来が会ったようであり
ます。

以上のように、パウロの第三回伝道旅行の伝道によって生まれたエペソ教会が、パウロ亡き後、パウロ書簡の蒐集を通じて、キリスト教思想の形成に非常に重要な役割を果たしたのではないかと考えるようになりました。

まことに大胆な素人の推測ではありますが、どなたか聖書学者の方が、この考えを検証して頂くことを期待する次第であります。また、エペソ書は、題名にエペソという地名がなく、エペソの近くにあった諸教会に宛てた手紙と解することも有力ですので、この地域にあった諸教会の形成に大きな役割を果たしたと考えられます。

いつも励まして下さり、いろいろな形で暖かいご援助を賜りました千葉県佐倉市、新潟県胎内市、福井県敦賀市にお住まいの元高円寺東教会の姉妹の方々、エペソ書講解説教を共に聞いて下さった高円寺東集会の皆様、テ
ーブル起しをして下さったユウエス・プランニングの方々、出版を引き受けて下さった横浜大気堂の方々に、ここに厚くお礼申しあげます。

本書をお読みくださる皆様の上に、聖霊豊かに降り、主の御恵み豊かならんことを祈ります。

二〇一五年六月

【小西芳之助 関連出版物】

- 『その時の喜びや如何』（小西芳之助先生召天記録） 発行者小西美江 昭和五五年一月
- 『小西芳之助先生余芳』 元高円寺東教会共励会 昭和五六年九月
- 小西芳之助『ローマ人への手紙講解説教―恵心流キリスト教』 キリスト新聞社 平成六年九月
- 小西芳之助導源『主の御名を呼ぶ』 石館基編 高円寺家庭集会 平成一二年四月
- 小西芳之助『コリント第一の手紙講解説教』 高円寺家庭集会 平成一五年五月
- 小西芳之助『コリント第二の手紙講解説教』 高円寺家庭集会 平成一六年一月
- 小西芳之助『ガラテヤ人への手紙講解説教』 高円寺家庭集会 平成一六年一月
- 『天国の外交官 小西芳之助・恵心流キリスト教』 石館基編 高円寺家庭集会 平成二二年四月

（お問い合わせ先）

山 口 周 三 二二四一〇〇一五 横浜市都筑区牛久保西二一四一二八

shuzo_yamaguchi@tmtv.ne.jp

小西芳之助（こにし よしのすけ）

明治31(1898)年、奈良県に生まれる。第一高等学校、東京帝国大学法学部卒、安田信託銀行を経て、49歳より、キリスト教伝道者に転身。以後日本基督教団高円寺東教会牧師として、31年間にわたり、福音の伝道に尽力。特に内村鑑三及び恵心僧都の信仰から大きな影響を受け、晩年、恵心流キリスト教と称した。昭和55年、満81歳で昇天。著書に『ローマ人への手紙・講解説教』他がある。

小西芳之助導源

エペソ人への手紙 講解説教

（平成二七年九月一日 初版発行）

編者 高円寺東集会 （代表 佐生健光・山口周三）

〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西一丁目四二八 山口周三方
電話・FAX 045-912-1960
携帯電話 080-1232-0905
Eメール shuzo_yamaguchi@tmtv.ne.jp

発行所 高円寺東集会
印刷 横浜大気堂

〒231-0016 横浜市中区真砂町四丁目四〇
電話 045-641-4161
Eメール oguri@taikido.jp

